

雪

小樽スキー連盟 **100**周年記念誌 シュプール

跡

小樽スキー連盟



## 発刊に寄せて

小樽スキー連盟

会 長 青 山 勝

創立85周年から15年が経ち今年創立100周年をむかえる事ができました。

明治時代の終わりに、日本にスキーが伝来したそう明期の大正2年、苫米地英俊・奥谷甚吉氏等で、オタルスキークラブを旗上げた事が記録として残っている。私達はこれを小樽スキー連盟の誕生と考えております。

この間、大正12年には、緑ヶ丘スロープで第1回の全日本スキー選手権大会を開催していますし、国民体育大会冬季大会スキー競技会も4回開催しています。

さらに、地元の小樽小学生アルペン大会は62回を数え、今後も継続して行く大会と思っております。

一般のスキー指導の面でも広く市民への普及・振興につとめ、数多くのスキー指導者を養成しているところです。この様な取り組みからスキーのメッカ小樽と言われる由縁と思っております。

今後は幾多の先輩諸氏が、苦勞を重ねて築き上げた伝統を、次の100年へ向けて進んでいきたいと思えます。

少子高齢化が進行する中で、スキー離れも深刻ではありますが、市民と共にスキーを通して地域貢献の出来る小樽スキー連盟でありたいと思えます。

終わりになりますが、関係者の皆様に感謝を申し上げますとともに、益々のご健勝とご発展をご祈念申し上げ発刊の言葉と致します。



## 「小樽スキー連盟100年史」発刊を祝って

小樽市長

中松 義治

小樽スキー連盟発足100周年の節目にあたり、ここに輝かしい歩みとともに、先人達の御功績を讃え、記念誌「小樽スキー連盟100年史」を発刊されますことを、心からお祝い申し上げます。

貴連盟は、大正2年の「小樽スキー倶楽部」を前身として、大正10年に創立され、以後長きにわたってスキーの普及発展に大きく貢献されてきました。世界を席卷する数々のトップアスリートを輩出し、また、4度の国体や全国・全道大会を開催・運営されてきました。

それは、ほぼ同時期に創立された北海道スキー連盟と歴史をともに歩み、小樽市が起伏に富んだスキーに適した地であったからこそ、北海道のスキー界のリーダーとしての役割を果たすことができたといえます。

また、スキーの競技面ばかりではなく、一般スキーにおいても、各種講習会や検定会などを開催し、市民スポーツとしてのスキーの普及発展や指導員の養成に寄与されて参りました。

郷土小樽のスポーツ振興と市民の健康増進に大きく寄与されましたことは、誠に喜ばしく、貴連盟の発展と充実に心血を注がれ、御尽力されました会長様をはじめとする会員各位に、深く敬意を表するものであります。

本市といたしましては、近年のスポーツに対する関心の高まりとともに、市民が望む生涯スポーツ社会の実現に向けた事業とスポーツ活動の実践を推進するため、その充実・発展に一層努力していかねばならないものと考えておりますので、今後とも貴連盟の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

スポーツ振興を通じた市民一人ひとりの明るい生活が、先人達の願いをより大きく発展させ、明日の小樽の発展に大きな原動力となるものと確信し、貴連盟の一層の御発展、御活躍を期待するものであります。

終わりに、記念誌「小樽スキー連盟100年史」の編さんに御尽力された皆様に敬意を表するとともに、会員各位の御健勝を祈念いたしまして、お祝いのことばいたします。



## 100周年に寄せて

財団法人 全日本スキー連盟

会長 鈴木 洋 一

この度、小樽スキー連盟が発足100周年を迎えられ、その輝かしい足跡を記した記念誌が発刊されますことを心よりお祝い申し上げます。

小樽は、本連盟にとって第1回の全日スキー選手権大会開催地であり、記念すべき第1回大会で地元のクロスカントリー1kmで小樽中学の上野秀磨さんが優勝、リレーでも小樽商業が優勝を飾るなど、輝かしい日本スキー競技史のスタートを飾りました。その全日本スキー選手権大会が開催される10年以上も前に現クラブの前身であります「小樽スキー倶楽部」が発足していたことを思いますと、競技王国構築に大きな影響を与えた小樽スキー連盟の存在の大きさには驚くばかりです。改めて関係者の皆様のご努力に深く敬意を表するものであります。

今日まで日本のスキー競技をリードしてきた足跡には輝かしいものがありますが、中でも1936年、ドイツのガルミッシュパルテンキルヘンで開催された第4回冬季オリンピックでは、ジャンプに出場した4選手がすべて小樽出身者という偉業があります。第3回大会と連続して出場したジャンプの安達五郎さんは、当時では考えられない8位という好成績を収められ、戦時ムード一色の国民に明るい話題を提供してくれました。

その後もアルペン選手、ジャンプ選手をはじめ多くのオリンピック選手を輩出されましたことは周知の事実であります。

近年、少子化とそれに伴う子供のスキー離れ、雪不足などスキーを取り巻く環境は厳しいものがあります。全日本スキー連盟といたしましても、世界に通用する選手の強化・育成とともにスキー活性化を図るべくキャンペーンを展開しておりますが、小樽スキー連盟様におかれましても100周年をひとつの節目して、選手の育成、そしてスキー活性化にさらなる飛躍を遂げられるよう関係各位のご健勝とご活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



## 祝 辞

公益財団法人 北海道スキー連盟  
会 長 伊 藤 義 郎

小樽スキー連盟創立100周年に当たり、こころよりお祝い申し上げます。

大正2年（1913）10月に小樽在住の有志らにより「小樽スキー倶楽部」を創立され、以来今日まで多くの方々によりスキーの普及・振興に尽力されてこられたことと推察いたします。

まだ全日本スキー連盟が創立されていない大正12年（1923）に小樽スキー倶楽部によって第1回全日本スキー選手権大会が開催され、まさに日本のスキー発展の先駆けになっていったといえます。

これまで貴連盟によって国民体育大会スキー競技会、全国高等学校スキー大会、中学校スキー大会、北海道スキー選手権大会等多くの競技会が開催されており、全国のスキーヤーにとって忘れることのできない小樽でもあるとおもいます。また、貴連盟は、早くから選手強化にも力を入れられ、全日本スキー選手権大会での活躍や国民体育大会での北海道の天皇杯獲得に多くの選手が活躍されています。そして、オリンピックでは日本代表として多くの選手が活躍されメダルも輩出されています。

一方、北国の人々が長い冬の間の豊かな生活を実現するためにスキーの普及・振興を目的とし、講習会や級別バッジテスト、指導者検定会など様々な活動も展開されてきました。

このように、これまで貴連盟が歩まれた足跡は北海道のみならず日本のスキー発展に大きな役割を果たされ、これも一重に多くの関係者のたゆまぬ活動と努力の賜とこころより敬意を表する次第であります。

これから、ますます難しい社会状況になる中、一人ひとりが生きがいや感動をもつことのできる心豊かな社会にするために、これまで貴連盟が将来に向けて今後ますます発展されることを祈念申し上げてお祝いの言葉といたします。



## 祝いのことば

特定非営利活動法人 小樽体育協会  
会 長 外 園 光 一

小樽スキー連盟が本年、発足100周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

小樽体育協会の前身の小樽体育連盟は昭和2年に発足しましたが、それより前に小樽ヘスキーが入ってすぐの大正2年には小樽スキー倶楽部が誕生しています。小樽の地形からしてまもなく、スキーは市民の間にも広がり、初代会長、理事長などの熱心な活動もあり、小樽のスキーは黄金時代を迎えることになりました。市内に多くのジャンプ台もあり、ノルディック、アルペン問わず優秀な選手を輩出し、ジャンプではオリンピックでメダルをとっています。また、第1回全日本スキー選手権大会をはじめ、多くの全国規模の競技大会が小樽で開かれました。

個人的には思い出ですが、小学校時代、三角山や天狗山でスキーをした後、スキーをはいたまま自分の家まで帰ったり、小樽公園の段差を利用してジャンプをしたり、カンダハーの金具を敢えて緩めてノルディックの距離を走ったりしていました。昔から小樽といえばスキー、スキーといえば小樽というように小樽はスキーのメッカです。

これまでこの長く輝かしい歴史を持つ小樽スキー連盟を支えてこられた多くの役員や関係者の方々の熱意と活躍には敬意を表します。

小樽体育協会の事業をして優秀選手・団体顕彰があり、全道大会優勝や全国大会6位以内入賞の個人、団体が対象となりますが、今年もスキー連盟からの推薦で個人、団体ともに顕彰を受けています。

終りにあたり、貴連盟の今後益々のご発展と役員ならびに会員の皆様の御健勝を祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

## コラム1 校名の変遷

- 小樽高等商業学校(1910)→小樽経済専門学校(1944)→小樽商科大学(1949)
- 庁立小樽中学校(1902)→道立小樽高等学校(1948)→北海道小樽潮陵高等学校(1950)
- 庁立小樽高等女学校(1906)→道立小樽高等女学校(1947)→  
道立小樽女子高等学校(1948)→北海道小樽桜陽高等学校(1950)
- 庁立水産学校(1905)→庁立小樽水産学校(1907)→道立小樽水産高等学校(1948)→  
北海道小樽水産高等学校(1950)
- 庁立小樽商業学校(1913)→道立小樽商業学校(1947)→道立小樽商業高等学校(1948)→  
北海道小樽緑陵高等学校(1950)→北海道小樽商業高等学校(1966)
- 庁立小樽工業学校(1939)→道立小樽工業学校(1947)→道立小樽工業高等学校(1948)→  
北海道小樽千秋高等学校(1950)→北海道小樽工業高等学校(1968)
- 私立小樽商業学校(1901)→私立北海商業学校(1915)→北海商業学校(1919)→  
北照高等学校(1948)
- 小樽実践女学校(1907)→小樽双葉高等女学校(1927)→小樽双葉女子学園高等学校(1948)→  
北海道龍谷学園双葉高等学校(1998)
- 小樽青峰高等学校(1953)→小樽昭和高等学校(1956)→小樽明峰高等学校(1995)
- 小樽市立中学校(1925)→小樽市立長橋中学校(1947)
- 小樽市立高等女学校(1923)→学制改革により廃校(1949)



- 小樽スキー倶楽部の誕生 (1912年：大正元年10月28日)
- 小樽スキー伝来 (1912年：明治45年2月21日)
- 小樽最初のスキーゲレンデ (小樽市緑3丁目近辺)
- 大正6年日本ジャンプ競技発祥の地 <緑3丁目>
- 大正12年「第1回全日本スキー選手権」<おたる緑ヶ丘>
- 昭和3年 日本人初参加の冬季五輪に出場した伴 素彦 (樽中・稲穂小卒)
- ヘルセット中尉 (昭和4年)・シュナイダー (昭和5年) の小樽訪問
- 小樽が生んだ「キングオブスキー」 関口勇 (北海商業出、現：北照)
- 昭和11年第4回ガルミッシュ冬季五輪の驚異
- 昭和14年 教育部の原点 (スキー指導員検定会・山形県五色温泉)
- 関戸一族 (距離・複合) と冬季五輪出場スキー女子第一号になった加藤富士子 (三馬ゴム)

## 小樽スキー倶楽部の誕生 (1912年：大正元年10月28日)

明治45年7月11日、レルヒ中佐は赴任先の旭川を出発し樺太への旅行中に小樽を訪れ越中屋に宿泊した。午後3時に小樽駅に到着した列車に奥谷甚吉記者 (小樽新聞) が乗り込み中佐と再会した。奥谷はレルヒが旭川でスキー術を指導した際にスキー講習会取材し、4月には羊蹄登山に同行している。レルヒは「小樽にスキー倶楽部のできることを切に願う」というメッセージを残し小樽を去っていた。

明治45年7月、明治天皇の崩御により、7月30日に大正元年が始まる。奥谷甚吉記者、小樽高等商業学校 (略称：樽商大、現在：小樽商科大学) 渡辺龍聖校長、苫米地英俊講師らは小樽スキー倶楽部創立に向け奔走し、大正元年10月28日北海道で最も古くからあるスキー倶楽部が小樽に誕生した。小樽新聞会議室で集会が開かれた様子が新聞記事に掲載されている。



小樽新聞記事 (大正元年10月30日)

スキー倶楽部の最初の仕事は資金集めだった。大正期、北海道で最も好景気にぎわいをみせていた小樽は、会社や個人から多くの寄付金が集まった。それを元手にスキーを購入し、市民に無料でスキーを貸し出した。苫米地らがスキー講師となり小樽高商付近にて毎週水曜と土曜午後2時にスキー講習会を指導し組織的に普及していった。



初代小樽スキー倶楽部会長には、小樽スキー術伝来のきっかけを作った樽商大初代校長渡辺龍聖が就き、大正10年に第2代伴房次郎校長、第3代苫米地校長が小樽スキー倶楽部歴代会長に就任し、高橋次郎教授は第4代会長として戦前から戦後にかけて樽商大校長教授が会長を代々歴任していた。

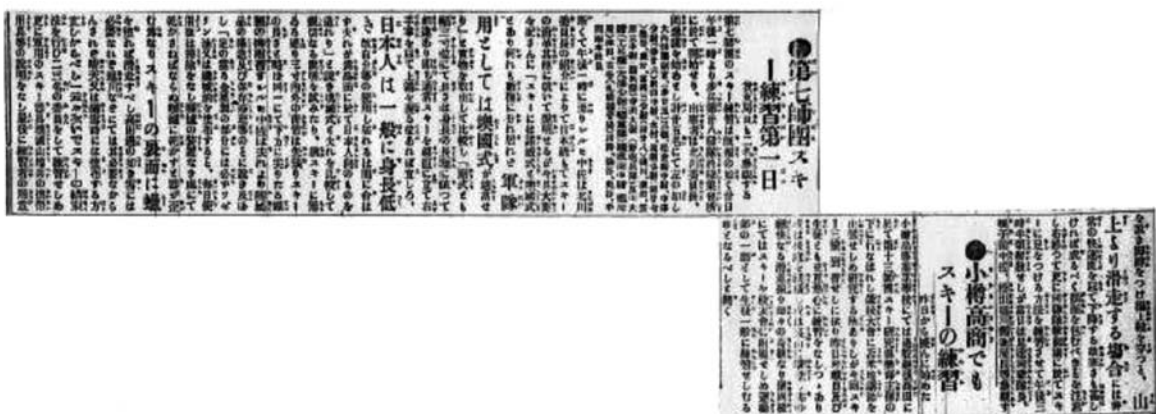
第2代伴会長の時代には第一回全日本スキー選手権を主管し日本スキー競技における歴史的幕開けを飾ったといってもいいだろう。

## 小樽スキー伝来（1912年：明治45年2月21日）

日本へ最初にアルペンスキー術を伝え「日本スキーの父」とも名づけられているオーストリア将校のレルヒ少佐・テオドール・エドレル・フォン・レルヒは、明治45年2月旭川第7師団に着任し、北海道へスキー術を伝えた功績は広く称えられている。一方、レルヒのスキー術が新潟高田からのルートで小樽へ伝来している事実は世の中にあまり知られていない。

明治45年2月（1912年）樽商大渡辺龍聖校長は、学生の冬季の運動にスキーを採用するために、苫米地講師を新潟県高田へ出張させた。レルヒのスキー術をマスターした苫米地は、明治45年（1912年）2月21日小樽高商（樽商大）正門前の地獄坂で初のスキー練習会を開き、小樽のスキーが始まった。これは、旭川第7師団でレルヒのスキー研究第1日が開始された雪上講習日と同じ日である。当時の旭川のスキーは軍用目的に普及することがねらいだったが、小樽では教育目的に一般庶民や学生など民間へスキー術を広めたことに大きな意味があった。

越後高田より帰樽した苫米地は「当地よりスキー3台を持ち帰り、さっそく地獄坂山上にて生徒職員達と熱心に練習する」様子が当時の小樽新聞に連日伝えられている。レルヒが北海道で最初に開催した旭川第7師団のスキー練習第1日の記事と並んで、練習会の記事が「小樽高商でもスキーの練習」の見出しとともに掲載されている。



明治45年2月22日小樽新聞

## 小樽最初のスキーゲレンデ（小樽市緑3丁目近辺）

小樽商業高校（略称：樽商）近辺の緑町一帯のゲレンデでは絵葉書に一本杖でスキーを練習する姿が映し出されている。ここでは、大正12年第1回全日本スキー選手権が緑町で開催され「全日本スキー選手権発祥の地」、「日本ジャンプ競技発祥の地」、そして北海道における「もうひとつのスキー発祥の地」として最も盛んな地域としてスキーが発展する。

リフトがない時代、坂道のある市内各所至る所でスキー練習が行われていた。市内中心地に近い小樽公園では、仕事を終えたサラリーマンが照明の下でスキーの練習をしていた。聖ヶ丘、市内各所の公園や空き地などの坂道で市民がスキーを楽しんでいる。

明治から昭和期にかけて小樽商業高校近辺から、からまつ公園、伍助沢を通り地獄坂を抜ける小樽商大前の道において距離競技が行われ、現在はからまつ公園から旭展望台へ向けてコースが完成している。



小樽緑3丁目は冬の情景を映した絵葉書（いろは堂）になっていた。

## 大正6年日本ジャンプ競技発祥の地 <緑3丁目>

大正6年厳冬、小樽中学（略称：樽中、現：小樽潮陵高校）出身大矢敏範（東北帝国大学農科大学、略称：農大、現：北大）らが造った仮設ジャンプ台がその緑ヶ丘（小樽市緑3丁目付近）にあった。仮設ジャンプ台は小さな木造の台で、樽商大下、樽商裏手の急斜面に作られていたと推察される。大正5年12月には地獄坂において農大スキー部の合宿が行われており、当時、地獄坂のある緑ヶ丘はスキーの合宿地として最適だった。

「ある時、遠藤吉三郎先生（農大教授）と私ら数人で大矢君の練習を見に行った。みんなでジャンプ台を造ろうということになって、先生も金づちを振って板を打付けてました。その時、大矢君の飛距離は実際に計測していないので、はっきりわからないがみんなで目測18メートルと決めた。本当のところは15、6mだったかもしれません」と当時農大学生だった木原均は語っている。その様子は遊びの中から生まれたジャンプのようであるが、ジャンプに挑戦した記録が「緑ヶ丘」から生まれている。

大矢の回顧によれば、少年期よりスキーに高い関心を持ち明治44年3月には外国の活動写真を見てスキーらしきものを自作した。翌年1月にはスキーの作り方を小樽の宣教師バレットよ

り聞き2台目のスキーを作り小樽中学4年時(17才)に山の上から滑降し、制動回転ができるようになっていたらしい。これはレルヒ中佐のスキー術伝来以前の事である。大正2年2月、彼は小樽スキー倶楽部が主催する練習会に出席し、直滑降、回転、ジャンプを習い、その後ジャンプを独学で行っていた。

小樽の丘陵には子供達が作った自家製ジャンプ台は数知れずあった。小樽の少年にとってジャンプは小さい頃から雪遊びのひとつだった。遊び半分に飛んでいた少年や学生達が数多くいて、ジャンプ王国小樽と呼ばれるだけの自然環境がそこにあった。このような環境の中、当時小樽で暮らしているスキーヤーが日本の代表選手に育っていくことは当然だったのかもしれない。

昭和初期、小樽市奥沢町出身の名ジャンパーだった浅木文雄(北商一明大)は「私が子供の頃には裏山が崖になっていて、子供達はそれぞれスコップで雪のジャンプ台を造り、それが何十と並んでいた。幼児用の数メートルのものから15m、20m級。日曜日などは朝から晩まで飛んでいました。玄関からスキーをはいて出られたし、冬の遊びといたらスキーしかなかった時代ですからね」という。

大正期、小樽市として唯一のシャンツェが設置してあった緑町(樽商裏)では地主の理解が得られず、大正14年シーズンを最後に切り崩されている。困り果てた小樽スキー倶楽部は、昭和2年「東洋一のシャンツェを小樽につくる」と全市に募金を呼びかけ、「天狗山シャンツェ」を完成させた。

昭和4年1月には北海商業学校(略称:北商、現北照高校)には20m級程度の「北商練習シャンツェ」があった。ヘルセット中尉らコルテード・スネルスルード両氏が模範ジャンプを行い、数千人の観衆が押し寄せたこともあった。この頃練習台として少年や学生らにとっては便利で立地が良かった。

昭和5年12月7日、ジャンプコーチ秋野武夫は、樽中校友会会長で北の誉社長野口喜一郎より700円の金銭的援助を受けて、20m級の「樽中シャンツェ」を小樽中学校の玄関前に完成させた。同氏の次男野口正二郎がジャンプをしていたことも幸いした。

その後、同氏の資金援助のもとで小樽スキー倶楽部は昭和6年(1931年)11月奥沢町に30m級の「小樽シャンツェ」を「樽中シャンツェ」裏側の斜面に造った。アプローチの長さ42m、ランディングの長さ97m、台の高さ2mで、飛躍距離は30~35mであった。この「小樽シャンツェ」は「樽中シャンツェ」の頂上と背中合わせになっていた。

同年12月にヘルセット中尉の指導のもとで樽商大の校内に50m級の「高商シャンツェ」が建造される。同時に炊事宿泊できる合宿所が造られた。

昭和8年7月、50m級の「小樽記念シャンツェ」は、野口喜一郎氏が小樽潮見ヶ丘の自分の敷地内に工費2万円を出して昭和8年7月に完成、竣工後は小樽市に寄贈した。

花園公園には12m級・20m級・30m級シャンツェの3基が並んでおり、長靴メーカーの日東ゴムが建設費を負担したため日東シャンツェと呼ばれていた。第二次世界大戦前、小樽には、北商練習シャンツェ、天狗山シャンツェ、高商シャンツェ、樽中シャンツェ、小樽シャンツェと小樽記念シャンツェがあり、ジャンプ王国が築かれていった。

昭和8年春、大野精七(北大)がノルウェーのスキー50年祭に招待され、帰国後の報告でノルウェーではシャンツェに夜間照明があり、夜までおそくまで練習していたと語った。これを聞いた樽中関係者は、昭和9年12月全国で初めての点灯を設備した。ジャンプ練習の環境は、全国一といえるまでに整備され、選手は朝明るくなるのを待ってジャンプ台に行き、放課後は

勿論、夕食後も夜遅くまで飛びつづけていた。こうして樽中出身のジャンパーを昭和11年冬季五輪に4名出場させるに至った。

この夜間照明のシャンツェには、冬季五輪に出場した多くの小樽出身のジャンパーがヒュッテに合宿し、現役と一緒に練習したので、技術上でも学ぶ事が多かった。時には樽中生ばかりでなく、名ジャンパー浅木文雄（北商一明大）も、小学生のころからここを飛んでいたという。

## 大正12年「第1回全日本スキー選手権」

〈おたる緑ヶ丘〉（小樽緑ヶ丘、現：緑3丁目）

苫米地が小樽へスキー術を伝えてから11年後、大正12年2月10日に日本スキー史に残る第1回全日本スキー選手権が樽商大を眼下に望む小樽緑ヶ丘（現在の緑3丁目の住宅地）にて開催された。この大会は昭和後期まではオリンピック派遣選手選考会も兼ねる名誉ある最も古い日本の公式スキー大会である。

初めて大会を主催したのは大日本体育協会（現日本体育協会）であるが、大会運営は小樽スキー倶楽部にすべて任されていた。一度解散していた小樽スキー倶楽部は、実業界を中心に樽商大スキー部学生高橋次郎・讃岐梅二と小樽から北大へ通学するスキー部学生南波初太郎・青木三郎が4人組となって団結奔走し、梅屋運動具店村住美喜三、北海道炭鉱汽船黒崎三市らによって大正10年9月25日に再創立された。会長には樽商大第2代伴房次郎校長が就任し、理事長には黒崎が就いた。

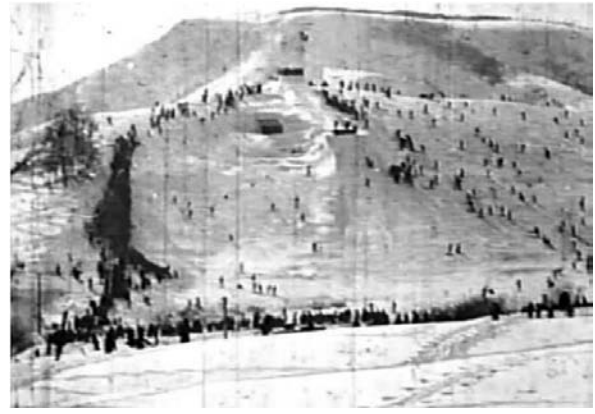
小樽スキー倶楽部は主催者へ綿密な働きかけをして大会開催に成功し着々と準備をしていった。過去にも当地で大きなスキー大会を開催した経験のある小樽スキー倶楽部の実績や組織、地域性などは高く評価されていただろう。初めて開催される名誉ある大会ゆえに運営や競技規則制定などの業務量は莫大だったはずである。実際に大会を運営した倶楽部関係者の計り知れない努力と苦労は大きく評価されて然るべきだろうし、日本スキーの発達に果たした役割は大きい。小樽へのスキー術伝来から11年余りでの全国大会開催に至った経緯を考えると、小樽の人々がスキーの普及振興に貢献し、日本の中で最もその勢を増して発展した舞台となっていたのが、小樽市緑3丁目のスロープだった。スキーの大衆化に併せるように「スキーの競技化」は、その後から今日に至るまでスキー用具と技術の発展を加速させ、開発競争にしのぎを削る時代の先駆けとなった。



第1回全日本スキー選手権大会に優勝した北海道選手団チーム、  
ゼッケン3番中央は、秋野武夫（小樽スキー連盟5代会長）



全日本スキー選手権会場・緑ヶ丘スロープの現在  
(平成19年12月) 樽商高校内より撮影



当時の全日本スキー選手権会場・緑ヶ丘スロープ(大正12年2月) 中央にジャンプ台がある場所は現在住宅が並ぶ

全日本スキー選手権大会第一日目、北海道チームの監督には三菱美唄スキー部の白鳥恒雄氏(樽商大スキー部創設者の一人)が就任し、チームの主将には讃岐梅二(樽商大)が選ばれ記念すべき大会が幕を開けた。各地区予選を通過した強豪が揃う距離競技1kmにおいては上野秀麿(樽中)が見事優勝し、地の利がある小樽勢の活躍が目立っていた。



地獄坂を滑降りる距離競走



ストック不使用で滑っていたテレマーク・スラローム

同日アルペン種目のクリスチャニアスラロームとテレマークスラロームが行われた。第1回大会ではアルペン種目としてこの2つの競技が行われ、斜面に立てられた旗門の間を滑り速さを競った。現在の種目でいえば回転競技に相当し、アルペン種目の創始になる。北海道予選会で優勝した樽商大の船津阜二は、クリスチャニアスラロームにおいて33秒5分4の最速タイムで順当に優勝を飾った。

大会二日目最終日、ジャンプ競技が行われた。大勢の観客が会場を埋めつくして応援する姿がみられ住民の関心の高さが伺える。競技の様子を小樽新聞は以下のように伝えている。「愈々精華ジャンプへとプログラムが始まり待ち構えていた観衆はどよめき出す。花形選手讃岐君は白キャップに赤シャツで、まずは鮮やかなファームを見せて絶賛的となる。16米10を飛行して驚嘆せしめる」。ジャンプ競技は当時から観衆を魅了する人気競技であったことを思わせる。優勝者は、最長不倒距離をだした讃岐梅二、北海道予選優勝に続き堂々たる活躍だった。当時の写真をみると直立のままジャンプ台から落ちているように見えるが、記録映像ではジャンプ台の踏切では立ったまま滑走し腰を落としてジャンプをする者、立った姿勢から膝屈



優勝した讃岐のジャンプ（飛距離：16.1m）



上からみたジャンプ台

伸をしてジャンプする姿などが見られ、基本となるジャンプ技術はほとんど確立されていなかった。着地の際には大転倒が続出し、鼻血を出す選手もいると紙面で伝えられている。しゃがんだクロウチング姿勢から飛び出す選手は皆無で、当時の技術ではゲレンデにある大きなコブを飛び超える程度だったのかもしれない。

同日行われたクロスカントリースキーリレー競走においては樽商（現：小樽商業高校）チームが優勝し北海道は見事に団体優勝をさらった。閉会式では北海道選手団が朝香宮盃を授与され記念すべき第1回大会は幕を閉じた。翌年第2回大会は日本スキー発祥の地である新潟県高田で開催されることになり、第1回大会が開催された小樽地獄坂は日本スキー史にその礎を築いた。



距離リレー競走

大会当時の映像では会場へ特設電話線が敷かれ、仮設テントには役員・軍部関係者が多数みられる。また、埋め尽くされるほど多くの観客が応援している姿が映し出されている。華族を招き朝香宮盃を冠にしたこの選手権では、多額の資金を投じ準備に時間をかけた様子がわかる。

第1回全日本スキー選手権アルペン競技のテレマークスラロームの出場者を見ると、旗の間を滑る選手はストック不使用で滑走している。スキー距離競技では既に二本杖（2本ストック）が使用されていた。元々、レルヒ少佐が紹介したノルウェー式「スキー術」では、2本ストックを使うことが鶴見大尉の『スキー術』からも紹介されており、スキー距離競技ではいち早く採用されていた。すなわち、レルヒが伝えたオーストリア式「スキー術」により一本杖が当初日本全国に普及したが、二本杖の技術も伝えられていたのである。スキーを平坦地で滑らせるには2本ストックを使って推進力を加える方が断然速く滑ることができるからである。

黎明期における一般スキー術では一本杖が普及し、停止や回転練習の際にはストック不使用

で練習することが推奨され、何も持たずに回転するスキー技術も求められていた。アルペンスキーの2本ストックはバランス、タイミング、リズムをとるためにストックを使用するが、一本杖は急斜面を回転滑走する際に転ばないように体を支える使用目的があった。第1回大会スラロームの競技規則においては、ストック使用・不使用の規定がなかったので、その選択は選手に任されていた。第1回大会のスラローム競技において多数の選手がストック不使用だったのは、好タイムを出すため、コースに立てられた旗門間を素早く通過する際に長尺の一本杖が邪魔になることや、まだ2本ストックを持って回転するという競技概念がなかったからであろう。

しかしながら、なぜ速いタイムを競うスラローム競技に2本ストックを使用しなかったのか不思議である。国際的にはノルウェーから始まった距離競技とジャンプ競技は国際スキー連盟(FIS)が規定する種目として競技規則の整備はされていたが、アルペン種目はまだオリンピック種目に認められていなかった。英国スキー関係者が滑降競技とスラローム競技を提案していたが、北欧と中欧との間でスキー術の優位性に端を発した対立から、アルペン競技開催と規則整備が遅れていたことにも関係している。



第1回大会テレマークスラローム

下の写真には競技に携わる大会関係者は2本ストックを使用している姿が映っている。第1回大会のジャンプ台の手前には短いストックが写り、この頃、アルペンスキー術における2本ストックの使用は過渡期にあった。その後、大会を境に小学生から一般スキーヤーまでが、一般に一本杖から二本杖を持つようになっていったのである。



2本ストックを持つ第1回大会関係者



第1回大会ジャンプ台の手前に写る短いストック

第1回全日本スキー選手権では、大会当日に急遽徹夜作業で軽量スキーを製造するなどスキー板にも変化が起こった。スキーの操作性は道具の影響を大きく受け、その材質や形状が変わるとスキー技術が変わる。現在でも道具の変化によってスキー技術が高度なレベルに発展することは変わらないが、黎明期における競技化によって著しくスキー技術や産業が発展していった。

「この大会は我が国のスキー史に一つのエポックを起こすものであった。この時に至るまで、日本の国内に於いてすら『スキー技術の交通』なく、樺太、北海道、東北、信越の各地方は殆ど孤立していて、お互いに他地方のスキー家の滑る技術を、お互いにも珍しく眺め合った。樺太の人々は、平地などをバタバタと、スキーをあげて精力的に走った。信越の人々は、スキーは滑るものだから、登るのはいかんという位であったから、滑降技術には優れていて、テレマークなどを盛んに愛用していた。北海道では、その前から、平地滑走や登り等にも精通していてクリスチャニアやジャンプターンなどを愛用していた。東北地方は、今でこそ、スキー技術のレベルが最前線にまで高められてはいるが、その頃は、まったくお話にならないほど貧弱なものだった。結局この戦いは、地元北海道軍の勝利に沸いたが少なくとも距離競技に於いては、樺太軍は他軍よりも遥かに先を歩いていた。彼らは今日見るがごとき形状の軽い狭い競走用スキーを既に用意していたのである。かかる武器と優秀なる技術とが結合されて、第一日目の距離競走は、樺太軍の独壇場だった。『レーススキー』の出現は誠に驚異であった。これではいかん、というので、小樽商業のリレーチームは、スキー2台を梅屋運動具店にてその晩徹夜で作ってもらった『レーススキー』で翌日のリレーの優勝旗を獲得することができたというようなエピソードがある」と、この大会に出場した高橋は自身の著書『日本のスキー術』で述べている。

大正元年樽商大スキー部を創設した白鳥恒雄はスキー部の合宿やコーチを引き受ける傍ら大正9年『スキーの要領』を出版した。白鳥は、第1回全日本スキー選手権北海道選手団監督として北海道を団体優勝に導き、スキー技術・指導論では国内トップクラスにあった。この頃のスキー技術・指導論において活躍した樽中、樽商などの生徒や小樽出身者、樽商大関係者が選手としても指導者としても日本をリードしていった。



## 波乱の第1回全日本スキー北海道予選大会

第1回全日本選手権大会は樺太、北海道、東北、信越、関東、関西の六地域対抗というかたちで行われた。北海道予選会は2月3・4日に開催されることになり前年の12月初旬、主催小樽スキー倶楽部、後援樽商大スキー部及び北大スキー部の三者連名の案内状が道内の学校、団体へ発送され、参加人数は328人にのぼった。

小樽開催に先立ち後援団体の北大スキー部からジャンプ台は固定台にするという条件が付けられた。ところが、緑ヶ丘に固定台を造ろうとしたが地主が許可しない。一時的なものなら良いが、後まで残るものは駄目であるという。これには小樽スキー倶楽部も困り果て北大側へ事情を説明して了解を求めた。北大は丁度琴似へ固定台を造ったばかりで、ジャンプだけは琴似でやろうという。小樽としては、ジャンプだけ場所が違っては大会運営上何かと不便だ、第一スキーの華、ジャンプを他に持っていかれたのでは小樽の面目丸つぶれで市民に顔向けできない、緑ヶ丘のジャンプ台も北大遠藤先生の指導のもとに造っているのだから何とか了解してもらいたい、といった事情説明のうえ理解をもとめ、表面上は了承を得たかたちになっていた。

一日目、午前9時、雪に見舞われた中で伴会長による開会の辞があり予選大会が始まった。1km競争ののち、4km競争で樽商選手がストックを紛失したまま一着でゴールイン。当時の規則で杖を体から離し紛失した場合、競技続行を認めないとある。これを一着としても認めるのはおかしいと北大側は審判にせまる。審判としては、一度発表したものを変えられないので騒ぎが始まった。この4km競争では一位も二位も樽商選手で、北大選手は六位以内に一人も入っていない。優勝選手を失格にしても北大が有利になるわけではない。

この件については小樽スキー倶楽部が日本体育協会の立会いで決定するまで一応保留にするということで競技を続行するよう提案し了承された。

二日目、朝から空はからりと晴れ上がった。日曜日で快晴ともあって市民はどっと繰り出した。この日はジャンプとリレー種目だった。港町だから気風も荒い。市民の熱狂的な応援があったリレーでも樽商選手がトップでゴール。100メートル遅れて北大選手、続いて25連隊の選手が入った。



地獄坂を滑下りる距離競走選手と樽商大北斗寮（左上）

この日最後のジャンプでまたトラブルがあった。ジャンプする順番は抽選で決める。当時はどこからスタートしても良かったので後ろから飛ぶ方が有利である（しかし転倒の危険性がある）。すなわち、前の選手の飛距離がわかるからスタート地点を高くしてスピードをつければ良い。前評判では樽商大讃岐梅二か北大南波初太郎がトップを争うだろうとされていた。抽選の結果、南波が先で、讃岐が後と決まった。ところが、記録員がミスをして南波をコールしなかったのか、それとも南波がコールを聞きそこなったのか不明だが、讃岐が先に飛んで南波が後から飛んだ。南波はコールされなかったから最後に飛んだと言う。成績は讃岐が1位で最後に飛んだ南波が2位、以下6位まで北大が占めたが、抽選とおりに飛ばなかった南波が問題になった。審判員がコールしなかったのなら主催者のミスだし、コールを聞きそこなったら南波がルール違反になる。これでまた審判と北大側が紛糾してしまった。結果、発表された新聞報道では南波は2位で順位の変更はなかったが、北大勢の心情は納まらなかった。

ついに険悪な雰囲気の中、樽商大と樽商が本大会への出場辞退を申し出た。両校が何故出場辞退を申し出たのか真相不明であるが、クレームのついた種目で両校から優勝者がでていいる。大会開催地の緑ヶ丘が地元である両校には大会関係者が多く運営にも携わり手際の悪さにケリを付けたかったのかどうか定かではないが、今回の件では樽商大校長と小樽スキー倶楽部会長を兼ねる伴房次郎が、責任をとるつもりだったのだろう。

予選会は終了したが北大側の成績は振るわず、一週間後には本大会が待っている。日本で初めての公式大会はノルウェーのホルメンコーレン大会の規定をモデルにして、大日本体育協会スキー部委員の稲田昌植（北大出身）がその規定作りの中心にいる。北大としては大会を後援しOBがスキー政策をリードしているという自負がある。一方、大会誘致に尽力し開催にこぎつけた小樽スキー倶楽部と樽商大側は、大会運営主管を担い運営のすべてを任されているという責任を負っている。

外部に秘して各方面から両校に対し出場辞退撤回が説得された。しかし、2月9日北海タイムスに小樽高商（樽商大）、樽商出場辞退の記事が大きく載せられた。また、北大スキー部側は了承したものの固定ジャンプ台を造らなかったこと、4km競争でストックを紛失した選手を入賞させたことをあげ、これでは後援をした立場として責任を負い切れない旨が公表された。ちなみに、ジャンプで2位になった南波の問題には一切触れられていない。そして、北大スキー部は本大会への出場を棄権することを小樽スキー倶楽部へ通告している。

本大会開催地で北海道勢の中心選手がいる樽商大も樽商も北大も出場しないでは、大会開催もおぼつかない。各方面からの説得で地元の樽商大、樽商は出場辞退を撤回したものの北大は棄権のまま本大会の幕をあけた。

## 昭和3年 日本人初参加の冬季五輪に出場した伴 素彦（元SAJ会長、樽中・稲穂小）

昭和3年スイス・サンモリッツで開催された第2回冬季五輪に初めて日本人が参加した。小樽からは前年全日本スキー選手権でジャンプに優勝した伴素彦が初めて参加することから始まり、平成22年までオリンピック出場選手で小樽と何らかの関わりが途切れたことがない。

第2代樽商大校長伴房次郎は明治45年7月に赴任し、稲穂小学校3年生の息子素彦（明治38年1月生）のためにさっそく新潟高田から小学生用スキーを取り寄せた。伴素彦は樽商大教官菅大尉から1本杖スキーを習った。その頃、スキー靴がなく編上靴やゴム長をスキーにつけて滑った。「雪がしみて足が冷たくなりこれには弱ったものである」と当時を振り返り述べてい



る。自宅が小樽のスキー場の真下にあったので校長官舎からは緑ヶ丘スロープが良く見え、学生が飛ぶ姿を見た母親は「ジャンプだけは危ないからやめなさい」と何度も繰り返し言っていたが、素彦はその目をぬすんで飛び続けメキメキ上達していった。その後、彼が日本初参加の冬季オリンピック（スイス・サンモリッツ）で日本人初めてのジャンプ選手になろうとは誰も想像していなかった。

伴は北大卒業後、1929年に日本製粉株式会社に入社し、1970年に社長、1974年に会長に就いた。スキー界へは、第6代SAJ会長（1975年－1986年）に就任し、第7代には堤義明（西武グループ）が引き継いだ。1980年にはレークプラシッド五輪日本選手団長として代表を務め、生涯にわたって日本スキー界に貢献した。



昭和56年11月16日北海道新聞 写真：ニッカウキスキー全面広告の一部 大正15年全日本スキー選手権優勝伴素彦と昭和3年冬季五輪（スイス）

## ヘルセット中尉（昭和4年）・シュナイダー（昭和5年）の小樽訪問

日本は昭和3年（1928年）までに5回の全日本スキー選手権大会を開催し、一度も外国の国際大会に選手を派遣したこともなく、コーチを招いたこともなかったが、この年初めてサンモリッツ冬季オリンピックへスキー選手を派遣し、海外にも目が向けられるようになってきた。昭和4年にはノルウェーから世界的ジャンパーとして知られるオーラフ・ヘルセット中尉一行を北海道に迎え、翌年にはオーストリアからハンネス・シュナイダーを迎えている。

第2回冬季オリンピックにジャンプ選手として参加した樽商大校長伴房次郎の長男素彦（北大）は後年「大会へはほんとうのところ、参加するためであり、外国の技術を見、かつ覚えて帰る事であった」と述べている。オリンピックが終わると、素彦らはノルウェーに行き、ホルメンコーレン大会へ参加方々、日本人として初めてコーチについて訓練を受けた。この遠征で走り方も飛び方も初歩的ながら体得し、技術とともに競技用のスキー、金具、ワックステクニックを日本に持ち帰った。しかしながら、「持ち帰った技術をいかに後輩に伝えるか、自分

で飛んで見せるにはあまりに未熟で困ってしまった」と述べている。

そして、世界的ジャンパーとして知られるノルウェーのオーラフ・ヘルセット中尉と、サンモリッツ大会で活躍した複合スキー選手であるヨオン・スネルスルードとオウレ・コルテルードの3人が昭和3年大晦日に来日した。

3人は日本におよそ50日間にわたって滞在し、1月4日札幌に到着、15日～17日の間は小樽に滞在し、樽商大生や中学校のスキー部を指導した。麻生通訳をはさんで小樽での三日間はヘルセットが理論を担当し、あとの二人が実技をみせ、天狗山山麓の落葉松の林を縫って疾走する二人のスキー妙技に皆驚くばかりであった。



ヨオン・スネルスルード氏

16日午前ヘルセット中尉一行は天狗山山麓において吹雪の中、樽商大、北商、樽商学生2,000名の見学の元に距離競技の走法について親切にコーチした後、末武牧場で午後の休息をとった。

午後北商練習シャンツェにてジャンプの講習に移った。コルテ1回、スネルス2回飛躍後、学生ジャンパーには3・4回飛んでもらいコーチングと同時に採点をした。スネルス18点、勝見改に16点、秋野武夫14点（のちに小樽スキー連盟会長）そのほか14・5点から零点まで得点をつけ、踏切が不十分、スネルスが示した型をとるよう熱心に注意し、種々の欠点を指摘していた。選手たちが踏切の瞬間にあげる氣勢（掛け声）が不快であると言い、ヘルセット中尉はコーチした学生をみて、「小樽のジャンパーは優れた素質を持っている。将来日本を代表する選手が出る」と述べていたという。

1月17日に3人は樽商大に来校した。ヘルセット中尉及びスネルスルード、コルテルード両氏は伴校長や本校スキー選手と午餐を共にした後、午後1時に講堂において全校生徒の歓迎を受け、ヘルセット中尉が麻生通訳をはさみ20分にわたり講義をした。夏のトレーニング及びワックステクニックについて有益な講演を聞き、また世界的選手の実地経験談を耳にして、全校生徒一同は感激に充ちていた。また、同氏らは高商シャンツェ建造のため候補地選定や設計などに協力し、付近一帯でスキーをしている。

ヘルセット中尉はジャンプの指導では、サツツ（踏切）方法や姿勢についてやかましくいつていたが、それよりスポーツの真の目的は2・3人の優秀な技術者を育てるだけではなく、むしろ数千万人の人がスキーの喜びを知り、心身の健康に役立てることだと力説した。

ヘルセット中尉一行は大鰐、野沢温泉、志賀高原などの各地を視察、ジャンプの指導と野沢温泉シャンツェの改造などをしたことでも知られている。

それまでは、選手が外国の写真などで見事な前傾姿勢を見て、何かまねようと思っても、な

かなかできなかった。それがどうであろう。翌シーズン、北海道や東北の中学生や小学上級生たちが、どんどん前傾したジャンプをとにかくやってのけるのであった。まことに「百聞は一見にしかず」、少年たちが二人のノルウェー選手の一流ジャンプを目のあたりに見て学んだ結果であると評された。

## シュナイダーの訪問

1924年世界ではスキー技術のバイブルとなる「アールベルグスキー術」がプロスキーヤーのハンネス・シュナイダーによって出版され、同時に主演映画「スキーの驚異」によってオーストリアのスキー技術が世界へ紹介された。同書は高橋次郎教授によって紹介され、シュナイダー（40才）の訪日に合わせ新聞各社が大々的に宣伝した。



両国国旗を振りかざし小樽駅に出迎えたファンの前に立つシュナイダーの姿は、彼が当時の人気スポーツ選手だったことを思わせる。スキーの理論家であるとともに超人的なスキーを演じるスキー映画の主演として同氏の知名度は日増しに高まり、そのスキー術が披露される小樽はスキーのメッカと云われほどに相応しいスキーの町に成長していた。

小樽松竹座においてスキー映画「スキーの驚異」が午後1時と6時の二度にわたり上映され、同時に講演会が開催された。生身の人間がスキーを履いて雪の上を素早く回転移動し、数十メートルをジャンプする姿は、当時の人々や選手の心に強い印象を与えた。

苫米地教授を司会にした夜の講演会では800名を超える記録的な入場者があった。昭和初期、冬の娯楽が少なかった時代にスキーが庶民のスポーツとして定着してきたことを伺わせる。

3月30日午後3時頃に自動車で松竹座より樽商大へ移動したシュナイダーのスキー講習会は図書館裏山（現在の樽商大1号館近辺）で行われた。滑走中のホッケ姿勢（しゃがむ姿勢）・ジャンプターン・シュテムボーゲン・クリスチャニアなどスキー術を披露し、「日本人のスキーは中々うまい、しかし技術は巧みだが大きなうまさがない。ジャンプターンは鮮やかでボーゲンの術はうまさがある」と総評している。同氏は「スキースポーツの目的は、日々の仕事の疲労や苦悩を回復させ、尚それ以上に身体を強壮にし、抗力(免疫)を増し人々を若返らせるものであります」と伝えた。技術指導だけではなく、スキーを通じてスポーツが担う健康への効用を的確に教授していたことが印象的である。その後、校内へ戻り同行している坂部通訳を交えて伴校長、苫米地教授・高橋教授との間でスキー談義に花が咲いた。翌朝シュナイダーは小樽駅を9時に出発して札幌へ向かい当地では、橋本正治札幌市長（札幌スキー連盟会長）から大歓迎を受けた。

4月1日午前8時、札幌駅発の急行でスキー講習員20名を引率して上富良野へ向かい、同駅からは馬車に乗り換え吹上温泉に宿泊した。

4月2日シュナイダーは十勝岳に立った。中腹の雪は冷たくよく滑る。講習会が始り、人々の心は光る山脈の英姿にひきつけられている。シュナイダーの言葉により登行への誘惑を制し

て、最も有用な最も根本的なテクニック練習に没頭せざるを得なかった「まず、基本から！私のスキー術の方法を皆に既に教えない前にやっている。皆、相当に熟練しているから、単純な制動滑降はやらずに、直ちに制動回転から始めては如何か」と言って、初級の最後の制動回転から始めて、中級のクリスチャニア及び跳躍回転の課程を終え、さらに最終日3日には、上級者の課程としてゲレンデ・ファーレンにまで進み、かなりの成果を収めることが出来た。「欲を言えばシュナイダーと一緒に、冷たく光っている十勝連峰の上に立ってみたかったのだが、温泉から上に登って、森林帯の上に出て、各種各様のテクニックを実地に活用して滑った。シュナイダーは時々停止して、後になったり、先になったりして、自らの技術を講習生に見せると共に、また、講習生の技術を注意してみた」と高橋は伝えている。そして同日、午後5時37分着旭川駅にシュナイダーは到着し錦座（松竹座）にて高橋の通訳でアールベルグスキー術講演会と映画上映会という超過密スケジュールをこなしていった。

シュナイダーは玉川・成城学園長小原國芳に招聘され、東京市神宮外苑の青年会館及び日比谷公会堂での映画上映講演会を皮切りに、日本に到着してから3・4日は日夜、講演会とラジオ放送の繰り返しを余儀なくされるほどの多忙を極めていた。飛行会館での玉川・成城学園主催の歓迎会は午前0時まで続き、招待された50名の人々の中に高橋教授も来賓として列席した。同教授は長野県でのスキー講習会へも同行しシュナイダーと親交を深め、氏の北海道訪問に一役かっていた。

1898年にスキーを始めたハネス・シュナイダーは、1890年オーストリアのシュトゥベン(Stuben)に生まれ、海拔1,304mのチロル・アールベルグ地方にあるサンアントン(St. Anton)という小さな町において職業スキー教師をしていた。スキー指導者としても競技選手としても成功し、世界各国から人々がスキーを学びに彼のもとへ訪れているほどであった。同氏は日本へスキー術を伝えた日本スキーの父として知られるレルヒ少佐とともに近代スキーを発展させた人物として日本スキー史にその名を留め、地元オーストリアチロルのハネス・シュナイダースキー博物館、そして長野県野沢温泉村・日本スキー博物館において人物業績が詳しく紹介されている。



左から通訳坂部氏、シュナイダー氏、高橋教授

## 小樽が生んだ「キングオブスキー」 関口 勇（北海商業出、現：北照）

スキー大国ノルウエーでKing of skiと云えば、ジャンプと距離競技の両面で優れた複合の覇者を指すが、小樽にはこの云われ越える凄いスキー選手がいた。関口勇（北海商業：現北

照)は第3回レークプラシッド(昭和7年)と第4回ガルミッシュ(昭和11年)の2度にわたって五輪代表に距離選手として選ばれていることに加えて、昭和12年全日本スキー選手権ではアルペン滑降で3位に入賞し、回転では優勝している。獲得した全日本タイトルは昭和5年ジャンプ、10年複合、12年アルペン回転とアルペン複合の全4競技の全日本タイトル保持者となっている。スキーの技術発展途上の時代であったからこそ成し得た神業であろうが、これが本家ノルウェーを超える本物のキングオブスキーと云ってもいいだろう。昭和12年全日本選手権回転で優勝した時は2位に15秒差をつけての圧勝だった。昭和15年幻となった札幌五輪の返上がなければアルペン種目での五輪出場も夢ではなかったはずである。跳んで、走って、回転し滑降する超人的な選手はもう現れないだろう。ノルディックとアルペンの両種目で全日本のタイトルをとるなど不可能なことを可能にしたスキーの王者である。

関口は小樽育ちの常とでもいうべきか、もともとはジャンプ一本槍であった。昭和4年にヘルセット中尉ら(ノルウェー)から本格的なジャンプの教えを受けた。地元小樽で前傾するジャンプを初めて目の当たりにし、ノルウェー式ジャンプを最初に身につけ成果を上げたのが関口である。昭和5年にジャンプで日本のトップになり、北欧流の近代化されたジャンプの覇者となりキングの快進撃が始まることになった。

## 昭和11年第4回ガルミッシュ・パルテンキルヘン五輪の驚異

### 【派遣選手役員15名中、9名が小樽出身だった】

伊黒は樽中のクラスメートである安達五郎とともに、日本ジャンプ陣を世界的なレベルに引き上げた先駆者である。ジャンパーとして出場した4名全員が樽中出身であったことに驚かされる。それはジャンプコーチだった秋野武夫が酒造会社社長野口喜一郎氏の金銭的援助のもと樽中校庭のジャンプ台に夜間照明をつけて強化練習をした成果の表れだった。また、同校に合宿所を建てた強化策も功を奏し同大会ジャンプ競技では伊黒正次7位、宮島巖31位、期待された安達五郎45位、龍田峻次46位と健闘した。距離競技では関口勇と関戸力(樽商出身)が参加した。

このオリンピックでは日本人10名のうち小樽出身の選手が6名選ばれており、競技役員を含めると15名中9名が小樽出身者であった。このように冬季オリンピック初出場から戦前までの大会では小樽から多数の出場者を輩出し、スキーのメッカとしての確固たる地位が築かれていたことを物語っている。



オリンピック代表ジャンプ選手がシャンツェに集った

このシーズン、ドイツは30年来の暖気で1月の降雨で積雪が減り、各国の選手は練習不足になっていた。開催地ガルミッシュパルテンキルヘンでは湿ったべた雪のコンディションが長く続き選手団は雪のある山地へ出かけて練習し

た。日本人は何処へ行っても大歓迎を受け、練習が終わるやサイン攻めに遭うほどの人気があった。長旅の疲れや慣れない習慣や食事に戸惑うこともあった。

ヒトラー政権下でのオリンピックは入場チケット特等席はすべて売り切れ、ホテルはすべて満室、昨今と変わらない混雑状況であった。ジャンプ会場では超満員の様子が写真に写っている。



ガルミッシュパルテンキルヘンオリンピックポスター



ヒトラー政権下での開催

## 昭和14年 教育部の原点（スキー指導員検定会・山形県五色温泉）

スキー連盟はスキー選手権大会を主催しオリンピック選手を派遣してきたが、競技スキーの強化だけでは充分ではなくなってきた。スキー初心者から上級者までを一般スキー技術の体系化した指導と教科書作成など、教育への配慮が必要な時期を迎えていた。

昭和12年から始まった日中戦争によって国民の体力錬成、体位向上に視点が向けられ、スキーが冬季の体力維持及び増進に適する格好の鍛錬手段として認知されるようになり、第1回スキー指導者検定講習会を厚生省の後援で開催することになった。

昭和14年12月21日から3日間、山形県の五色温泉でスキー指導者検定講習会が開催された。第1回は高橋次郎を委員長として藤沢伸光ら八人を講師に、小樽で高橋の指導を受けた小樽市役所・柴田信一を助手として行われ、64名の参加者があったが、その内11名が日本最初の指導員として認定された。北海道からは柴田信一、末武久、曾田起一郎の小樽勢3名が選ばれている。

高橋は指導員の育成と一般スキー術の統一のため、教職の余暇をさいて各地を廻り講演と実技指導に取り組んでいる。

第1回スキー指導者検定講習会の前シーズン、昭和14年(1939年)の1月から3月にかけて第



1回全国スキー講習会が実施され全国40箇所のスキー場で2～3日の講習終了後、テストを行って成績の良い者に一級、二級の技術章が与えられた。シーズン中の受講者3,611人中1級148名、2級525名が合格している。これは日本で初めて行われたバッジテストとなった。全国スキー講習会の講師には、殆ど往年の名選手が当たった。しかしながら、名選手が必ずしも一般の名指導者ということにはならない。一般スキーの指導者は競技には無縁でも、各地でスキーに励んでいる者に資格を与え指導者を選んだ方が効果的だという方針から、指導者育成と指導書の統一が速やかに行われることになった。

昭和15年から第2回スキー指導者検定講習会は小樽天狗山で開催された。戦争が終結を告げると、相変わらず食糧事情は極端に悪く、敗戦に打ちひしがれた心の虚脱・空虚を埋めるものを求めている。戦中休止していたスキー指導者検定講習会は戦後、昭和22年3月21日～23日小樽天狗山スキー場で再開され27名が合格した。その後、40年近く指導員検定会が小樽天狗山で開催される。

指導員が年々増えスキー情報の共有を図るために昭和25年に道連の「基礎スキー技術委員会」、昭和27年には指導員親睦会である「北海道一般スキー指導員会」が組織されている。

昭和31年には準指導員検定会が導入されて、札幌三角山・荒井山・藻岩山・ルスツ・倶知安・旭川・小樽などのスキーゲレンデで開催され、平成からはルスツと比布スキー場で実施されている。

## 関戸一族（距離・複合）と 冬季五輪出場スキー女子第一号になった加藤富士子（三馬ゴム）

関戸末弘（奥沢小出身、大正9年5月6日生、戸籍では大正10年3月生、三馬ゴムスキー・陸上部監督として創設に尽力した。平成25年5月19日永眠）

平成24年まで指導し育てた教え子は2千名を超える。午前中は真駒内公園で、歩くスキー教室の生徒たちと一緒にトレーニングに励み、午後からは女子中学生の距離選手をボランティアで指導する。選手として最盛期を戦中に過ごした不遇の時代、心から溢れるその思いを語ることはないが後進の指導に誠心誠意の情熱を捧げた。

実兄の関戸力（新姓：矢崎力は元道ス連副会長、小樽商業高出）は昭和11年ドイツガルミッシュ五輪代表である。甥の関戸茂と末弘の娘関戸ゆりも距離競技で大活躍した。

関戸力は「甲種合格くじ逃れ」によって第二次世界大戦での兵役を免れている。弟の末弘は徴兵され朝鮮半島に数年間駐留し、戦火が激しくなる中、数千の日本人の中でただ一人、帰国命令によって小樽にて終戦を迎えた。



加藤富士子（三馬ゴム）  
昭和21年3月3日生まれ

1968年（昭和43年）、グルノーブルオリンピック5kmに出場した加藤富士子（現姓：出口）は小樽双葉高校時代から全日本二冠2度をはじめ、個人タイトルは5つ、リレー優勝6回の記録を持つ。高校3年生で全日本チャンピオンになり三馬ゴムへ入社。素質は決して超一流ではなかったが、152cm、49kgの体格は当時の女子選手の中でも小柄だった。円熟期にあった頃の体力測定の結果で全身持久力を示す最大酸素摂取量は優れているが、腕力は劣っている。加藤を知るコーチに

よると強さの秘密は外見には現れない「勝負強さ」と「根性」だったという。

加藤の生家は小樽市内といっても毛無山近辺の地域である。朝里川温泉がひらけてからは交通事情等が良くなり市内との格差もなくなってきたが、古くは電灯もなかった。そこから8km先の汐見台中、双葉高校へ通学したのだから夏はともかく冬はスキーに頼るしかなかった。幼少から通学で体力を養い、生活のスキーが知らず知らずのうちに心肺機能を強靱なものにした。さらにはあらゆる天気打ち勝つ根性も植え付け、日本女子初のスキー冬季五輪出場の夢を果たした。

※本文は「もうひとつのスキー発祥の地〈おたる地獄坂〉」小樽商科大学出版会、著者中川喜直より一部抜粋、加筆修正した。

## コラム2 100周年の由来

1930(昭和5)年12月、「小樽スキー倶楽部」(1939年小樽スキー連盟に改称)は「創立十周年記念誌」を発行しており、逆算すると1921(大正10)年が誕生の年となる。その記念誌には発起人の一人である西谷謙三氏が1918年「踏皚倶楽部」を結成し、翌年小樽スキー倶楽部と改称。更に全市的組織への発展を目指し1921年9月25日の設立総会までの経緯を記している。

また、1930年の小樽新聞にはレルヒ氏来道20周年特集中、苫米地英俊氏の談話として「大正元(1912)年末から翌正月にかけ、小樽高商と小樽新聞社が中心となりスキークラブを設立した。(中略)大正9年、私が欧州留学する時に解散した」と紹介されている。苫米地氏は、1912年10月発起人会を開き翌1913年3月に発会式を開催したスキークラブの自然消滅説をとり、スキー連盟の前身である「倶楽部」との関係は定かではないとしている。

ただし、そこに時間的空白が無く役員や関係者も多くが重複することから、小樽スキー連盟は「小樽での全市的スキークラブ誕生は1913年」とし、1983(昭和58)年に70周年記念式典を開催。30年後の2013(平成25)年に100周年記念式典を開催した。



## 第2章 昭和20年代から平成20年代

### 小樽アルペンの歴史

1923年に日本のスキー競技は小樽にて始まった。

第1回全日本選手権が小樽で開催され、その成績を見るとクリスチャニアスラロームで優勝船津阜二（小樽高商）と残っている。

その後、アルペン種目は休止となり再開は滋賀県伊吹山で開催された第15回全日本選手権からである。行われた種目は、滑降、回転、複合（滑降と回転のタイムを得点に置き換えてポイントの高い順から順位がつけられる）の3種目が行われた。

複合／成年と回転／成年で関口勇（北大若老：北照）が優勝した。

1938年には札幌で第16回全日本スキー選手権大会が開催され滑降および新複合で末武清江（小樽スキー）が優勝した。

1940年の妙高高原で開催された第18回全日本スキー選手権では回転で橋本茂生（小樽商）、女子では大回転および新複合 木元セツ子（小樽市女）が優勝した。

1941年の小樽で開催された第19回全日本スキー選手権では回転に近藤寿夫（小樽貯金）、が優勝、回転および新複合に木元セツ子（小樽市女）が優勝し、新複合で二連覇を達成した。

1942年の青森県大鰐で神宮大会を兼ねて開催された第20回全日本スキー選手権では大回転および個人戦で市岡香代子（小樽市女）が優勝した。

戦火がじりじりと国民へ暗い影を落とし始めた1943年に栃木県日光で開催された第21回全日本スキー選手権（神宮大会を兼ねる）では女子大回転および個人戦で南伶子（小樽市女俱）が優勝した。

残念ながら、戦争の足音はスポーツの世界まで影響し、第22回大会（1944年）・第23回大会（1945年）・第24回大会（1946年）・第25回大会（1947年）は第二次世界大戦のため中止となった。

1945年8月に終戦を迎え、3年後の1948年に全日本選手権が復活し第26回全日本スキー選手権大会として会場は長野県野沢温泉にて開催される（第3回国体と兼ねる）。種目は戦前同様に新複合の1種目。食糧難のため、外食を持参。木谷初子（小樽市女）が完全優勝を飾る。

戦後の混乱期のなかで、当時の経済状況や交通事情、そして食料事情を考えると全日本選手権を開催できたのは関係者の尽力の賜物であろう。

そして1949年には第4回国体を兼ね、第27回全日本選手権が札幌で開催される。



この天狗山から多くの選手が育っていった



選手の憧れの的であった猪谷千春選手

1950年に第28回全日本選手権が第5回国体を兼ね、山形県米沢市および五色温泉で開催され電気計時装置を採用したレースの幕開けとなった。

同年に小樽ではアジア商会の製造部門としてアジアスキー工業が設立される。

**1951年** オーストリアのウィーンでI O C総会、J O CのI O C復帰が正式に認められる、同時にS A JもF I Sに復帰する。再び国際スキー連盟の傘下となり、世界の舞台へと飛び出していった。第6回国体を兼ね、第29回全日本選手権が新潟県高田市及び妙高高原で開催され少年組 齊藤貢(小樽桜陽)、寺岡敏子(三馬ゴム)と男女で優勝者を輩出した。

**1952年** ノルウェーのオスロで開催された第6回オリンピックに戦後初の日本選手団としてアルペン勢が参加した。水上久が各大会での実績で代表に。

小樽天狗山にリフトが架設され、練習の効率もあがり、スキーのメッカ小樽の名を挙げていた歴史に拍車がかかり、さらに数々の名選手を生む場所となる。

第30回全日本選手権が富良野で開催され滑降で齊藤貢(小樽桜陽)、女子滑降および新複合にて寺岡敏子(三馬ゴム)が優勝する。

**1953年**の秋田県大湯で開催された第31回全日本選手権では回転で齊藤貢(早稲田大学：小樽桜陽)、女子回転で寺岡敏子(三馬ゴム)が優勝する。

**1955年**の富良野で開催された第33回全日本選手権では滑降で齊藤貢(早稲田大学：小樽桜陽)が優勝した。



大滝はつえ(双葉高)  
全国高校大会 回転優勝 昭和29年  
圧倒的な強さを見せ長く女王の座についた

**1956年**の秋田県大湯で開催された第34回全日本選手権では大回転で大滝はつえ(三馬ゴム)が優勝し、**1957年**の長野県志賀高原で開催された第35回全日本選手権では大滝はつえ(三馬ゴム)が回転・大回転での二冠王となる。

**1959年**の長野県志賀高原で開催された第37回全日本選手権では回転で大滝はつえ(三馬ゴム)が優勝した。

このように1940~1950年代の我が国の戦後の復興期におけるアルペンスキー黎明期において、小樽出身の選手は強さを発揮し、輝かしい歴史の土台を築いていったのである。



大滝はつえ(三馬ゴム)  
高松宮殿下より表彰を受ける 昭和31年

## 1960年代

**1960年** 第8回冬季オリンピックスコーバレー大会に日本代表として見谷昌禧(小樽潮陵高校出身)が派遣され、大回転33位、滑降53位の成績を収めた。

第38回全日本選手権は新潟県妙高高原で行われ、大滝はつえ(三馬ゴム)が回転・大回転での二冠王となり、回転で二連勝を飾る

**1962年**はフランスのシャモニーでアルペンス

キー世界選手権が開催され、見谷昌禧（小樽潮陵高校出身）が日本代表として派遣され、回転で21位、大回転で28位の成績を収めた。

見谷は同年、スイスの ヴィラルにて開催されたアルペンスキー・ユニバシールド大会にて、日本代表として派遣されSL3位の成績を収めた。

第40回全日本選手権はニセコで開催され大回転で大平義博（早稲田大学：小樽潮陵）が優勝し、回転では中家千鶴子（東洋木材）が優勝した。

1963年 第41回全日本選手権が長野県白馬で開催され、電気計時を採用され1/100秒計測となった。

回 転 細井ミヤ子（東洋木材）

大回転 西村 蓉子（東洋木材）

1964年 スキーの中心地であるオーストリアのインスブルックにて冬季五輪が開催され、野戸恒男（芝浦工大：北照）大平義博（東洋木材：小樽潮陵）が派遣され、野戸が大回転35位、滑降46位、大平が回転38位、滑降57位の成績を収めた。

第42回全日本選手権は新潟県の苗場スキー場で開催される。

回 転 細井ミヤ子（東洋木材）

## 見谷昌禧について

### <日本で初のプロフェッショナルコーチ>

アルペンスキーワールドカップの現場を転戦する田草川嘉雄はスキージャーナル社の連載記事に下記の文章を記述している（一部改編）。

戦前、スキーの名選手とした鳴らした野崎彊が見谷を初めて目撃したこのとき、競技スキーを始めてまだ3年目だった。そして驚くべきことに、それから3年後、この小樽の暴れ馬は日本代表としてスコobarレーオリンピックに出場を果たす。つまり、見谷は本格的に競技スキーを始めてからわずか6年で、オリンピックへの切符をつかんだわけである。戦後の混乱期を抜け出しつつあったこの頃、雪国にはスキーの名手がひしめいていた。前年の冬に行なわれたコルチナオリンピックでは、猪谷千春がスラロームの銀メダルを獲得。スキーへの熱気は、現在よりもあるいは高かったかもしれない。そうした時代にあって、スキー歴わずか6年の見谷が日本の代表となったことは、やはり快挙といふべきだろう。

その後、早稲田大学に進み、1960年のスコobarレーオリンピックに出場、1962年のユニバシールド大会回転で銅メダル獲得、1968年に開催されたインスブルックオリンピックへの出場を狙ったが、



スコobarレーオリンピック 昭和35年  
60年代 日本アルペン界をリードし世界への  
ステップを一早く導入した見谷昌禧



1960年代全日本選手権優勝  
国体男としてその名を轟かせた大平 義博  
インスブルックオリンピックゴール付近にて



1960年代  
輝かしい成績を残し後輩達の憧れとなった野戸恒男



苗場ワールドカップ  
日本人初の10位入賞 柏木正義

ダウンヒルのレースでの転倒が引き金となり、引退した。その後はスキーの研究と指導に勤しみ、1968年にはそれまで急造的にしか結成されていなかった日本代表選手を長期的な強化計画をもつナショナルチームとしてまとめ上げ、1972年に開催が決定された札幌オリンピックに向けて日本で初のプロフェッショナルコーチとなり、選手のみならず日本のアルペンスキーの競技力向上に発展寄与した人物である。

現役時代日本のトップスラロマーとして活躍し、引退後日本のアルペン界を世界へ導いた見谷昌禧。その功績は今も後輩達に受け継がれている。

1965年 第43回全日本選手権は新潟県の苗場スキー場で開催され、滑降および大回転で野戸恒男（芝浦工業大学：北照）が優勝した。

1966年の第44回全日本選手権は宮城県鳴子および長野県白馬村で開催されたが、雪不足の為、回転のみ鳴子で開催された。

滑 降 西村 蓉子（ヤマハスキー）

回 転 細井ミヤ子（東洋木材）

1968年にはフランスのグルノーブル五輪に野戸恒男が派遣され回転で失格、滑降で45位、大回転で40位の成績を収めた。

第46回全日本選手権は新潟県の苗場スキー場で開催され、野戸恒男が回転・大回転で二冠王となる。

1969年 アジアスキー工業から「アジアスキー」に名称変更された

1970年 世界選手権がイタリアのバルガルディナで開催され柏木正義（芝浦工業大学：北照）が回転で棄権、大回転で40位の成績を収める。

※札幌オリンピックを2年後に控え、男子コーチの斎藤貢は、全種目に目を向けるよりもスラロームを重点種目にして今後強化を図る、とスキー年鑑で報告している（引用SAJウェブより）。

第48回全日本選手権は2年後に開催を控えた札幌五輪を見据え、プレプレ五輪とし、恵庭岳滑降競技場／手稲山アルペン競技場を使用したレースとなった。

回 転 村山八千代（東洋木材）

1971年 札幌五輪を来年に控え、プレ五輪が開催される。

第49回全日本選手権が恵庭岳滑降競技場／手稲山アルペン競技場で開催され回転で柏木正義（芝浦工業大学：北照）が優勝

1972年 札幌五輪が開催され、柏木正義（日仏貿易：北照）岡崎恵美子（アジアスキー）が日本代表として派遣され、見谷昌禧が日本スキー界初のプロフェッショナルコーチとして派遣される。

柏木正義は回転18位、大回転棄権、岡崎は回転13位、大回転32位、滑降41位の成績を収める。

柏木は、今記念誌に頂いた執筆記事にあるように日本のアルペンスキー界が暗中模索し、手

探りで世界の壁を破ろうとしていた時に、自分に厳しくトレーニングに励み、後述するが小樽で初の世界ランカーとなった。

また、当時、札幌五輪に特別コーチとして招聘されたヒアス・ライトナー(オーストリア)の息子であるクリスチャン・ライトナーは2011年から日本チームのコーチとして活躍している。

アメリカのレイクプラシッドで開催されたユニバーシアードにて柏木正義(日仏貿易:北照)が2位となる

**1973年** 新潟の苗場スキー場でFISアルペンワールドカップがアジア圏内で初開催される。

柏木正義(帝国観光:北照)は日本人選手として初の10位入賞を記録した。

第51回全日本選手権は当初予定されていた宮城県鳴子が雪不足であり長野県野沢温泉に変更となり、柏木正義(帝国観光:北照)と岡崎恵美子(アジアスキー)が回転で共に優勝した。

**1974年** サンモリッツで開催された世界選手権に岡崎恵美子(アジアスキー)が派遣され大回転36位、回転28位の成績を収める

**1976年** 第54回全日本選手権が富良野で開催され回転・大回転で岡崎恵美子(アジアスキー)が優勝し、二冠王となる。

**1977年** アジアスキーがアジアスキー商会の系列から離れ、北海道通信電設(本社・小樽)グループに入るとともに、社名も北海道イレブン株式会社となる。

第55回全日本選手権が秋田県の田沢湖町で開催され、悪天候のため1週間後に回転のみ長野県の岩岳でおこなわれた。

**1978年** 第56回全日本選手権が長野県白馬村で開催され大回転で上山利治(西沢スキー:北照)が優勝した。

**1979年** 6月5日、北海道イレブン株式会社倒産により、アジアスキー消滅の憂き目に遭う。

第57回全日本選手権がニセコで開催され、大回転で2本制レースが初採用される。回転で上山利治(西沢スキー:北照)が優勝した。

**1980年** 第58回全日本選手権が滑降は北海道ニセコで行われ、長野県白馬村で回転、札幌で大回転が行われた。

滑降では当時高校2年生の相原博之(北照)が日本スキー界初の全日本選手権高校生チャンピオンとなり、大回転・回転で上山利治(西沢スキー:北照)が二冠王に輝き、男子は北照出身者で表彰台を独占する。なお、滑降では佐藤譲(北照)が2位となり、1, 2フィニッシュを飾る。

**1981年** ドイツのオーベルシュタフェンで開催されたWorld Cup コンビネーションにおいて大



地元出身で逸早く世界のピステで活躍  
ワールドカップで入賞した  
大高弘昭 6位(ドイツ オーベルシュタフェン)



猪谷千春以来の世界大会での優勝  
ジュニア世界選手権優勝  
伊藤 敦(アメリカ シュガーローフ)

高弘昭（ヤマハ：北照）が6位入賞を記録した。

第59回全日本選手権が青森県大鰐で開催され、滑降で相原博之（北照）が2連覇、そして女子では横尾恵理（トーモク）が優勝した。

**1982年** 第1回世界ジュニア選手権がフランスのオーロンで開催され、岡部哲也、古川昇（共に北照）佐藤幸恵（昭和高校：現明峰）が派遣される。

岡部哲也が大回転28位、回転で18位、古川昇は大回転38位、回転で28位、佐藤幸恵は大回転で34位、回転で25位となる。

**1983年** ワールドカップが富良野で開催され回転で大高弘昭が13位となる。

イタリアのセストリエールで第2回世界ジュニア選手権が開催され、岡部哲也が6位入賞を記録した。

第61回全日本選手権は岩手県の雫石で開催され、滑降で相原博之（日本体育大学：北照）、回転で佐藤幸恵（小樽昭和高校：現明峰）が優勝した

**1984年** アメリカのシュガーローフにて第3回世界ジュニア選手権が開催され、伊藤敦、後藤伸昭（共に北照）本間寿（双葉）が派遣される。

伊藤敦が回転で優勝という快挙を成し遂げる。伊藤は大回転で24位、後藤伸昭は回転で途中棄権、大回転で33位、本間寿は回転で途中棄権、大回転で31位となる。

第62回全日本選手権が岩手県の雫石で行われ相原博之（日本体育大学：北照）が二連勝を飾る。

**1985年** イタリアのボルミオで世界選手権が開催され、大高弘昭（ヤマハ：北照）と岡部哲也（デサント：北照）相原博之（日本体育大学：北照）佐藤幸恵（リーベルマン：小樽昭和）本間寿（双葉）が派遣される。

大高弘昭は回転14位、大回転は途中棄権となる。岡部哲也は回転で途中棄権、大回転は20位となる。

佐藤幸恵は大回転で39位、回転で22位となる。

相原博之（北照出身）、本間寿（双葉出身）も派遣されるが怪我の為、出場せず。

フランスのラモンジーで行われたワールドカップ回転で岡部哲也が15位となり、初ワールドカップポイントを獲得する。

チェコのヤスナで世界ジュニア選手権が行われ、後藤伸昭（北照）が回転で10位、大回転で51位となる

第63回全日本選手権が岩手県の雫石で開催され、大回転で岡部哲也（デサント：北照）、女子回転で佐藤幸恵（リーベルマン：昭和）が優勝する。

**1987年** ワールドカップ技術系種目でフィリップ15（リバーズ15：1本目のトップが2本目は15番スタート）が採用される。

スイスのクランモンタナで世界選手権が開催され、岡部哲也（デサント：北照）と佐藤幸恵（リーベルマン：昭和高校）が派遣される

岡部哲也は回転で17位となり、佐藤幸恵は回転で途中棄権、大回転36位となる。

岡部哲也がヨーロッパカップ回転で種目別優勝を飾る



ワールドカップ スピード系初の入賞  
相原博之 9位（フラノ ダウンヒル 9位）





小樽が生んだスーパースター 岡部哲也。世界のトップスラローマーとして数々の成績を残した

ワールドカップでは岡部哲也がイタリアのマドンナ・ディ・カンピリオで14位、そして当時ユーゴスラヴィアの首都であるサラエボで開催された回転で4位入賞の快挙を成し遂げる。

同時に日本人初の快挙として相原博之が富良野で開催されたワールドカップ滑降で9位となる。

第65回全日本選手権が旭川市および長野県栂池で行われ、滑降で相原博之（東海大：北照）が優勝、大回転および回転で岡部哲也（デサント）が二冠王に輝く。今レースよりスーパー大回転が採用される。

**1988年** カナダのカルガリーにて冬季五輪が開催され、岡部哲也（デサント：北照）が派遣され回転で12位、大回転28位となる。

ノルウェーのオップダールで開催されたワールドカップで岡部哲也が日本人初の快挙となる2位となり表彰台に立つ。

このシーズン、岡部哲也はワールドカップにおいてオーストリアのザールバッハで8位、スイスのバド・キルヒンクライハイムで6位、イタリアのマドンナ・ディ・カンピリオで12位、スウェーデンのオーレで14位を記録する。

イタリアのマドンナ・ディ・カンピリオで開催された第9回世界ジュニア選手権に二瓶勝（北照）が派遣され、滑降で53位、スーパー大回転で57位、大回転で69位、回転で途中棄権となる。

**1989年** アメリカのヴェイルで世界選手権が開催され、岡部哲也（デサント：北照）が派遣され、回転で途中棄権となる。

ワールドカップではイタリアのセストリエールで2本目にラップタイムを記録し、5位、スロベニアのクラニスカ・ゴラで7位、オーストリアのキットビューエルで9位、富良野で10位、スイスのウェンゲン13位を記録した。

スイスのズィナールで開催された第10回世界ジュニア選手権に加藤祐希（双葉）が派遣され回転で21位、滑降で27位、スーパー大回転と大回転で途中棄権となる。

第67回全日本選手権が長野県志賀高原（スピード系）・名寄で技術系が開催されスーパー大回転 伊藤敦（兼松スポーツ：北照）、大回転および回転 岡部哲也（デサント：北照）、加藤祐希（双葉高校）が優勝した。

**1990年** ワールドカップシュラドミング大会で岡部哲也が自身2度目の表彰台となる3位に入賞する。今季、岡部哲也はカナダのモン・サン・タンヌでは2本目にラップタイムを刻み4位、スイスのベイゾナで同じく2本目ラップタイムをマークし4位、スウェーデンのセーレンで4位、オーストリアのキッツビューエルで5位、ノルウェーのゲイロで6位、オーストラリアのスレドボでは13位を記録し、名実共に世界のトップスラローマーとなる。

第63回全日本選手権が岩手県雫石および旭川で行われ、滑降およびスーパー大回転で加藤祐希（双葉高校）が優勝し二冠王になる。

**1991年** オーストリアのザールバッハにて世界選手権が開催され、岡部哲也（デサント：北照）が派遣され、回転途中棄権。

岡部哲也はワールドカップでは、スロベニアのクラニスカ・ゴラで5位、オーストリアのキッツビューエルで5位、ノルウェーのオップダールで9位を記録した。

#### **1992年**

フランスのアルヴェールヴィルにて冬季五輪が開催され、岡部哲也（北照出身）が派遣され回転18位となる。

ワールドカップでは岡部哲也がオーストリアのキッツビューエルで19位となる。

アメリカのレイクプラシッドで開催された世界ジュニア選手権で柏木久美子（石山中学）が派遣され、スーパー大回転で30位、回転と大回転で途中棄権となる。

**1993年** 岩手県の盛岡雫石にて世界選手権が開催され、岡部哲也（デサント：北照）が派遣される。回転途中棄権。

ワールドカップではスウェーデンのオーレで行われたスラロームで岡部哲也が12位を記録する。

第71回全日本選手権がニセコおよび青森県大鰐で行われ、回転で岡部哲也が優勝する

**1994年** ノルウェーのリレハンメルにて冬季五輪が開催され、岡部哲也（デサント：北照）が派遣され、回転途中棄権となる。

**1995年** 2月、世界のトップスラローマーとして活躍した岡部哲也（デサント：北照）が引退した。

ノルウェーのボスで開催された世界ジュニア選手権で皆川賢太郎（北照）と柏木久美子（双葉）が派遣される。

皆川賢太郎は回転で12位、大回転で36位、柏木久美子は回転で16位、大回転で23位となる。

**1996年** スイスのシュビーツで開催された世界ジュニア選手権で皆川賢太郎（北照）が派遣され回転で5位、大回転で9位となる

**1997年** イタリアのセストリエールで開催された世界選手権で柏木久美子（双葉）が派遣され、回転で31位、スーパー大回転35位となる。

オーストリアで開催された世界ジュニア選手権に柏木久美子（双葉）が派遣され、回転で途中棄権、大回転で18位となる。

第75回全日本選手権は長野県白馬村（スピード系）および岐阜県鈴蘭高原（技術系）で行われ、滑降およびスーパー大回転で鈴木彩乃（双葉高校）が二冠王となる。男子回転では皆川賢太郎（日本体育大学：北照）が優勝した。

なお、高速系の滑降とスーパー大回転では長野五輪を前年に控え、長野五輪使用コースを使用する。本来はフルレギュレーションで行うはずが、日本人選手のF I SポイントのレベルからTDの判断によりスタート地点を下げて開催された。

**1998年** アジアで二度目となる冬季五輪が長野にて開催され、皆川賢太郎（日本体育大学：北

照)と柏木久美子(SW苗場:双葉)が派遣される。

皆川賢太郎(日本体育大学:北照)は大回転・回転とも途中棄権。

柏木久美子(SW苗場:双葉)は親子二代の五輪選手となり回転で24位、スーパー大回転で36位、大回転で27位となる。

フランスのメジエーブで開催された世界ジュニア選手権で吉岡大輔(北照)が派遣され回転で23位、スーパー大回転で59位、大回転で50位となる。

第76回全日本選手権が長野県白馬村および群馬県尾瀬岩鞍で開催され、男子大回転で皆川賢太郎(日本体育大学:北照)が優勝する。

今レースより全日本選手権の滑降が廃止される。

**1999年** ヴェイルで開催された世界選手権に柏木久美子(SW苗場:双葉)が派遣され、回転で30位となる。

スロバキアのヤスナで開催されたユニバーシアードにて皆川賢太郎(日本体育大学:北照)が大回転6位、回転4位となる。

フランスのプラループで開催された世界ジュニア選手権に吉岡大輔(北照)と佐々木明(北照)が派遣される。

吉岡大輔はスーパー大回転で43位、回転と大回転で途中棄権となり、佐々木明はスーパー大回転で46位、回転で24位、大回転で27位となる。

第77回全日本選手権が岩手県雫石および長野県白馬村で開催され男子大回転で皆川賢太郎(日本体育大学:北照)が二連覇する。

**2000年** オーストリアのキッツビューエルで開催されたワールドカップ回転で皆川賢太郎(エオススキークラブ:北照)が6位入賞、そして韓国のヨンピョンでも6位を記録する。

女子では柏木久美子(SW苗場:双葉)がイタリアのセストリエール回転で24位、スウェーデンのオーレで26位、イタリアのサンタ・カテリーナで27位を記録する。種目確認



入賞にガッツポーズの皆川賢太郎



ワールドカップ 6位入賞の皆川賢太郎  
イタリア・セストリエール

カナダのケベックで開催された世界ジュニア選手権に吉岡大輔(北照)、佐々木明(北照)が派遣され、吉岡大輔は大回転で18位、回転で途中棄権、スーパー大回転41位、滑降51位、佐々木明は大回転で34位、回転で17位、スーパー大回転44位、滑降58位となる。

**2001年** オーストリアのサンクトアントンにて世界選手権が開催され皆川賢太郎(エオススキークラブ:北照)佐々木明(日本体育大学:北照)、柏木久美子(SW苗場:双葉)が派遣される。皆川賢太郎は回転で10位入賞、佐々木明は回転で19位、柏木久美子は回転途中棄権、大回転で16位となる。

ワールドカップでは皆川賢太郎がイタリアのセストリエールで6位、オーストリアのキッツビューエルで8位、オーストリアのシュラドミングで10位、スウェーデンのオーレで13位を記録し女子では柏木久美子がオーストリアのセンメリン

グで行われた回転および大回転で20位、スロベニアのマリボルで21位、ドイツのオプターシュワングで22位、イタリアのセストリエールで27位を記録する。

ポーランドのザコパネで開催されたユニバーシアードで吉岡大輔（日本体育大学：北照）がスーパー大回転8位、大回転15位、回転20位、複合で5位となる。

安食真治（法政大学：北照）がスーパー大回転で42位、大回転30位、回転25位となる。

スイスのバルビエで開催された世界ジュニア選手権で佐々木明（北照）が派遣され滑降で48位、スーパー大回転は途中棄権、大回転32位、回転は6位となる。

第79回全日本選手権が長野県野沢温泉と岩手県雫石で開催され大回転で柏木久美子（SW苗場）が優勝する。



ソルトレークオリンピック 出場 14年間の長きにわたり日本女子アルペン界をリードし、女王の座に君臨していた柏木久美子

**2002年** アメリカのソルトレイクシティにて冬季五輪が開催され皆川賢太郎（エオススキークラブ：北照）、佐々木明（日本体育大学：北照）、柏木久美子（SW苗場：双葉）が派遣される。

皆川賢太郎は回転で途中棄権、佐々木明は回転途中棄権、大回転34位、柏木久美子は回転で16位、大回転で35位となる。

ワールドカップでは皆川賢太郎がオーストリアのシュラドミングで2本目ラップタイムを刻み14位、アメリカのアспенで16位、スロベニアのクラニスカゴラで24位、スイスのアデルボーデンで28位を記録した。

日本、そして世界でのトップスラローマーであった岡部哲也氏の功績を讃えFIS岡部カップが天狗山で開催される（のちにキロロスキー場に会場変更）。世界で初の個人名が冠となった試合である。

**2003年** スイスのサンモリッツにて世界選手権が行われ、皆川賢太郎（エオススキークラブ：北照）佐々木明（ガーラ湯沢：北照）柏木久美子（SW苗場：双葉）が派遣される。

佐々木明は回転途中棄権、スーパー大回転で38位、皆川賢太郎が回転途中棄権、柏木久美子は大回転・回転ともに33位となる

ワールドカップではスイスのウェンゲンに佐々木明が絶望的ともいえる62番スタートから自身初となる2位表彰台を記録した。

佐々木明は日本に凱旋レースとなった志賀高原大会で6位、オーストリアのシュラドミングで8位、アメリカのパークシティで12位、韓国のヨンピョンで17位を記録し、皆川賢太郎は韓国のヨンピョンで20位、スロベニアのクラニスカゴラで28位を記録した。

フランスのセレシュバリエで開催された世界ジュニア選手権で四戸智也（北照）が派遣され大回転と回転は途中棄権、滑降で68位、スーパー大回転で65位となる。

**2004年** ワールドカップで佐々木明がスロベニアのクラニスカゴラで4位、イタリアのセストリエールで5位、スイスのアデルボーデンで7位、フランスのシャモニーで9位、アメリカのパークシティで12位、オーストリアのサンクトアントンで13位、オーストリアのシュラドミングで17位を記録し、女子ではオーストリアのリエンツで行われたワールドカップ回転で柏木久美子（SW苗場）が24位を記録した

第82回全日本選手権が長野県志賀高原と白馬村で開催され、大回転で吉岡大輔（アルビレッ

クス新潟)が初優勝を記録する。

**2005年** イタリアのボルミオにおいて世界選手権が開催され、皆川賢太郎(チームアルビレックス新潟:北照)と佐々木明(ガーラ湯沢:北照)、吉岡大輔(チームアルビレックス新潟:北照)、柏木久美子(SW苗場:双葉)が派遣される。

皆川賢太郎(チームアルビレックス新潟:北照)と佐々木明(ガーラ湯沢:北照)は回転で途中棄権、吉岡大輔(チームアルビレックス新潟:北照)は大回転で26位となる。柏木久美子(SW苗場:双葉)は回転で24位となる。

インスブルックで開催されたユニバーシアードに武田竜(近畿大学:北照)が派遣され、回転8位、大回転26位、スーパー大回転途中棄権、滑降29位、複合で18位となる。

佐々木明はワールドカップ回転でイタリアのセストリエールで5位、スイスのウェンゲンで9位、オーストリアのフラッハウで10位、スイスのレンツェルハイデで12位、アメリカのビーバークリークで12位、オーストリアのシュラドミングで23位を記録し、オーストリアのゾルデンで行われた大回転でも24位を記録した。

また皆川賢太郎もクラニスカゴラで7位、セストリエールで11位、シュラドミングで14位、ビーバークリークで18位、フランスのシャモニーで21位を記録した。

**2006年** イタリアのトリノにおいて冬季五輪が開催され、皆川賢太郎(チームアルビレックス新潟:北照)、佐々木明(ガーラ湯沢:北照)、吉岡大輔(チームアルビレックス新潟:北照)が派遣され、皆川賢太郎は0.03秒差の戦後50年振りの4位に入賞した。佐々木明は大回転、回転とも途中棄権、吉岡大輔は大回転で24位となった。

佐々木明はオリンピックでの悔しさをワールドカップで晴らすべく、志賀高原大会で2位となった。

佐々木明はオーストリアのシュラドミングでも2位を記録する。当時の様子をスキージャーナリストとして活躍した木村史与氏は現地からこのようなレポートを送っている。

以下引用:岡部哲也の3位から4半世紀が過ぎた2006年1月24日、岡部の高校の後輩、佐々木明(ガーラ湯沢)が、岡部の記録を塗り替える2位に入賞した。



皆川賢太郎 トリノオリンピック4位入賞  
3位に0.03秒差 惜しくも4位 戦後50年振りの入賞



佐々木 明 ワールドカップ 2位入賞  
志賀高原大会



志賀高原のゴールエリアにて 佐々木 明

アメリカのビーバークリークで4位、志賀高原第2戦で6位、スウェーデンのオーレで9位、オーストリアのキッツビューエルで14位、スロベニアのクラニスカゴラで14位、イタリアのマドンナ・ディ・カンピリオで14位を記録した。

皆川賢太郎はスイスのウェンゲンで4位、オーストリアのシュラドミングで6位、志賀高原第2戦で7位、スウェーデンのオーレで11位、オーストリアのキッツビューエルで12位、アメリカのビーバークリークで13位、志賀高原第1戦で14位、イタリアのマドンナ・ディ・カンピリオで22位を記録した。

カナダのケベックで開催された世界ジュニア選手権で石井智也（北照）が派遣され、回転で23位、大回転で42位を記録した。

第84回全日本選手権が長野県志賀高原と白馬村で開催され、大学卒業後に単独でスロベニア留学をしていた安食真治（陸東レーシング：北照）が大回転で優勝した。

**2007年** スウェーデンのオーレにて世界選手権が開催され、佐々木明が派遣される。

佐々木明（グローバル・エクステンドSC：北照）が回転で途中棄権、大回転で28位、スーパー大回転で54位、スーパーコンバインドで36位となる

佐々木明（グローバル・エクステンドSC：北照）はスロベニアのクラニスカゴラで7位、イタリアのアルタバディアで7位、スイスのアデルボーデンで14位を記録した。皆川賢太郎（チームアルビレックス新潟：北照）は開幕戦のフィンランドのレヴィで13位となるが、その後膝の靭帯を損傷しリハビリ生活となる。

イタリアのトリノで開催されたユニバーシアードに武田竜（近畿大学：北照）が派遣され回転31位、大回転34位、スーパー大回転38位、複合15位となる。

オーストリアのフラッハウで開催された世界ジュニア選手権で石井智也（北照）が派遣され大回転52位、回転は途中棄権。

第85回全日本選手権が岩手県雫石および長野県野沢温泉で開催され、佐々木明（グローバル・エクステンドSC：北照）が全日本選手権回転で初優勝・

**2008年** スペインのフォルミガルで世界ジュニア選手権が開催され、石井智也（北照）が派遣される。

石井智也は回転で銅メダルを獲得する快挙を成し遂げた。大回転は途中棄権であった。

佐々木明（PLMスキークラブ：北照）はワールドカップ回転においてクロアチアのザグレブで7位、オーストリアのシュラドミングで10位、イタリアのアルタバディアで10位、オーストリアのキッツビューヘルで16位、オーストリアのライターアルムで22位、スイスのバド・キ



石井 智也

伊藤 敦以来のジュニア。世界選手権 3位入賞  
(スペイン フォルミガル)

ルヒンクライハイムで22位、スイスのアデルボーデンで26位となり、怪我から復帰した皆川賢太郎（チームアルビレックス新潟：北照）はスイスのバドキルヒンクライハイムで16位、オーストリアのシュラドミング18位、ドイツのガルミッシュで19位を記録した。

**2009年** フランスのバルディゼールにて世界選手権に皆川賢太郎（チームアルビレックス新潟：北照）、佐々木明（PJMスキークラブ：北照）が派遣される。

皆川賢太郎、佐々木明の両名は共に回転で途

中棄権となる。

ワールドカップでは佐々木明がスロベニアのクラニスカゴラで15位、皆川賢太郎がクロアチアのザグレブで23位となる。

第87回全日本選手権は岩手県雫石および長野県野沢温泉で開催され、男子回転で皆川賢太郎（チームアルビレックス新潟：北照）が優勝した。

**2010年** カナダのバンクーバーで冬季五輪が開催され皆川賢太郎（竹村総合設備スキークラブ：北照）と佐々木明（チームエムシ：北照）が派遣される。

皆川賢太郎は回転途中棄権、佐々木明は回転18位を記録する。

フランスのメジューブで世界ジュニア選手権に成田秀将（北照）が派遣され回転42位、大回転途中棄権、スーパー大回転72位を記録する。

ワールドカップでは佐々木明がオーストリアのシュラドミングで9位、ドイツのガルミッシュで11位、クロアチアのザグレブで15位、イタリアのアルタバディアで16位、スイスのアデルボーデンで21位、皆川賢太郎はスイスのウエンゲンで20位、オーストリアのシュラドミングで21位、イタリアのアルタバディアで24位を記録する。

**2011年** ドイツのガルミッシュパルテンキルヒェンにて世界選手権が開催され、佐々木明（チームエムシ：北照）が派遣される。

佐々木明（チームエムシ：北照）は回転で途中棄権を記録した。

トルコのエルズレムで開催されたユニバーシアードに井出菜月（法政大学：双葉高校）が派遣され、回転途中棄権、大回転およびスーパー大回転29位、複合失格となる。

スイスのクランモンタナでの世界ジュニア選手権に成田秀将（北照）が派遣される。成田秀将は回転66位、大回転55位、スーパー大回転82位、滑降87位を記録した。

ワールドカップでは佐々木明がオーストリアのキッツビューエルで24位、スイスのアデルボーデンで26位、クロアチアのザグレブで26位を記録した。

第89回全日本選手権は岩手県雫石および長野県野沢温泉村で開催され、男子回転で武田竜（サンミリオンズスキークラブ：北照）が初優勝を記録した。

**2012年** イタリアのロカロッソで世界ジュニア選手権に成田秀将（北照）が派遣され回転は途中棄権、大回転は36位、スーパー大回転45位を記録する。

第90回全日本選手権は長野県白馬村と札幌テイネで行われ、男子スーパー大回転で成田秀将（北照）が第58・59回滑降二連覇と遂げた相原博之（東海大学教授：北照）、68回大会での滑降優勝の富井剛志（92・98年五輪代表）同大会でのスーパー大回転優勝での石岡拓也（92・94・98年五輪代表）以来の現役高校生として4人目の全日本チャンピオンとなる。

男子回転は復活を期する佐々木明（チームエムシ：北照）が優勝した。

**2013年** オーストリアのシュラドミングにて世界選手権が開催され、佐々木明（ICI石井スポーツ：北照）、石井智也（サンミリオンズスキークラブ：北照）が派遣される。

昨年度の不調から全日本強化指定を外された佐々木明が自費転戦の末、全日本スキー連盟が定めた選考基準であるワールドカップ30位以内1回以上、ヨーロッパカップ15位以内1回以上または20位以内2回以上をクリアし世界選手権の出場権利を勝ち取り、2本目2位のタイムを記録し19位となる。

石井智也は世界選手権において予選方式が取られてから日本人選手として初の1位通過を記録し大回転29位となり、回転は予選失格を記録した。

ワールドカップでは佐々木明がキッツビューエルで16位、ウエンゲンで24位を記録した。

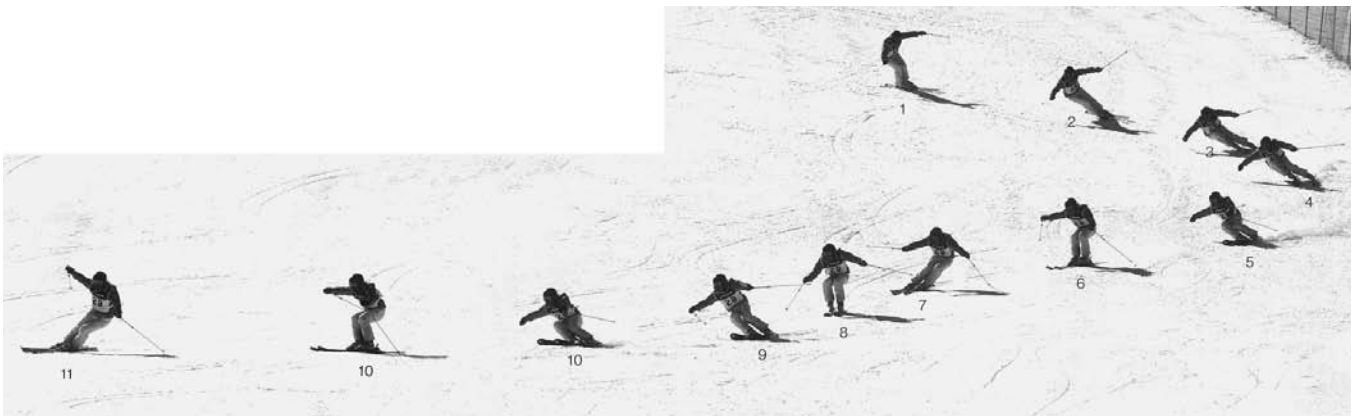
カナダのケベックにて世界ジュニア選手権が開催され安藤麻（北照）が派遣される。安藤麻は大回転37位で回転は途中棄権を記録する。

第91回全日本選手権は岩手県雫石および札幌テイネで開催され大回転で武田竜（サンミリオンスキークラブ：北照）が優勝し、回転で佐々木明（ICI石井スポーツ：北照）が優勝した。

なお男子回転は佐々木明が優勝、石井智也（サンミリオンスキークラブ）が2位、皆川賢太郎（ドーム）が3位と北照出身者が表彰台を独占した。



吉岡大輔



柏木義之

オリンピック 全日本各種大会で活躍し、競技より技術選の世界に転出し  
トップ選手として現在技術選をリードする二人！





## 小樽育ちの優秀ジャンパー

### 戦後のスキー大会

太平洋戦争で敗北した日本は冬季オリンピックの開催返上や、岡崎裕雄（早大OB）、久保登喜夫（明大）等の名選手を失い暗い日々を過ごす中、スキーの復活は他の競技に比べ早いほうであった。特に中根慶雄・渡部龍雄（庁商）は親が木材業を営んでいた関係で、当時の木製スキーの調達には融通をきかせることができ、スキーに取り組むのは早かった。

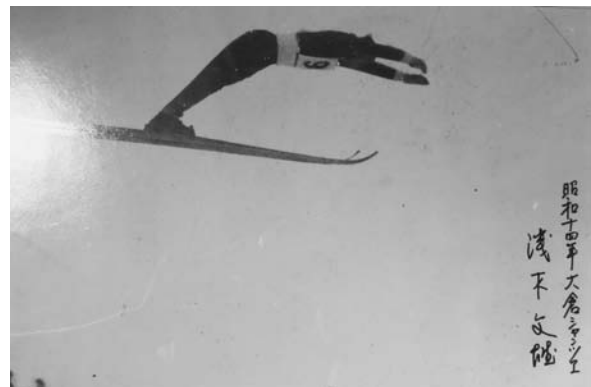
戦後公式大会が開催されたのは昭和21年の全道中学（旧制）大会で、これが昭和24年からの全道高校大会に移行していくが旧制最後の昭和23年大会で渡部満彦・佐藤耕一（樽中）がジャンプと複合で優勝、仙谷功（樽中）も上位入賞をしている。

昭和24年からの全道高校大会は緑陵高校が総合優勝、旧制中学時代を含め3連覇を果たしている。

一方、全国大会では全日本学生選手権（インカレ）が昭和22年に小樽で再開、さらに全日本選手権及び国体が野沢温泉で行われ、これが昭和24年まで兼用大会となった。戦時中のブランクはあったが学生では渡部龍雄（樽経専）、川島弘三（明大） 社会人では戦前同様、浅木文雄（星野昇（奥沢クラブ））が強く、安達五郎や宮島巖、清水健次等は既に全盛期は越えていた。



安達五郎



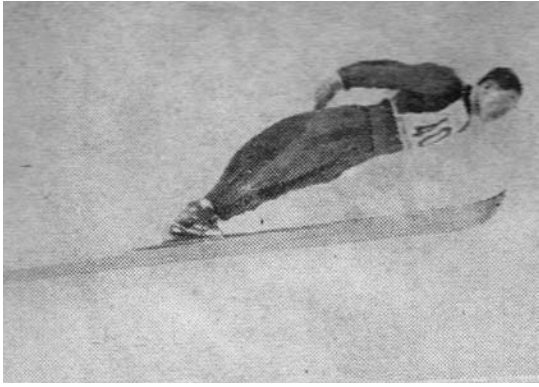
浅木文雄

### 吉沢・佐藤・藤沢時代

昭和27年のオリンピックまでは、加藤菊造・川崎義治・柴野宏明の早大勢と沢原正達・八木博・宇佐美豊彦・今清・佐藤耕一の明大勢が台頭し、若手の成長が目をつけた。しかし同年開催されたオスロオリンピックは浅木文雄・渡部龍雄・川島弘三・吉沢広司の4人と、複合では断然の強さを誇った藤沢良一（明大）が代表となった。出発前の健康診



吉沢広司 全日本選手権優勝 昭和30年



佐藤耕一 国際選抜ジャンプ大会優勝



藤沢良一

断で浅木が古傷の疾患で出場を断念したのは残念であった。成績は渡部の27位が最良と振るわなかったが、複合の藤沢は14位と健闘した。日本チームとしては昭和11年以来16年振りのオリンピック出場で長い間のブランクがあり、ジャンプの飛型の変貌に驚いて帰国した。また、この年は国体が小樽で開催され7万人の観衆が天狗山を埋め尽くし活気づいていた。

これまでの日本のジャンプスタイルは手をゆっくり回したり、止めたり、頭の前に突き出したりしていたが、北欧では手を体側につけたまま（フィンランドスタイル）で何か物足りなさを感じていたが、これが空気抵抗を少なくし遠くへ飛べる要素だと聞いて帰国した。

このフィンランドスタイルにいち早く取り組んだのが佐藤耕一（明大）・酒井清孝・杉山安久（三井芦別）で、彼らはその後全日本選手権や国体で優勝している。

昭和29年の世界選手権代表には14年振りに大倉山のバッケンレコードを更新して張切る柴野

と吉沢が、複合では藤沢が選ばれたが、世界との差は広がるばかりであった。

昭和31年のコルティナダンペッツォオリンピックはジャンプと複合1人ずつの代表枠である。この代表枠争いに頭角を現したのはインカレ3連覇で波に乗る菊地定夫・田畑日出春・太田耕一（明大）や複合優勝の渋谷昭男（早大）、酒井・杉山等の若い力であったが、結局、全日本選手権優勝の吉沢広司（同和鉱業）と佐藤耕一（クローバ・バター）が派遣されることとなった。この大会で猪谷千春が回転で銀メダルを獲得し、日本スキー史上初の快挙を遂げた。吉沢も13位と健闘した。

昭和33年ラハティ世界選手権は菊地定夫（雪印乳業）が初の海外遠征を果たすが30位と思わしい成績は残せなかった。

昭和34年国体では酒井清孝と大森亨一が、翌年の昭和35年には東恒弘と複合の岸本光夫（羽幌炭鉱）もタイトルを手中にしている。



渋谷昭男 全日本選手権優勝 昭和31年



佐藤耕一(左)・吉沢広司(中央)  
コンティナダンペッツォオリンピック 昭和31年

## 菊地・松井時代

昭和35年、スコーパーレーオリンピックの予選会は大倉山で行われ熾烈な争いの結果、代表には菊地・佐藤に加え若い松井孝（早大）が選ばれ吉沢は涙を飲んだ。しかし彼はこの年の全日本選手権で優勝し有終の美を飾った。

オリンピックの成績は15位菊地、22位佐藤、30位松井の順となった。

この頃、道内では工場・鉱山対抗のスキー大会が開催され、三井芦別（酒井・杉山・斎藤孝治）、羽幌炭鉱（竹内賢司・大森享一・岸本光夫）、札鉄

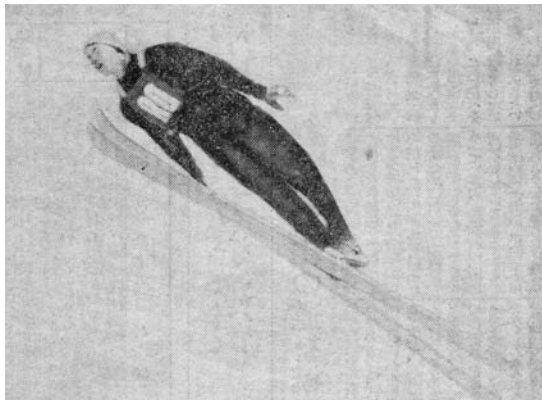
（堤正弘）、旭鉄（竹田外喜雄）、三馬ゴム（渋谷昭男）、東洋高圧、三井砂川などの企業が活躍をしていた。

一方インカレでは松井と山谷晃（関学大）、複合では浅木晃・宮前淳一（明大）、小原巖・堀口招三（中大）等が上位入賞を果たしていた。

世界のジャンプレベルには程遠い日々が続くが、昭和37年のユニバーシアード大会で松井が5位に入賞し、ジャンプ界に久々の光明が見え始める。この年、小樽で10年振りの国体が開催され成年組で菊地が優勝、少年組では宮島啓・高谷建二・杉本政徳の潮陵トリオが入賞し、秋野武夫会長や荒谷敏生率いる小樽ジャンプクラブ員が歓喜を上げた。

当時、菊地は円熟期を迎え全日本A級公認13大会中12大会のタイトルを手中に入れたが、彼が所属する会社の雪印杯は杉山にタイトルを奪われたのは皮肉なものであった。菊地はこれまでインカレ3連覇や国体などで優勝しているが全日本選手権の優勝は今回が初めてである。また、この年から全日本ジャンプ競技は70M級（ノーマルヒル）と90M級（ラージヒル）の2種目に分かれたが両種目とも優勝をして無類の強さを誇っていた。

昭和38年、大倉山シャンツェのプロフィールが変更され、日本で初の100Mジャンプが実現するようになった。国内でこれほど強かった菊地も昭和39年開催のインスブルックオリンピックでは惨敗して帰国する。しかし、その後103.5Mのバッケンレコードを樹立し、全日本選手権でも3連覇を達成した。3月に入り国際大会ではシーズン最後のホルメンコーレン大会に出場。



松井孝 全日本選手権優勝 昭和36年



菊池定夫 小樽国体優勝 昭和29年

今まで日本選手が達成出来なかった入賞（4位）と活気的な成績を残すが、これが限界とこの年で引退をした。

また松井孝（早大）はスコーパーレーオリンピック帰国後の昭和36年、全日本選手権や宮様大会で優勝。この大会で94.0Mのバッケンレコードを樹立し、その後も昭和36年のインカレや昭和39年の国体で優勝したが、昭和41年旭川の国体練習中に負傷しスキー生活を終えた。



杉本 (左)・板垣 (右) グルノーブルオリンピック出発 昭和43年 板垣宏志 全日本選手権70m・90m 2種目優勝 昭和47年

## 青地・板垣一勝呂・荒谷・中野時代

昭和37年頃から小樽出身の学生選手の層が厚くなり、各選手が国際大会や国内大会で活躍し常に上位入賞を果たしている。その頃の主要メンバーは次のとおり。

米田州司・宮島啓・杉本政徳・笠原純一・荒谷一夫・中野秀樹（早大）、青地清二・板垣宏志・上野山俊二・林敏雄・古田修一（明大）、高谷建二・大森喜三雄・蓼沼鋼・斎藤文宏・斎藤公男・斎藤幸三・遠藤裕充・中村守・大崎照弘（芝工大）、片野欣一・東幹男・東恒弘・勝呂裕司（日大）。

昭和43年、グルノーブルオリンピックに青地清二（雪印乳業）、板垣宏志（明大）が代表となった。板垣は複合で10位と健闘した。彼は故郷小樽のアジアスキー製作の国産ジャンプ用スキー『翼』を使用し前半ジャンプで2位につけ世界を驚かせた。これで気持ちを高揚させ続いて開催されたインスブルックのユニバーシアード大会ではジャンプと複合の2種目で優勝した。この大会には高校時代の同級生、杉本政徳も出場しジャンプで12位となっている。



勝呂裕司

昭和45年ピソケタトリーの世界選手権では青地が7位、複合で勝呂が8位、板垣（国土計画）と荒谷は下位に低迷。続くロヴァニエミのユニバーシアード大会でも斎藤公男（芝工大）・板垣・荒谷は力を出し切れず期待はずれとなった。

こんな状況を心配した全日本スキー連盟は、札幌オリンピックに向け選手強化に力を注ぐ。海外遠征の回数や大会出場選手の増員、国内での合宿日数の増加などを図り、集中的な強化練習の結果ワールドカップで日本選手が常時入賞を果たすようになり、オリンピックへの期待が強くなってきた。

昭和44年から宮の森と大倉山でジャンプ台の建設工事が着々と進み、翌45年11月に両ジャンプ台が完成した。改修された大倉山は規模は大きくなったが、プロフィールは通常の国際大会で使用されている標準的なものであった。しかし宮の森は、助走路の斜面が30度と緩く特殊な台になったため関係者は驚いた。設計に関与した全日本スキー連盟の伊黒正次（樽中一北大）は笑みを浮かべながら「この台で練習を積み重ねれば必ず日本選手がメダルを取れる」とつぶやいた。

## ○札幌オリンピック

昭和47年2月3日（木）薄曇りの中、真駒内屋外競技場で開会式が行われ、色々なセレモニーの後、聖火が入場。選手宣誓そして最後は浅木文雄（国際飛型審判員）の競技役員宣誓で開会式は終了する。

2月6日（日）快晴微風の中で70M級ジャンプが始まる。1本目終了時の成績は笠谷・青地・金野・藤沢と日本選手4人が上位を独占。大盛況の中で2本目が始まった。青地と藤沢は失敗ジャンプだったが結局、笠谷・金野・青地が金・銀・銅のメダルを獲得。表彰台には3本の日章旗が上がった。

2月11日（金）曇り、朝から風が強く競技開始後は吹雪が選手を襲う、『中断か中止』と思われた90M級ジャンプは時間を掛けながらの競技運営で終了する。日本選手は全員突風に煽られ失速、板垣も振るわず17位でジャンプ競技は終わった。複合競技は国内で圧倒的な強さを誇っていた勝呂（日軽金）、中野（早大）、荒谷（たくぎん）の3人が出場。勝呂は走・飛のバランスが良く5位入賞。中野は前半ジャンプで首位を奪うも後半距離で後れをとり13位、荒谷も15位の成績であった。なお複合コーチは渋谷昭男（三馬ゴム）が務めている。



青地清二



中野秀樹 札幌オリンピック 昭和47年

札幌オリンピック後、レークプラシッドで開催されたユニバーシアード大会で中野が優勝、5位に斎藤（公）、7位に荒谷が入っている。

昭和49年ファルンの世界選手権では青地・板垣・中野と若手の大崎照弘が出場したがいずれも惨敗に終わった。

昭和51年インスブルックオリンピックはジャンプで板垣が20位、複合の勝呂は21位に終わり若手への切り替えを余儀なくされる。開催国オーストリアはこの大会を界にジャンプの世界的発展を遂げ今日に至っている。

## 川端・八木時代

昭和50年代に入り川端隆普美（明大）、八木弘和（北照高）の若手が頭角を現す。この頃、活躍していたのが学生では相内富久・橋本正悟（明大）、間山美和（早大）、今巧（専大）、社会人では中津信男・大橋康孝（雪印乳業）、竹内元康（たくぎん）、木村謙・（国鉄北海道）・今堀弘一（札大）である。川端と八木は後にたくぎんに入社し世界選手権やオリンピックに出場している。

2人が初めて出場した昭和55年レークプラシッドオリンピックは八木が70M級で銀メダル、川端は29位の成績だった。この時のコーチは父親の八木博、銀メダルは親子の努力の賜物で

あった。また、この年に八木はワールドカップ札幌大会で優勝している。同年は小樽で3度目の国体が開催され、当時の皇太子殿下（今の天皇陛下）御夫妻がスキー競技大会を視察されている。昭和56年、八木は全日本選手権で優勝し、57年には宮様大会で119Mの大ジャンプでバッケンレコードを更新するなど全盛を誇っていた。

昭和58年、木村謙は全日本選手権と国体の両タイトルを手中にし、翌年のサラエボオリンピック代表に期待を寄せたが希望は果たせず、代表には八木弘和が選ばれた。しかし成績は19位となり全盛期は終わった。

昭和63年のカルガリーオリンピックには複合で宮崎秀基（東洋実業）が出場するが団体戦9位に終わった。なお、この大会で戦中・戦後の不参加を除き、第2回大会出場の伴素彦から続いていた小樽出身のジャンプ選手の代表が途切れることになったのは非常に残念である。



八木弘和

## 平成のジャンパー（須田・宮平・船木・吉岡）



須田健仁

年号が平成に変わりジャンプの飛型もV字型へと変貌し、これに入念に取り組んだ須田健仁（東京美装）は平成2・3年の国体で連続優勝して自信をつけ、その後アルベールビル・リレハンメル・長野と3度続けてオリンピックの代表となった。彼は性格がおとなしく、常にマイペースであったが努力だけは欠かさなかった遅咲きの選手である。

平成3年札幌ではユニバーシアード大会が開催され、小田正紀（近大）が6位に入賞し、団体戦でも日本チームの優勝に貢献している。また、川崎清司（東洋実業）が全日本選手権を手中にした年でもある。

平成に入って国内大会で上位入賞を果し活躍した選手は下記のとおりである。

・須田健仁（東京美装）・井上隆一（明大）、大島岳久（早大）、斎藤慎一郎（日大）、布施裕樹（国土舘）、折笠博史（専大）、塩谷仁（東海大）、東野雅善・野呂田義一・船木和喜（デサント）、宮平秀治・小田正紀（ミズノ）、沢田和泰・鶴巻信也（NTT）、西森勇二・吉田拓・西下和記（日本空調）・竹内元康・竹内卓也・川崎清司（東洋実業）、石川稔（札幌トヨペット）、西森亨平（丸善食品）・仲村和博（土屋ホーム）。

平成7年全日本選手権で野呂田義一が、国体では鶴巻信也が平成8年には宮平も国体で優勝している。平成10年の長野オリンピックには実績のある須田と宮平、そしてワールドカップで優勝している船木と若い吉岡が代表となったが、本戦のエントリーは船木のみであった。

## ○長野オリンピック

平成10年2月に長野オリンピックが開催され、ノーマルヒルジャンプで船木が銀メダルを獲得、幸先の良いスタートである。この頃の船木はワールドカップの優勝で世界をリードしていた。空中では板と板の間に顔が入る最も美しいフォームが完成。ランディングでも重心の低い安定したテレマーク姿勢が観衆を魅了した。ラージヒルではこの完成したジャンプで金メダルを手中に収める。原田も銅メダルでこのあとの団体戦に期待がかかる。

団体戦は吹雪の中行われた。札幌オリンピックの苦い経験が頭を過ぎる。1本目は原田の失敗で順位は4位となる。天候が悪く降りしきる雪で中断。このまま中止となる気配が漂う。この時トライアルジャンパーとして派遣された野呂田、西森享平（丸善食品）さらに高校生の女性ジャンパー葛西賀子（樽工業）等が立ち上がりテストジャンプを始めた。切れ目なく飛び続け「助走路のスピードに支障なし」と判断したジュリーは競技続行を命じた。これにより日本ジャンプ陣4人が揃って完璧なジャンプを行い、逆転の団体優勝を遂げ見事に金メダルを獲得。船木は金2、銀1と3個のメダルを手中に収めた。

長野オリンピックが終わり平成11年、宮平が全日本選手権で優勝し、ラムソーの世界選手権とワールドカップを転戦する。世界選手権ではノーマルヒルで銀、ラージヒルで銅、団体戦は銀と3個のメダルを獲得、その余勢をかってプラニツァのワールドカップに優勝。この年は宮平にとって最良のシーズンであった。そして小樽では4度目の国体が行われ須田が優勝している。また、皇太子御夫妻が望洋台シャンツェでジャンプ競技を観戦している。

平成12年は成長著しい宮平、船木、吉岡が活躍。全日本選手権で吉岡が優勝、ワールドカップでも上位入賞する

が、平成14年のソルトレイクオリンピックには宮平と船木が代表枠に入り、期待された吉岡は

出場できなかった。この時の成績は団体戦の5位が精一杯であった。ソルトレイク以後、小樽出身ジャンパーはオリンピックに出場していないが、今はベテランとなった吉岡和也（土屋ホーム）が若い田中翔太（加森観光・井原水産）と共に、ワールドカップを転戦し奮闘しているのが現状である。



吉岡 和也



船木和喜 長野オリンピック 平成10年



宮平秀治

## 特筆すべき話題

### ○バッケンレコード

戦前、浅木文雄が日本最大のジャンプ競技場である大倉山ジャンプで79.0Mの最長不倒を記録したが、これを更新したのは昭和27年柴野宏明の84.0Mで実に14年ぶりの快挙であった。その後、佐藤耕一が昭和34年から35年にかけて91.0M、92.5M更に36年に松井孝が94.0Mと更新。そして昭和39年には菊地定夫が103.5Mを記録。これが昭和44年オリンピックのため大改修されるまでの大記録であった。

改修されたジャンプ台はK点が115.0Mとなったが昭和57年に八木弘和が119.0Mを記録する。その後数度改修され、平成5年には須田が124.5M、平成9年は吉岡が128.0Mを記録。現在は145.5Mとなっている。

### ○特殊な記録

- ・菊地 定夫 インカレ3連覇（昭和29年から31年）  
全日本選手権3連覇（昭和37年から39年）
- ・田畑日出春 ジャンプと複合の2種目制覇 国体と全国高校（昭和29年）
- ・山谷 晃 2本とも転倒で優勝 全国高校（昭和30年）
- ・板垣 宏志 ジャンプと複合の2種目制覇 全国高校（昭和39年）  
全日本選手権（昭和41年）  
ユニバーシアード（昭和43年）  
オリンピック3回連続出場（昭和43・47・51年）
- ・斎藤 文宏 ジャンプと複合の2種目制覇 全国高校（昭和40年）
- ・勝呂 裕司 ジャンプと複合の2種目制覇 国体（昭和43年）  
全国高校（昭和43年、44年）  
複合全国高校3連覇（昭和42年から44年）

#### ・日本一の栄冠

全日本選手権は戦後、昭和23年から再開され浅木文雄の優勝から菊地定夫の引退まで1度だけ隣接地出身の選手に奪われたが、17年間小樽出身選手の9人でタイトルを手中にしている。（星野昇・柴野宏明・吉沢広司・渋谷昭男・杉山安久・佐藤耕一・松井孝）



斎藤文宏 2冠に輝く 昭和40年



## ○影の国体功労者

昭和29年の国体から教員の部が出来29、30年に宮島龍雄が35年には中沢昌俊が優勝している。そして37年には沼端健一、38、39年は小林光男が連続優勝、この時小山弘生も上位入賞を果たしている。また、昭和33年には関戸未広（三馬ゴム）も壮年組で優勝している。

## ○国立大学生がインカレ優勝

全日本学生選手権（インカレ）は年々学連登録校が増え続けたため昭和36年から3部制となった。この年から3年連続優勝したのは、小樽スキー連盟第四代会長を務めた高橋次郎の長男高橋冬彦（樽商大）であった。その後45年には青柳彰（東大）が優勝、翌年も2位入賞を果たしている。続く47、48年に大橋康孝（樽商大）が連続優勝、彼は社会人になってからも名門雪印乳業スキー部に入り、複合で国体や北海道選手権で優勝し海外遠征もしている。

## ○家族でジャンパー

スキーマッカと云われてきた小樽では親子・兄弟でジャンプ選手が育っている。戦前は坪川、浅木、野村と有名な兄弟選手がいたが、戦後は親子で活躍した選手もでていたので、その家族を列記する。

### 【親子】

浅木武雄（樽中）と晃（潮陵高）、宮島巖（樽中）と啓（潮陵高）、荒谷敏生（樽中）と一夫（緑陵高）、以上3組の父親は樽中の同級生である。

八木博（北照高）と弘和（北照高）、竹内賢司（潮陵高）と正和（東海第四高）、西森利孝（千秋高）と勇二（樽工高）、斎藤幸三（北照高）と慎一郎（北照高）

### 【兄弟】

中根 慶雄（庁商）・庸光（潮陵高）

渡部 龍雄（庁商）・弘行（樽工高）・満彦（樽中）

八木 博（北照高）・孝（緑陵高）

加藤 菊造（樽中）・隆治（潮陵高）

今 清（緑陵高）・忠（潮陵高）

秋葉 信夫（千秋高）・六三（千秋高）

東 幹男（北照高）・恒弘（北照高）

大森喜久治（潮陵高）・喜三雄（潮陵高）

斎藤 文宏（潮陵高）・公男（潮陵定）・幸三（北照高）

斎藤 孝行（北照高）・英樹（北照高）

竹内 元康（北照高）・卓也（余市高）

## ○ジプシー選手（高校時代）

昭和30年代には、隣町から秋場信夫・六三（手稲町）や岸本光夫（仁木町銀座）が千秋高校に、また蓼沼鋼が山形県米沢市から潮陵高校へ編入してきた。40年代からは勝呂裕司（倶知安町）、中野秀樹・大崎照弘（朝日町）、川端隆普美（上砂川町）、相内富久（札幌市）、工藤哲史（士別市）、今巧（留萌市）、宮崎秀基（上川町）が小樽市内に居を構え北照高校に入学しスキー選手として活躍した。その後、今堀弘一（JR）が母校北照高校の教員となり、選手の育成に努め、船木和喜（余市町）や、西下和記（岩見沢市）など数多くの選手を搬出してい

る。また、日本女子ジャンプのパイオニア的存在である山田いずみは、札幌市から樽工へ通学している。

### ○ジャンプ留学生

昭和31年山形県米沢市で全国高校スキー大会が開催された。当時は小樽潮陵高校の全盛時代である。

一人の少年が初めて見るジャンプ大会でスキーズボンにオレンジラインをつけた選手の姿が目にとまった。父親は無類のジャンプファンで息子をジャンプ選手にするため本人を説得。将来に夢を掛けることとなる。高校生になった彼は念願の潮陵高校に転校、スキー部に入った。これが蓼沼鋼のジャンプの原点である。入学して2シーズン猛練習によって力をつけた彼は3年になった昭和36年春にジャンプの本場北欧のフィンランドにスキー留学をする。

夏はウェートトレーニングで力をつけ、冬はスキークラブに所属して練習に励み急成長、その後国際大会でも優勝することとなる。日本選手も遠征時には各国の風習や生活面で相当お世話になっている。昭和39年潮陵高校に復学。東京オリンピックではフィンランドの通訳も務めている。昭和40年国内大会で活躍し芝工大へ入学。翌年の国体でも上位入賞を果たしている。その後、芝工大のジャンプ陣が強くなったのは彼の指導によるものであろう。また、近年シーズン当初日本のジャンプ選手がフィンランドに遠征し、外国での合宿練習が出来るようになったのは彼の尽力によるものである。

### 終わりに

近年、小樽出身ジャンパーが激減しているが、これはジャンプ少年団員とその指導者不足によるものである。現在、選手生活を終えたジャンパー達が少年団員の発掘に努力しており、これが再びジャンプ界をリードすることを希望するものである。



## 銀メダル掴んだジャンプ父子鷹

1972（昭和47）年札幌五輪、70m級ジャンプの「日の丸飛行隊」（1位笠谷幸生、2位金野昭次、3位青地清二＝緑陵出身）に胸躍った日本人は多い。しかし、76年のインスブリック冬季五輪では笠谷が70m級16位、板垣宏志（＝潮陵出身）が同20位と浮動的な国民の関心を裏切る結果となった。

日本全域にジャンプへの興味を繋ぎ止めたのが、80年レークプラシッド冬季五輪の八木弘和（北照－拓銀）である。70m級ジャンプで1回目87.0m、2回目83.5mと安定した飛躍で銀メダルを獲得。同大会唯一の日本人メダリストとなった。しかし、その表彰式が酷寒で行われたため風邪で体調を崩し、90m級では19位と実力を発揮できなかった。ただし、79-80年シーズンに新設されたジャンプ・ワールドカップでも優勝1回、2・3位各1回、シーズン総合4位と国際的実力を証明している。

84年のサラエボ五輪後に現役を引退。91年、デサントスキー部監督に就任し船木和喜らを育て、2002年には日本ナショナルチームのコーチに就任した。ジャンプ解説者としての定評も高く、長野五輪ジャンプ団体の解説を担当した。

父の八木博（北照－明大）は奥沢で生まれ育ち、天神小入学当時から近隣でジャンプを遊びにしていた。北海商に入学し、戦後の学制改革で北照の第1期卒業生に。自宅近くにオスロ五輪出場の藤沢良一の実家があり、父親同士が友人だった縁で2期上の藤沢と同じく明大に進学。樽中から早大へ進んだ吉沢広司をライバルとして意識し、52年の全日本学生選手権で優勝する。

72年の札幌五輪では宮の森ジャンプ台の係長を務め、3ヶ月半札幌に泊り込んだ。「日の丸飛行隊」の偉業に涙が止まらなかった博が久々に帰宅すると、小6の長男・弘和が「お父さん、俺ジャンプやる」。

インスブリック五輪後、連盟から全日本ジャンプチームヘッドコーチ就任の要請を受けた博が迷った末に思い浮かべたのは、オスロ五輪の候補選手に選ばれながら選考会で失敗した悔しさだった。「俺が叶えられなかった夢を、ヘッドコーチとして弘和に託そう」。



北照2年で全日本入りした弘和とはお互いやりにくかった。敢えて息子を海外遠征から外し、多感な時期の弘和は母（博にとっては妻）に「親父はコーチを辞めないのか」といつも聞いていたという。北照卒業後、拓銀に進んだ弘和は、プレ五輪、欧州ジャンプ週間と好調で、レークプラシッド五輪代表に選ばれる。

そして80年2月7日の70m級ジャンプ。1回目2位につけた弘和に「守ったら駄目だ」と博。しかし身体が硬い弘和。2回目。距離は伸びなかったが2位を維持。後続の飛躍を祈る気持ちで見る父。

結果は八木弘和と東独のデッカートが同点の2位。「息子が銀メダル！」の驚きより、秋元正博も4位入賞し、ヘッドコーチの責任が果たせた安堵感が強かったと後に八木博は語っている。それでも表彰式後に我が子を肩車した時には嬉しさが込み上げ「札幌五輪から8年……日本ジャンプは復活したぞ」と心で叫んだ。



## クロスカン トリー部の歴史

北海道で初めてのスキー競技会は、1914（大正3）年3月20日に銭函で行われた北海道大学スキー部大会といわれる（同部年報による）。競技は2キロのデスタンスレース。つまり本道のスキー競技は「小樽・距離」がその嚆矢だったともいえる。

20年1月25日には、札幌中等学校スキー駅伝競走が実施された（北大スキー部主催）。庁立水産学校裏山スタート、北大グラウンドゴールの7里26町（約30.3キロ）を7区に分けて継走した。北海道初の本格的スキー競技会であり25年からは全国中等学校スキー大会に発展、現在のインターハイに繋がっている。札幌、小樽各4校が参加し、庁立小樽商業が3時間42分37秒で優勝。2位は約12分遅れで庁立小樽中だった。ちなみに以後庁商は3連覇。4、5回目は樽中が優勝を果たしている。

23年2月10、12日に緑ヶ丘で開催された第1回全日本スキー選手権大会では、距離1キロでは樽中勢が1、2位。8キロリレーでは庁商が優勝。北海道総合優勝の原動力となった。また、26（大正15・昭和元）年には小樽高商スキー部が第1回全国実業団スキーリレー大会を開催している。

### 「世界に挑んだ小樽クロスカン トリー」

世界に目を向けると、1932（昭和7）年、米・レークプラシッド冬季五輪に奥沢小出身の坪川武光（早大）が距離・複合競技とも参加し、ともに15位だった。

34年、スイス・ウェンゲンで開かれた万国学生スキー選手権大会（現ユニバーシアド）には樽中出身の木越定彦（明大）が距離16キロで優勝の快挙を成し遂げた。日本のスキー界が国際大会で初めて「日の丸」を掲げたのも距離競技であった。

36年、独・ガルミッシュ・パルテンキルヒェン冬季五輪では関戸力（庁商出身）が距離18キロ55位、リレー11位。複合は関口勇（北海商＝現北照出身）29位、関戸力（前出）が35位だった。

40年に開催予定だった札幌冬季五輪は日中戦争の影響で開催権を返上、52年のノルウェー・オスロ冬季五輪まで日本のオリンピック参加は見送られる。そのオスロ五輪は藤沢良一（水産出身）が18キロで61位、複合競技で14位。藤沢は98年の長野五輪で聖火リレーの走者を務めている。

56年、伊・コルティナダンペッツォ冬季五輪には複合・佐藤耕一（樽中出身）が参加し33位。

68年、仏・グルノーブル冬季五輪には小樽初の女子五輪選手として加藤富士子（双葉－三馬ゴム）が距離5キロ23位、10キロ32位の成績。複合では板垣宏志（潮陵出身）が10位だった。

そして72年の札幌冬季五輪。小樽関係者9選手がスキー競技に出場している。距離競技は男子・工藤誠二（北照出身）が30キロ44位、50キロ29位、女子・大関時子（三馬ゴム）が5キロ37位、10キロ33位、3×5キロリレー9位の成績を残した。また、複合の勝呂裕司（北照出身）が5位入賞を果たしたほか、中野秀樹（北照出身）が13位、荒谷一夫（小樽商出身）が15位だった。

76年、奥・インスブルック冬季五輪は複合の勝呂裕司が2大会連続出場し結果は21位だった。

88年、加・カルガリー冬季五輪は複合に宮崎秀基（北照出身）が37位、団体9位だった。

小樽出身・関係者の五輪出場は残念ながら、距離では札幌五輪の工藤、大関以降30年、複合も宮崎以降15年途絶えている。

## 「距離競技の歴史に輝く名・小樽」

国内の大会でも距離競技の歴史に小樽の名は燦然と輝いている。前述した本邦初の全日本スキー選手権大会は小樽を会場に開催され、栄えある初代覇者は上野秀麿（樽中、1キロ）。8キロリレーでは庁商（野中十郎、畠山一二三、金田芳雄、児島小市）が優勝している。

以下、全日本選手権優勝者を列記すると男子では1925(大正14) 松田幸義、30(昭和5) 坪川武光(15キロ)、33関戸力(少年)、34箕輪正治（小樽缶友、50キロ）、39関戸力（50キロ）、落合力松（北海商、少年）、41・48落合力松（15キロ）、49落合力松(40キロ)、50関戸茂(少年)、52菊地重雄(三馬ゴム、15キロ)、64藤崎進(国鉄、30キロ)、66大塚裕(朝日鉄工、30キロ)、男子継走・国鉄北海道（工藤、渡辺）。

女子では1955（昭和30）年、須田桂子が8キロを初めて制覇。以降、5キロで66・67加藤富士子、71大関時子。10キロ63・66・67・70加藤富士子。継走は58三馬ゴム、62双葉、66・67・69・71・72三馬がそれぞれ優勝している。

国体では男子が1948（昭和23）年、落合力松（成年、長距離）、49落合力松（耐久）、50関戸茂（少年、15キロ）、54・58落合力松（壮年、15キロ）、75村田健一（成年3部B、15キロ）がそれぞれ優勝（48～50年は全日本選手権を兼ねる）。

女子は1953（昭和28）継走で双葉混成、55笹谷敏子、58須田桂子、67加藤富士子、69樋口佐江子（各6キロ）が優勝した。

インターハイは、従来の全国中等学校スキー大会に代わり1949（昭和24）年の第1回全国高校大会で樽商が総合優勝し、翌50年も連覇した。現在のインターハイは52年が第1回大会。第2回の53年から双葉が3連覇を果たし、58年もV、60～63年にかけて4連覇も達成した。男子は潮陵が54、56、57年に総合優勝。北照は62年の初優勝を皮切りに67、70、80、81、85、98（平成10）年にそれぞれ全国を制覇している。

男子継走は1956（昭和31）年潮陵、67年北照が優勝。女子継走は双葉が54、66、67年の3回優勝した。女子10キロでは54年外山弘子（双葉）、67年関戸ゆり（同）が優勝している。

### 北海道スキー選手権大会の優勝者を列記する。

- (男子) ・ S 5 松村顕三（樽中、18キロ）、油谷圭次郎（樽中、複合）
- ・ S 6 箕輪正治（小樽缶友、40キロ）、木越定彦（樽中、幼年18キロ）、樽商（32キロ継走）
  - ・ S 7 関戸 力（樽商、幼年18キロ）、澤本長市（樽商、幼年18キロ）、安立正男（潮陵、成年18キロ）、北海商（32キロ継走、現北照）
  - ・ S21～24 落合力松（成年15キロ）
  - ・ S25 関戸 茂（樽商、少年）
  - ・ S27 菊地重雄（三馬ゴム、成年15キロ）
  - ・ S28～30 落合力松（壮年15キロ）
  - ・ S32 高橋政美（潮陵・少年）
  - ・ S33 渡辺徳雄（北照－札鉄、成年15キロ）
  - ・ S47 工藤誠二（北照－国鉄、成年30キロ、50キロ）
  - ・ S48 工藤誠二（15キロ）
  - ・ S50、51、53、55、56 村田健一（冬戦教、壮年15キロ）

- (女子) 5キロ ・ S 40～42 加藤富士子 ・ S 43 百合野和子 ・ S 44 加藤富士子  
 ・ S 45 横山教子 ・ 46、47、49 大関時子 (以上三馬ゴム)  
 10キロ ・ S 28 笹谷敏子 (双葉-大竹洋裁) ・ S 29～33 須田桂子 (三馬)  
 ・ S 34 島田由紀子 (双葉) ・ S 35 服部十四子 (双葉-三馬)  
 ・ S 36 塚田信子 (双葉) ・ S 37 島田由紀子 (三馬)  
 ・ S 38～42 加藤富士子 (双葉-三馬) ・ S 43 樋口佐江子 (三馬)  
 ・ S 44 加藤富士子 ・ S 45 谷口由紀子 (双葉出身)  
 ・ S 46、47、49、50 大関時子 (三馬)  
 継 走 ・ S 30～37 三馬ゴム ・ S 38、39 双葉 ・ S 40～50 三馬ゴム

#### 全道高校スキー大会の優勝者を列記する。

- (男子) ・ S 24、25 関戸茂 (樽商) ・ S 30 高橋政美 (潮陵) ・ S 38 石村 實 (北照)  
 ・ S 46 馬屋原武雄 (北照) ・ S 49 新国 信 (北照)  
 (女子) ・ S 28 藤田和江 ・ S 29 外山弘子 ・ S 30、31 堀 圭子 (以上双葉)  
 ・ S 33 伊勢友美子 (緑陵) ・ S 34 村山啓子 (緑陵) ・ S 35 大橋昌子  
 ・ S 36 塚田信子 ・ S 37 田中順子 ・ S 38、39 加藤富士子  
 ・ S 40 藤井美子 ・ S 41、42 関戸ゆり ・ S 43 佐藤和子  
 ・ S 49 大林真知子 (以上双葉)

#### 全道高校総合優勝校

- (男子) ・ S 24 樽商 ・ S 25 小樽高 ・ S 26 緑陵 ・ S 29～32 潮陵 ・ S 38 北照  
 ・ S 43～47 北照 ・ S 52～57、H 7、8、10、12～14 北照  
 (女子) ・ S 24、25 小樽女子高 ・ S 26、27 桜陽定時 ・ S 28～50 双葉 (23連覇)  
 ・ S 52、54、61、H 1、7、8 双葉



ここまで述べたよう、小樽の距離競技には輝かしい歴史がある。しかし近年小樽では、児童・生徒のクロスカントリースキー競技人口が激減しておりその栄光は過去のものとなった。ただ昨今、「歩くスキー」が子供から高齢者まで体力に合わせた運動ができるため注目されており、小樽クロスカントリースキークラブは2010 (平成22) 年より「歩くスキーと雪あそびの集い」をからまつ公園で開催し、競技の普及に努めている。

## 「終わりに」

スキー発祥の地小樽・スキーのふるさと小樽と、スキーの環境に恵まれた小樽で生まれ育った私は、その後教師となり北海道や小樽のジュニア部の指導者及び競技役員として、昭和30年代前半より現在までの約50数余年の永きにわたり、スキーに関わってこられたことは大変有意義なことであり感謝しております。

特に小樽市立向陽中学校時代の8年間は、私をはじめ多くの選手達が多くのことを学ぶことができました。それは中学校の立地環境の良さと色々な指導者に恵まれたことが大きかったと思います。クラブ活動では時折双葉高校のグラウンドで双葉高校の選手や三馬ゴムの選手と共に練習させてもらえました。双葉高校の岩田勉吉監督や三馬ゴムの関戸末広監督の選手に対する姿勢及び情熱など、そして特にスキーの技術指導法やワックステクニック等は全国大会で通

用する高度なものであり、大変勉強になりました。またそれは同時に有名選手との出会いでもありました。このような良き時代を経験した私は松ヶ枝中、倶知安中とスキーの中心校を経て、生徒の指導から競技運営へと役割が変わっていきました。

高齢化や少子化によるスキー人口の減少と競技選手減少、特に最近では距離競技において小樽では選手が皆無に近い現状であり、頭の痛い問題と感じています。今後の若い指導者に期待したいと思います。

(元小樽スキー連盟クロスカントリー部長・深澤靖弘)



関口勇・関戸カガルミッシュオリンピック代表(昭和11年)



三馬ゴム女子スキー部(中央)加藤富士子



国体 成年 少年優勝



岩田先生と



1963年国体(鳴子)



## 安全対策部の歴史

戦後から昭和30年代前半まで小樽スキー連盟の組織の中に「傷害防止対策部」（以下傷対部）はなく、連盟としてどのように位置づけられていたのか定かでないが、この頃のスキー界では「ケガと弁当は自分持ち」というのが常識であり、スキー場でのケガは自己責任であった。さらに大きな大会には自衛隊の衛生部の支援などがあったため、日常でのスキーのケガについて連盟の組織の中で責任をもって対処しようとする動きはなかった。

しかし、昭和30年後半に入り、スキー人口の増加に伴うスキー場の増設やリフトの普及によりスキー場でのケガが目につくようになり、地元のスキーヤーを地元の人が救助できるよう何とかしたいという関係者も増え、そのためには資格を取得させ、その有資格者を組織してスキーヤーの安全を守りたいという機運が盛り上がってきた。

昭和33年（1958年）には全日本スキー連盟の中に理事会直轄の「傷害防止対策委員会」が発足し活動を開始するようになった。（池田利勝が昭和46年～53年まで委員を務めた。）

そんな中、昭和36年（1961年）1月に日本赤十字社の「第1回スキーパトロールコース救急法講習会」が小樽市の朝里川温泉で開催され、日本で初めて適任証の資格をもつ70人のパトローラーが誕生した。この中に小樽から原田善雄、横山旦、池田利勝、西島英雄、内山拓治、毛利修三、河合義雄、古谷勤、上島晃一、柴田俊一、原田俊、吉井孝一、太田雪雄、渡辺敏郎、肥田誠一、佐々木辰雄などその後の小樽スキー連盟を担うそうそうたるメンバーが資格を取得し、講師としては日本赤十字社小森栄一課長、全日本スキー連盟の柴田信一技術委員長、西島英雄小樽指導員会会長や一原有徳小樽山岳会顧問や気象台職員など多彩なメンバーが担当し、スキーのケガに対するスキー界の関心の深さが感じられる。2月には合格者による「北海道スキーパトロール赤十字奉仕団」が結成され、翌年（昭和37年）には「小樽地区スキーパトロール赤十字奉仕団」が結成された。

この年から天狗山、朝里のスキー場でのパトロール奉仕活動を開始すると共に小樽で開催された「第17回冬季国民体育大会」に自衛隊の衛生隊とともに協力し、さらには各種スキー大会の救護係や「小樽スキー観光まつり」などに参加するなどの活動を行うようになった。



スノーボードによるケガ人の搬送



スキー場での救助活動の様子

また日赤と同じ昭和36年（1961年）の4月には群馬県万座スキー場で「全日本スキー連盟公認スキーパトロール講習検定会」が開催され17名が合格している。

そして昭和42年（1967年）に正式に小樽スキー連盟に「傷対部」が設置され、この部分を



「小樽地区スキーパトロール赤十字奉仕団」が担当することとなり、同時に小樽スキー連盟の加盟団体となった。初代の傷対部長に池田利勝が任命され、富田英稔、北島三郎などが担当したが、その後は日赤小樽奉仕団の事業部長が担当するようになり今日まで続いている。

昭和45年には日本赤十字社と全日本スキー連盟と話し合いが行われ、別々に養成していたスキーパトロール講習検定会をスキー技術はSAJ、救急法は日赤が担当で実施し、両方の資格を取得させた。すでにどちらかの資格を持っている者は、研修会参加で両方の資格を取得できるようになった。

さらに、これらの講習検定、研修に対応するために、昭和49年には全日本スキー連盟に「パトロール技術員制度」ができ、小樽から田中良明、戸塚浩司、藤田隆明が選出され、その後小林清繁、今村伸八、佐藤貴文、藪智樹と今日まで続いている。

日赤とSAJ共催のパトロール講習検定会と研修会は昭和62年（1987年）まで14年間続いたが、昭和61年に「傷対委」が理事会直轄から教育本部「傷対部会」に移入し、SAJとして養成に十分な時間が取れないことや、折からの国家認定資格の動きなどにより、日赤との共催を破棄し、SAJ独自のパトロール養成に踏み切ることとなった。



公認スキーパトロール研修会の様子



公認スキーパトロール検定会の様子

一方、日赤も昭和63年（1988年）からA・B単位によるパトロール養成を開始し、平成10年度には「雪上安全法」指導員制度がスタートし、別々の公認資格者を養成することになった。

小樽においては、連盟傷対部と日赤奉仕団とは表裏一体の関係にあり、傷対部の部長及び専門委員会の組織は日赤奉仕団に任され、分裂以前の体制がその後も維持され、SAJ資格者も日赤の資格者も混在しながら今日までスムーズに続いている。

平成5年（1993年）に北海道スキー連盟の「傷対部」は教育本部に「安全対策部会」と名称を変更し吸収され、道連独自のパトロール技術員が誕生した。小樽からは穴田俊男、佐藤寿、小川 史、剣持敏子、打矢邦彦らが選出されている。

平成7年（1995年）に小樽スキー連盟も「傷害防止対策部」から「安全対策部」に名称を変更した。

現在、「安全対策部」は連盟の各セクションからの要請により、各種大会、行事の「救護係」の配置及び大会支援を行っているが、パトロール本来のスキー場での安全指導活動、救護活動や資格取得養成活動や研修活動などは日赤奉仕団組織が中心となって活動しているのが現状である。

（文責 安全対策部長 戸塚浩司）

## 連 盟 史 (教育部 1970年～2013年)

西 暦	年 号	<ul style="list-style-type: none"> <li>○小樽スキー連盟教育部行事等</li> <li>◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係</li> <li>◇道連役員・技術員</li> </ul>
1970	昭和45年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○小樽アルペンスキークラブ、天狗スキー倶楽部、小樽チャレンジクラブ加盟</li> <li>◎第25回全道選手権ノルディック開催(1月)</li> <li>第7回北海道デモ選 谷内成次(7位)、斉藤博、川瀬譲治、青山勝、角瀬隆啓、戸塚浩司、八木登世美</li> <li>第7回全日本デモ選 箕輪文好(16位)、八木登世美(3位)</li> </ul>
1971	昭和46年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○天狗山シャンツェ70m級に改修 ジャンプ少年団結成(6月)</li> <li>◎第23回全道高校大会開催、男子小樽北照女子小樽双葉優勝(1月)。</li> <li>第8回北海道デモ選考会(3月13日～14日・天狗山スキー場) 本間照康(3位)、箕輪文好(10位)、天野友嗣(14位)、山田哲(15位)、谷内成次(16位)、角瀬隆啓(17位)、青山勝(20位)、畑中史雄、川瀬俊介、川瀬譲治、吉村幸明、浦岡悟</li> <li>女子オープン演技 八木登世美(2位)、八木まり子(3位)</li> <li>第8回全日本デモ選考会(4月3日～5日・於：八方尾根スキー場) 山田哲、畑中史雄、本間照康、天野友嗣、八木まり子(4位)、八木登世美(7位)</li> </ul>
1972	昭和47年	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎道スキー連盟副会長に藤沢伸光就任</li> <li>第9回北海道デモ選考会 本間照康(5位)、箕輪文好(7位)、畑中史雄(11位)、天野友嗣(16位)、山田哲(17位)、角瀬隆啓(19位)、永田貴信、高橋信太郎</li> <li>女子オープン演技 八木登世美(2位)、八木まり子(3位)</li> <li>第9回全日本デモ選考会 本間照康(26位)、箕輪文好(41位)、畑中史雄(55位)、山田哲、天野友嗣(欠)、八木まり子(3位)、八木登世美(4位)</li> </ul>
1973	昭和48年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第1回小樽市中学校スキー大会始まる。全道クロスカントリー大会をはじめ、アジア杯、白樺杯、道新杯、小樽市長杯、小樽教育杯の各少年ジャンプ大会始まる。</li> <li>◎第10回北海道デモ選考会 本間照康(5位)、畑中史雄(9位)、山田哲(10位)、箕輪文好(11位)、角瀬隆啓、青山勝、永田貴信、高橋信太郎</li> <li>第10回全日本デモ選考会 本間照康(27位)</li> </ul>
1974	昭和49年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○スカイウェーリフト市営に 第1回天狗クラブ杯距離競技始まる。天狗山麓マラソン大会始まる(10月)</li> <li>◎第11回北海道デモ選考会(2月9日～10日・小樽天狗山スキー場)</li> <li>本間照康(6位)、箕輪文好(11位)、畑中史雄(8位)、山田哲(15位)、柴田俊介(17位)、天野友嗣(25位)、角瀬隆啓(29位)、永田貴信、高橋信太郎</li> <li>第11回全日本デモ選考会 本間照康、天野友嗣、箕輪文好、畑中史雄、柴田俊介</li> </ul>
1975	昭和50年	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎第12回北海道デモ選考会(2月1日～2日・小樽市国設天狗山スキー場) 本間照康(5位)、天野友嗣(6位)、柴田俊介(13位)、箕輪文好(15位)、山田哲(16位)、角瀬隆啓(18位)、古谷隆(25位)、畑中史雄(27位)、渡辺実、村井邦雄、及川俊文、高橋信太郎</li> <li>第12回全日本デモ選考会 本間照康</li> </ul>
1976	昭和51年	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎第28回全道高校大会で女子小樽双葉24連勝ならず(1月)</li> <li>第13回北海道デモ選考会(上砂川国際スキー場) 木下和義(7位)、天野友嗣(10位)、鍋島政高(24位)、山本浩一(25位)、古谷隆(26位)、角瀬隆啓(30位)、高橋信太郎(38位)、村井邦雄</li> </ul>
1977	昭和52年 指導員 143名 準指導員 71名	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基礎スキー指導員検定第1会場(小樽天狗山スキー場)</li> <li>常任技術員理論研修会(小樽朝里川温泉北海道友愛山荘)</li> <li>◎第14回北海道デモ選考会(上砂川国際スキー場) 木下和義(3位)、鍋島政高(9位)、天野友嗣(12位)、荒木誠(26位)、古谷隆(35位)、高橋信太郎(43位)、竹内章</li> <li>第14回全日本デモ選考会(八方尾根スキー場) 鍋島政高(45位)、木下和義(70位)</li> <li>◇道連副会長(柴田信一)、理事(毛利修三)、技術委員会委員長(琴坂守尚)、指導委員会委員長(野戸廣美)、技術員(中林昭夫、横川 功、小野武男、斉藤 佐、岡本博司、飯田誠一、永田貴信)</li> </ul>
1978	昭和53年 指導員 146名 準指導員 61名	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第1回小樽スキー運動会始まる 30m級プラスチックジャンプ台潮見台に完成(全道初)</li> <li>基礎スキー指導員検定第1会場(小樽天狗山スキー場)</li> <li>常任技術員理論研修会(小樽朝里川温泉北海道友愛山荘)</li> <li>準指導員ゼミナール(天狗山トレーニングハウス、天狗山国設スキー場)</li> <li>◎道スキー連盟顧問に藤沢伸光就任</li> <li>第14回北海道デモ選考会(上砂川国際スキー場) 鍋島政高(5位)、山本浩一、山本勉、金山雄二、吉井研二、角瀬隆啓、古谷隆、竹内章、村井邦雄、及川俊文、荒木誠、木下和義、高橋信太郎</li> <li>第15回全日本デモ選考会(八方尾根スキー場) 木下和義(48位)、鍋島政高(52位)、荒木誠、鎌田泰子(2位)、深井則子</li> </ul>

西 曆	年 号	<p>○小樽スキー連盟教育部行事等</p> <p>◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係</p> <p>◇道連役員・技術員</p>
1979	昭和54年 指導員 150名 準指導員 75名	<p>○第1回小樽スキー運動会始まる 30m級プラスチックジャンプ台潮見台に完成(全道初)</p> <p>基礎スキー指導員検定第1会場(小樽天狗山スキー場)</p> <p>常任技術員理論研修会(小樽朝里川温泉北海道友愛山荘)</p> <p>準指導員ゼミナール(天狗山トレーニングハウス、天狗山国設スキー場)</p> <p>◎道スキー連盟顧問に藤沢伸光就任</p> <p>第14回北海道デモ選考会(上砂川国際スキー場) 鍋島政高(5位)、山本浩一、山本 勉、金山雄二、吉井研二、角瀬隆啓、古谷隆、竹内章、村井邦雄、及川俊文、荒木誠、木下和義、高橋信太郎</p> <p>第15回全日本デモ選考会(八方尾根スキー場) 木下和義(48位)、鍋島政高(52位)、荒木誠、鎌田泰子(2位)、深井則子</p> <p>◇道連副会長(柴田信一)、理事(毛利修三)、技術委員会委員長(琴坂守尚)、指導委員会委員長(野戸広美)、技術員(中林昭夫、横川 功、小野武男、斉藤 佐、岡本博司、飯田誠一、永田貴信)</p>
1980	昭和55年 指導員 161名 準指導員 70名	<p>○小樽ジュニアレーシングチーム加盟 基礎スキー指導員検定会(小樽市朝里ホワイトバレースキー場)</p> <p>常任技術員理論研修会(朝里川温泉友愛山荘)</p> <p>◎道スキー連盟顧問に柴田信一就任、副会長洲上裕夫就任</p> <p>第17回北海道デモ選考会(上川岳国際スキー場) 鍋島政高(9位)、木下和義(12位)、鍋島和宏(19位)、竹内章(23位)、高橋信太郎、金山雄二、林忠彦、荒木誠、及川俊文</p> <p>第1回全日本基礎スキー選手権大会(大和ルーツスキー場) 鍋島政高(26位)、木下和義(52位)、竹内章</p>
1981	昭和56年	<p>◎第18回北海道デモ選考会(上川岳国際スキー場) 鍋島政高(13位)、木下和義(19位)、竹内章(20位)、金山雄二、鍋島和宏、林忠彦、佐藤サイラス</p> <p>第2回全日本基礎スキー選手権大会(大和ルーツスキー場) 鍋島政高(26位)、木下和義(102位)、竹内章(108位)</p> <p>◇道連副会長(柴田信一)、理事・SAJ専門委員(毛利修三)、SAJ専門委員(古谷 勤、琴坂守尚)、指導委員会委員長(野戸広美)、技術委員会委員長(中林昭夫)、SAJブロック技術員(小野武男、飯田誠一、谷内成次、青山 勝)、技術員(斉藤 佐、山本浩一、本間照康、古谷 隆、角瀬隆啓、村井邦男)</p>
1982	昭和57年	<p>○医師団スキークラブ、小樽凸凹スキークラブ、小樽天狗山スキーレーシング加盟。加盟団体24団体となる。天狗山スキー学校S A J公認学校となる</p> <p>◎第19回北海道デモ選考会(大和ルーツスキー場) 霜島敏明(7位)木下和義、竹内章、茂野敏英、鍋島和広、佐藤サイラス、鍋島政高、志摩恵一</p> <p>第3回全日本基礎スキー選手権大会兼デモンストレーター選考会 本間照康(コーチ)、茂野敏英</p>
1983	昭和58年 指導員 165名 準指導員 112名	<p>○小樽スキー連盟会長秋野武夫逝去(7月)。小樽スキー連盟70周年記念式典及び記念誌発刊(11/23)</p> <p>基礎スキー指導員検定会(本部:朝里グランドホテル)</p> <p>準指導員ゼミナール(小樽市朝里ホワイトバレースキー場)</p> <p>◎第20回北海道デモ選考会 茂野敏英(8位)、木下和義(12位)、川崎信夫、住吉徳文、志摩恵一、佐藤サイラス、木露正敏、天野俊英、鍋島和宏、鍋島政高(2部にて1位木下和義)</p> <p>第4回全日本基礎スキー選手権大会兼デモンストレーター選考会 木下和義、茂野敏英、竹内章</p> <p>◇顧問(柴田信一)、教育部副部長(毛利修三)、SAJ専門委員(琴坂守尚、古谷 勤)、SAJブロック技術員(中林昭夫、小野武男、飯田誠一、谷内成次、青山 勝、本間照康、斉藤佐)、技術員(岡本博司、古谷 隆、角瀬隆啓、村井邦男)</p>
1984	昭和59年	<p>◎第21回北海道デモンストレーター選考会兼第5回全日本基礎選予選会</p> <p>茂野敏英(6位)、佐藤サイラス、住吉徳文、竹内章、川崎信夫、木露正敏、(2部にて3位木下和義)</p>
1985	昭和60年 指導員 176名 準指導員 85名	<p>○朝里スキークラブ加盟、基礎スキー指導員検定会(本部:小樽グリーンホテル)</p> <p>準指導員ゼミナール(小樽天狗山スキー場)</p> <p>◎第22回北海道基礎スキー選手権大会兼全日本基礎選手権大会予選会(ルーツ高原スキー場) 鍋島和宏(9位)、竹内章(13位)、鍋島政高(15位)(2部にて1位鍋島政高)、木露正敏、白浜卯、志摩恵一、倉谷秀之、加藤久幸、遠藤雅人、脇坂由信、佐藤サイラス、小助川麻里</p> <p>第22回全日本基礎スキー選手権大会(大鰐スキー場) 竹内章、鍋島和宏</p> <p>◇顧問(柴田信一)、教育部副部長(毛利修三)、SAJ専門委員(中林昭夫)、SAJブロック技術員(琴坂守尚、小野武男、飯田誠一、青山 勝、本間照康、角瀬隆啓、斉藤 佐、野戸広美、佐藤鉄雄)、技術員(古谷 隆、高橋信太郎、林 忠彦、荒木 誠)</p>
1986	昭和61年 指導員 177名 準指導員 90名	<p>○北照スキー部OB会加盟 基礎スキー指導員検定会(本部:小樽天狗山トレーニングハウス)</p> <p>準指導員ゼミナール(小樽天狗山スキー場)</p> <p>◎第23回北海道基礎スキー選手権大会兼全日本基礎選手権大会予選会並びに北海道デモンストレーター選考会(ルーツ高原スキー場) 鍋島和宏(14位)、竹内章(24位)、佐藤サイラス(25位)、菊地章、志摩恵一、加藤久幸、安原政志、沢田洋、祐川俊彦、川崎信夫、白浜卯、坂井孝史</p> <p>◇顧問(柴田信一)、教育部副部長(毛利修三)、SAJ専門委員(琴坂守尚)、全日本専門委員(中林昭夫)、SAJブロック技術員(小野武男、飯田誠一、青山 勝、本間照康、角瀬隆啓、斉藤 佐、野戸広美、佐藤鉄雄)、技術員(古谷 隆、高橋信太郎、林 忠彦、荒木 誠)</p>

西 暦	年 号	<p>○小樽スキー連盟教育部行事等</p> <p>◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係</p> <p>◇道連役員・技術員</p>
1987	昭和62年 指導員 187名 準指導員 111名	<p>○基礎スキー指導員検定会(本部:朝里グランドホテル) 準指導員ゼミナール(朝里川温泉スキー場) テクニカルプライズテスト(小樽天狗山スキー場)</p> <p>◎第24回北海道基礎スキー選手権大会兼全日本基礎選手権大会予選会 鍋島和宏(18位)、沢田洋、斉藤英人、佐藤サイラス、脇坂由信、坂井孝史、富永豊、菊地章、日野間敦、小助川麻里(6位)</p> <p>◇顧問(柴田信一)、理事・全日本専門委員(古谷 勤)、SAJ専門委員(中林昭夫)、SAJブロック技術員(飯田誠一、青山 勝、本間照康、角瀬隆啓、古谷 隆、高橋信太郎、林 忠彦、荒木 誠、佐藤鉄雄)、技術員(竹内章、一原正明、戸塚浩司)</p>
1988	昭和63年 指導員 188名 準指導員 121名	<p>○基礎スキー指導員検定会(本部:朝里グランドホテル) 準指導員ゼミナール(朝里川温泉スキー場) テクニカルプライズテスト(小樽天狗山スキー場)</p> <p>◎第25回北海道スキー技術選手権大会・北海道デモンストレーター選考会・全日本予選会 坂井孝史(12位)、佐藤サイラス(13位)、竹内章(18位)、富永豊、遠藤成美、菊地章、脇坂由信、中川喜直、石沢洋一郎、祐川敏彦、沢田洋、日野間敦、川崎信夫、小助川麻里(8位)</p> <p>第24回全日本基礎スキー選手権大会(八方尾根スキー場) 霜鳥敏明(コーチ)、坂井孝史、佐藤サイラス、小助川麻里</p> <p>第21回デモンストレーター選考会 認定者 佐藤サイラス、竹内章</p> <p>◇技術顧問(野戸広美、琴坂守尚)</p>
1989	平成1年	<p>◎第26回北海道スキー技術選手権大会・全日本予選会 坂井孝史(17位)、佐藤サイラス、菊地章、石沢洋一郎、小助川麻里(7位)、川崎信夫、中川喜直、斉藤隆、平豊広、脇坂由信、日野間敦、平田光一、祐川敏彦</p> <p>SAHデモンストレーター 佐藤サイラス、竹内章</p> <p>◇顧問(柴田信一)、技術顧問(野戸広美、琴坂守尚)、SAJ専門委員(古谷勤)、SAJブロック技術員(角瀬隆啓、高橋信太郎、戸塚浩司、青山 勝、本間照康、古谷 隆)、技術員(橋 映吉、荒木 誠、畑中史雄、宮崎敏憲、松本 徹、千葉玲二)</p>
1990	平成2年 指導員 208名 準指導員 142名	<p>○オーズスキークラブ、キロク開発公社加盟 基礎スキー指導員検定会(本部:朝里グランドホテル) 準指導員ゼミナール(朝里川温泉スキー場) テクニカルプライズテスト(小樽天狗山スキー場)</p> <p>◎第27回北海道スキー技術選手権大会・全日本予選会兼第24回北海道デモンストレーター選考会 坂井孝史(8位)、斉藤英人、茂木寛美(1位)、沢田洋(14位)、佐藤智昭、野戸学、石沢洋一郎、中沢聡、富永豊、国村直弥、田中譲、佐藤サイラス、川崎信夫、窪之内信一、加藤文之、夏村学、安原政志、日野間敦、長谷川千万、小助川麻里、坪田千佳、菊池真理亜</p> <p>第26回全日本基礎スキー選手権大会(八方尾根スキー場) 茂木寛美(6位)</p> <p>第22回デモンストレーター選考会 認定者 佐藤サイラス</p>
1991	平成3年	<p>○柴田信一氏勲五等瑞宝章受章、基礎スキー指導員検定会(本部:朝里グランドホテル)、準指導員ゼミナール(朝里川温泉スキー場)、テクニカルプライズテスト(小樽天狗山スキー場)</p> <p>◎第27回北海道スキー技術選手権大会・全日本予選会 坂井孝史(11位)、富永豊(14位)、菊地章(22位)、大関千秋(1位)、長谷川千万(8位)、小助川麻里(9位)、沢田洋、中沢聡、野戸学、小川賢二、石沢洋一郎、川合聡合、小林純一、田中譲、安田将、夏村学、平田光一、古川洋、加藤文之、日野間敦、菊池真理亜、清水弓美子、島田佳子</p> <p>第27回全日本基礎スキー選手権大会(八方尾根スキー場) 茂木寛美(6位)</p> <p>◇顧問(柴田信一)、技術顧問(野戸広美、琴坂守尚)、SAJ専門委員(古谷 勤)、SAJブロック技術員(青山 勝、本間照康、戸塚浩司、畑中史雄、高橋信太郎、橋 映吉、角瀬隆啓)、技術員(荒木 誠、松本 徹、富崎敏憲、林 忠彦、竹内 章、出口朝彦、小山秀昭、上泉 哲、大関千秋)</p>
1992	平成4年 指導員 236名 準指導員 133名	<p>○デモンストレーター養成講座(朝里川温泉スキー場)、準指ゼミ(朝里川温泉スキー場)、全日本スキー技術選手権大会派遣デモ強化合宿(朝里川温泉スキー場)、テクニカルプライズテスト(天狗山スキー場)、基礎スキー指導員検定会(本部:観光ホテル)</p> <p>◎第29回北海道基礎スキー選手権大会 坂井孝史(8位)、田端夏葉(1位)、大関千秋(2位)、茂木寛美(3位)、長谷川千万(5位)</p> <p>第28回全日本基礎スキー選手権大会(八方尾根スキー場) 長谷川千万(11位)</p> <p>第23回北海道デモンストレーター選考会 認定者 坂井孝史、菊地章、田端夏葉、大関千秋</p>
1993	平成5年 指導員 253名 準指導員 151名	<p>○中央バススキークラブ加盟、デモンストレーター養成講座(朝里川温泉スキー場)、デモンストレーター強化合宿(朝里川温泉スキー場)、準指ゼミ(朝里川温泉スキー場)、全日本スキー技術選手権大会派遣デモ強化合宿(朝里川温泉スキー場)、テクニカルプライズテスト(天狗山スキー場)、基礎スキー指導員検定会(本部:観光ホテル)</p> <p>◎第30回北海道基礎スキー選手権大会 田端夏葉(1位)、茂木寛美(2位)、長谷川千万(3位)、大関千秋(6位)、坪田千佳(9位) SAHデモンストレーター 坂井孝史、菊地章、田端夏葉</p> <p>◇顧問(柴田信一)、技術顧問(野戸広美、琴坂守尚)、SAJ専門委員(古谷勤、本間照康)、SAJブロック技術員(青山 勝、戸塚浩司(企画部副部長)、畑中史雄(強化部部長)、高橋信太郎、角瀬隆啓、荒木誠、松本徹、竹内章)、技術員(林 忠彦、出口朝彦、小山秀明、上泉 哲、川崎信夫、藤田はるみ、森塚勝敏、沢田 洋)</p>

西 暦	年 号	<p>○小樽スキー連盟教育部行事等</p> <p>◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係</p> <p>◇道連役員・技術員</p>
1994	平成6年	<p>◎第31回北海道基礎スキー選手権大会</p> <p>田端夏葉(1位)、大関千秋(2位)、長谷川千万(3位)、石黒真紀(10位)</p> <p>SAHデモンストレーター 坂井孝史、菊地章、田端夏葉、茂木寛美</p>
1995	平成7年 指導員 271名 準指導員 181名	<p>○ハイテクチャレンジキャンプ(朝里川温泉スキー場)、テクニカルプライズ検定(天狗山スキー場)、 準指ゼミナール(朝里川温泉スキー場)、全日本出場者デモ合宿(朝里川温泉スキー場、キロロ)、 基礎スキー指導員検定会(本部:朝里クラッセホテル)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)</p> <p>◎第32回北海道スキー技術選手権大会 大関千秋(1位)、石黒真紀(5位)、長谷川千万(6位)</p> <p>SAHデモンストレーター(95~96) 富永豊、坂井孝史、田端夏葉、大関千秋、長谷川千万、茂木寛美</p> <p>◇顧問(柴田信一)、技術顧問(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三)、SAJ専門委員(本間照康)、 理事・SAJ専門委員(青山 勝)、SAJブロック技術員(戸塚浩司(検定部部长)、畑中史雄(強化部部长)、 高橋信太郎(指導部副部长)、荒木 誠(技術部副部长)、松本 徹(企画部副部长)、竹内 章、林 忠彦、 細野 博(全日本コーチ)、出口 朝彦)、技術員(上泉 哲、沢田 洋、森塚勝敏、藤田晴美、富永 豊、 小鷹孝一、倉谷秀之、瀧澤和也、平田光雄、川崎信夫)</p>
1996	平成8年 指導員 283名 準指導員 174名	<p>○柴田信一名誉会長逝去、ハイテクチャレンジキャンプ(朝里川温泉スキー場)、 道連指定選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、テクニカル・プライズテスト(天狗山スキー場)、 B・C級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)、道連指定デモ強化合宿(キロロ)、 基礎スキー指導員検定会(本部:朝里クラッセホテル)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)</p> <p>◎第33回北海道スキー技術選手権大会 大関千秋(1位)、石黒真紀(3位)、輪島千恵(7位)、長谷川千万(9位)、長谷川千万(6位)</p> <p>SAHデモンストレーター 富永豊、坂井孝史、田端夏葉、大関千秋、長谷川千万</p> <p>◇技術顧問(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三)、SAJ専門委員(本間照康、細野博)、 理事・SAJブロック技術員(青山 勝)、SAJブロック技術員(畑中史雄(強化部部长)、 高橋信太郎(指導部副部长)、荒木誠(技術部副部长)、松本徹(企画部副部长)、竹内 章、林 忠彦、 出口朝彦)、技術員(上泉 哲、沢田 洋、森塚勝敏、藤田晴美、富永 豊、小鷹孝一、倉谷秀之、瀧澤和也、 平田光雄、川崎信夫、穴田俊男、今村伸八、佐藤貴文)</p>
1997	平成9年 指導員 299名 準指導員 184名	<p>○指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、テクニカル・プライズテスト(天狗山スキー場)、 B・C級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)、道連認定デモ/指定選手強化合宿(キロロリゾート)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)</p> <p>◎第34回北海道スキー技術選手権大会 二瓶勝(6位)、坂井孝史(7位)、輪島千恵(1位)、石黒真紀(3位)、 大関千秋(9位)、長谷川千万(10位)</p> <p>SAHデモンストレーター(平成9年度~10年度) 坂井孝史、二瓶勝、大関千秋、石黒真紀</p> <p>◇技術顧問(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三、中林昭夫)、SAJ専門委員(畑中史雄、細野博)、 理事・SAJブロック技術員(青山 勝)、SAJブロック技術員(本間照康(諮問委員会副委員長)、戸塚浩司 (検定部長)、松本徹(企画部副部长)荒木 誠(技術部副部长)、竹内 章(学校体育スキー部副部长)、 出口朝彦(企画部副部长))、技術員(小鷹孝一、川崎信夫、富永 豊、藤田晴美、倉谷秀之、瀧澤和也、 山本博之、岡崎利美、山本梯二、小野寺千恵子、片岡浩一、福森和千代、坂井孝史、佐藤貴文、今村伸八、 佐藤 寿)</p>
1998	平成10年	<p>○85周年誌発行、指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、連認定デモ/指定選手強化合宿(キロロリゾートスキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)</p> <p>◎第35回北海道スキー技術選手権大会 二瓶勝(3位)、坂井孝史(9位)、輪島千恵(2位)、石黒真紀(3位)、 上村文代(4位)、長谷川千万(10位)</p> <p>SAHデモンストレーター(平成9年度~10年度) 坂井孝史、二瓶勝、大関千秋、石黒真紀</p>
1999	平成11年 指導員 334名 準指導員 255名	<p>○スキー大学(朝里川温泉スキー場)、指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、B・C級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)、 道連指定選手強化合宿(キロロススキー場)、基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、 A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)</p> <p>◎第36回北海道スキー技術選手権大会 二瓶勝(7位)、上村文代(1位)、輪島千恵(2位)、石黒真紀(3位)</p> <p>SAHデモンストレーター 坂井孝史、二瓶勝、上村文代、石黒真紀</p> <p>◇技術顧問(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三、中林昭夫)、SAJ専門委員(畑中史雄、細野 博)、 教育副部长・SAJブロック技術員(青山 勝)、技術員(本間照康、戸塚浩司(検定委員長)、松本徹(企画副委 員長)、橋 映吉)、常任技術員(荒木誠(指導副委員長)、竹内 章(学校体育スキー委員会副委員長)、 高橋信太郎(企画副委員長)、佐藤貴文(パトロール))、技術員(川崎信夫、富永 豊、藤田晴美、岡崎利美、 倉谷秀之、小鷹孝一、瀧澤和也、山本博之、山本梯二、小野寺千恵子、片岡浩一、沢田洋、坂井孝史(SAJブ ロックデモンストレーター)、今村伸八(パトロール)、小川史郎(パトロール))</p>
2000	平成12年 指導員 343名 準指導員 254名	<p>○スキー大学(朝里川温泉スキー場)、指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(天狗山スキー場)、 技術員強化講習会(朝里川温泉スキー場)、B・C級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)、 道連指定選手強化合宿(キロロススキー場)、基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、 A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)</p> <p>◎SAHデモンストレーター 坂井孝史、二瓶勝、上村文代、石黒真紀</p>

西 暦	年 号	○小樽スキー連盟教育部行事等 ◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係 ◇道連役員・技術員
2001	平成13年 指導員 302名 準指導員 173名	○公認・認定スキー学校長会議(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山ス キー場、朝里川温泉スキー場)、全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテ スト(天狗山スキー場)、技術員強化講習会(朝里川温泉スキー場)、B・C級公認検定員検定会(朝里川温泉 スキー場)、ハイテク・チャレンジキャンプ(キロロススキー場)、道連指定選手強化合宿(キロロススキー 場)、基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第38回北海道スキー技術選手権大会 二瓶勝(7位)、上村文代(1位)、輪島千恵(3位) SAHデモンストレーター 二瓶勝(SAJデモ)、斉藤人之、上村文代(SAJデモ)、輪島千恵(SAJデモ) ◇技術顧問(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三、中林昭夫、本間照康)、SAJ専門委員(畑中史雄、戸塚浩司)、 理事・SAJブロック技術員(青山 勝)、SAJブロック技術員(松本 徹(企画委員長)、橋 映吉、竹内 章 (審判小委員長)、川崎信夫、富永 豊、藤田晴美、岡崎利美(企画副委員長)、小鷹孝一、瀧澤和也、 山本梯二、片岡浩一、坂井孝史(SAH強化コーチ)、上泉 哲、佐藤貴文(パトロール)、技術員(倉谷秀之、 山本博之、小野寺千恵子、中川喜直、岡本克也、小林稔史、菊池宏二、今村伸八(パトロール)、小川 史 (パトロール))
2002	平成14年 指導員 306名 準指導員 149名	○公認・認定スキー学校長会議(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場) テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(天狗山スキー場)、 技術員強化講習会(朝里川温泉スキー場)、B・C級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)、 道連指定選手強化合宿(キロロススキー場)、基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、 A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第39回北海道スキー技術選手権大会 二瓶勝(2位)、斉藤人之(8位)、輪島千恵(2位)、佐藤友美(4位) SAHデモンストレーター二瓶勝(SAJデモ)、斉藤人之、上村文代(SAJデモ)、輪島千恵(SAJデモ)
2003	平成15年 指導員 300名 準指導員 135名	○スキー大学(朝里川温泉スキー場)、指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第40回北海道スキー技術選手権大会 輪島千恵(2位)、佐藤友美(6位) ブロックデモンストレーター 二瓶勝、斉藤人之、輪島千恵 SAH選出デモンストレーター 菅原嘉晶、SAHデモンストレーター 佐藤智昭、庄田里美 ◇技術顧問(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三、中林昭夫、本間照康、青山 勝)、SAJ専門委員(畑中史雄、戸塚浩司)、 SAJブロック技術員(松本 徹(企画委員長)、竹内 章、川崎信夫、富永 豊(スキー学校副委員長)、 小鷹孝一、瀧澤和也、山本梯二、片岡浩一、佐藤貴文(パトロール))、技術員(坂井孝史、中川喜直、 佐藤智昭、倉谷秀之、山本博之、瀧口 悟、小林稔史、菊池宏二、安原政志、尾坂直樹、小川賢二、木戸紀子、 藪 智樹(パトロール)、剣持敏子(パトロール))
2004	平成16年 指導員 292名 準指導員 127名	○SAH技術員研修会(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場) 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、 道連指定選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、北海道スーパージュニア選手権大会(朝里川温泉スキー場)、 ジュニアキャンプ(キロロススキー場)、リーダーズキャンプ(キロロススキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第41回北海道スキー技術選手権大会 輪島千恵(5位)、佐藤友美(6位)、佐々木愛(9位) SAJデモンストレーター斉藤人之、輪島千恵 SAH選出デモンストレーター 二瓶勝、菅原嘉晶、庄田里美
2005	平成17年	○SAH教育本部冬季研修会(朝里川温泉スキー場)、SAJ公認スキー学校主任教師研修会(朝里川温泉スキー場)、 強化合宿(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場)、SAHスキー技術選手権大会(朝里川温泉スキー場) テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、 スーパージュニア選手権大会(朝里川温泉スキー場)、ジュニアキャンプ(朝里川温泉スキー場)、 リーダーズキャンプ(キロロススキー場)、基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、 A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場)、 ◎第42回北海道スキー技術選手権大会 輪島千恵(1位)、佐藤友美(2位)、輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之 (SAJデモ)、百瀬純平(SAHデモ)、中谷文隆(SAHデモ)、菅原嘉晶(SAHデモ)、成田大伸(SAHデモ)、佐藤友 美(SAHデモ)、西山里美(SAHデモ) ◇シニアアドバイザー(野戸廣美、琴坂守尚、毛利修三、中林昭夫、本間照康、青山 勝、戸塚浩司)、 SAJブロック技術員・SAJ専門委員(畑中史雄)、SAJイグザミネーター(二瓶 勝、富永 豊)、 SAJブロック技術員(松本 徹(企画部長)、森塚勝敏、竹内 章、瀧澤和也、輪島千恵、山本博之、瀧口悟)、 パトロール・SAJブロック技術員(佐藤貴文)、技術員(菊池宏二、坂井孝史、中川喜直、佐藤智 昭、 倉谷秀之、小林稔史、安原政志、木戸紀子)、パトロール技術員(藪 智樹、剣持敏子)

西 暦	年 号	<p>○小樽スキー連盟教育部行事等 ◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係 ◇道連役員・技術員</p>
2006	平成18年 指導員 295名 準指導員 124名	<p>○スキー学校主任教師・教師研修会(朝里川温泉スキー場)、 技術員強化ブロック研修会(朝里川温泉スキー場)、ハイテクキャンプ(朝里川温泉スキー場)、 スキー大学(朝里川温泉スキー場)、指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 SAHスキー技術選手権大会(朝里川温泉スキー場)、デモ選・理論面接(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 全日本出場選手強化合宿(朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、 スーパージュニア選手権大会(朝里川温泉スキー場)、ジュニアキャンプ(朝里川温泉スキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第43回北海道スキー技術選手権大会 輪島千恵(1位) 輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之(SAJデモ)、百瀬 純平(SAHデモ)、中谷文隆(SAHデモ)、菅原嘉晶(SAHデモ)、成田大伸(SAHデモ)、佐藤友美(SAHデモ)、西山 里美(SAHデモ)</p>
2007	平成19年 指導員 300名 準指導員 112名	<p>○スキー学校主任教師・教師研修会(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 指導員検定養成講習会(朝里川温泉スキー場)、テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山ス キー場、朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、 スーパージュニア選手権大会(朝里川温泉スキー場)、ジュニアキャンプ(朝里川温泉スキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場) A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之(SAJデモ)、百瀬純平(SAJデモ)、高橋瑞季(SAHデモ) ◇シニアアドバイザー(野戸廣美、毛利修三、中林昭夫、本間照康、青山 勝、戸塚浩司)、 SAJ専門委員(畑中史雄)、SAJイグザミネーター(二瓶 勝、富永 豊)、SAJブロック技術員(松本 徹(企画部 長)、輪島千恵、森塚勝敏、瀧澤和也、山本博之、中川喜直、菊池宏二、倉谷秀之、阿部健一)、 パトロール・SAJブロック技術員(佐藤貴文)、技術員(安原政志、小林稔史、山崎 茂、斉藤高範、菅原嘉 晶)、パトロール技術員(藪 智樹)</p>
2008	平成20年 指導員 295名 準指導員 106名	<p>○スキー学校主任教師・教師研修会(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 指導員単位・60歳以上養成講習会(朝里川温泉スキー場)、指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー 場)、SAHデモンストラーター選考会(朝里川温泉スキー場)、テクニカル・プライズテスト(キロロススキー 場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、 スーパージュニア選手権大会(朝里川温泉スキー場)、ジュニアデモクリニック(朝里川温泉スキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第45回北海道スキー技術選手権大会 百瀬純平(8位)、輪島千恵(1位)、輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之 (SAJデモ)、百瀬純平(SAJデモ)、高橋瑞季(SAHデモ)</p>
2009	平成21年 指導員 295名 準指導員 106名	<p>○スキー学校主任教師・教師研修会(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 単位・60以上養成講習会(朝里川温泉スキー場)、指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、クラウン・プ ライズテスト(朝里川温泉スキー場)、ジュニアデモクリニック(朝里川温泉スキー場)、 スーパージュニア選手権大会(朝里川温泉スキー場)、スキーカレッジ(キロロススキー場)、 基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之(SAJデモ)、百瀬純平(SAJデモ)、高橋瑞季(SAHデモ) ◇シニアアドバイザー(毛利修三、中林昭夫、本間照康、青山 勝、戸塚浩司)、 理事・SAJ専門委員(畑中史雄)、SAJイグザミネーター(二瓶 勝、富永 豊、中川喜直)、 SAJブロック技術員(松本 徹(アドバイザー)、山本博之(企画部長)、森塚勝敏、瀧澤和也、 菊池宏二、倉谷秀之、阿部健一、安原政志)、パトロール・SAJブロック技術員(藪 智樹)、 技術員(小林稔史、山崎 茂、斉藤高範、片岡美香、一條 礼、崎野史明、中川聖也、高橋瑞季)、 パトロール技術員(打矢邦彦)</p>
2010	平成22年 指導員 277名 準指導員 103名	<p>○スキー学校主任教師・教師研修会(朝里川温泉スキー場)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 単位・60以上養成講習会(朝里川温泉スキー場)、指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、キッズ&amp;チルドレンキャンプ(キロロススキー場)、 スキーカレッジ(キロロススキー場)、基礎スキー指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、 A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第47回北海道スキー技術選手権大会 百瀬純平(8位)、輪島千恵(5位)、輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之(N デモ)、百瀬純平(Nデモ)、傅雄介(SAJデモ)、高橋瑞季(SAHデモ)</p>
2011	平成23年	<p>○スキー大学(朝里川温泉スキー場)、単位・50以上養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場) テクニカル・プライズテスト(キロロススキー場、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場)、準指合格者・C級検定会養成講習会(キロロススキー場)、 キッズ&amp;チルドレントレーニングキャンプ(キロロススキー場)、北海道スキー大学(キロロススキー場) SAJ指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、SAJ専門指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、 A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎輪島千恵(Nデモ)、斉藤人之(Nデモ)、百瀬純平(Nデモ)、傅雄介(SAJイデモ)、高橋瑞季(SAHデモ) ◇シニアアドバイザー(毛利修三、中林昭夫、本間照康、青山 勝、戸塚浩司)、 理事・SAJブロック技術員(松本 徹)、SAJイグザミネーター(二瓶 勝、粟野利信、中川喜直)、常任技術員・ SAJブロック技術員(山本博之(企画部長)、瀧澤和也、菊池宏二、倉谷秀之、阿部健一、安原政志、 山崎 茂、輪島千恵)、パトロール・SAJブロック技術員(藪 智樹)、技術員(斉藤高範、片岡美香、 一條 礼、崎野史明、中川聖也、橋本和聡、坂井孝史)、パトロール技術員(打矢邦彦)</p>

西 暦	年 号	○小樽スキー連盟教育部行事等 ◎北海道スキー連盟・全日本スキー連盟関係 ◇道連役員・技術員
2012	平成24年 指導員 259名 準指導員 109名	○スキー学校アシスタント認定講習検定会(キロロスノーワールド)、スキー大学(朝里川温泉スキー場)、 単位・50以上養成講習会(朝里川温泉スキー場)、指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場) テクニカル・プライズテスト(キロロスノーワールド、オーンズスキー場、朝里川温泉スキー場)、クラウ ン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場、キロロスノーワールド)、準指合格者・C級検定会養成講習会 (キロロススキー場)、キッズ・チルドレンキャンプ(キロロスノーワールド)、北海道スキー大学(キロロス ノーワールド)、SAJ指導員検定会(朝里川温泉スキー場) A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎第49回北海道スキー技術選手権大会 齊藤人之(3位)、高橋瑞季(9位) 輪島千恵(Nデモ)、齊藤人之 (Nデモ)、百瀬純平(Nデモ)、傅雄介(SAJデモ)、高橋瑞季(SAHデモ)
2013	平成25年	○100周年誌発行、SAHスキー学校アシスタント認定講習会(キロロスノーワールド)、 SAJ公認スキー学校主任教師研修会(キロロスノーワールド)、SAJスキー大学(朝里川温泉スキー場)、 単位・50歳以上養成講習会(朝里川温泉スキー場)、指導員検定中央養成講習会(朝里川温泉スキー場)、 テクニカル・プライズテスト(キロロスノーワールド、天狗山スキー場、朝里川温泉スキー場)、 クラウン・プライズテスト(朝里川温泉スキー場、キロロスノーワールド)、 準指合格者・C級検定会養成講習会(キロロススキー場)、キッズ&チルドレントレーニングキャンプ (キロロスノーワールド)、北海道スキー大学(キロロスノーワールド)、 SAJ指導員検定会(朝里川温泉スキー場)、A級公認検定員検定会(朝里川温泉スキー場) ◎齊藤人之(Nデモ)、百瀬純平(Nデモ)、傅雄介(SAJデモ)、高橋瑞季(SAHデモ) ◇教育本部顧問(毛利修三)、シニアアドバイザー(中林昭夫、本間照康、青山 勝)、 理事・教育本部長(松本 徹)、SAJイグザミネーター(二瓶 勝、中川喜直)、SAJ専門委員(森 信之)、 SAJ技術員(栗野利信、山本博之(企画部長)、菊池宏二、阿部健一、安原政志、山崎茂、輪島千恵、片岡浩一、 坂井孝史)、パトロール・SAJ技術員(藪 智樹)、スキー技術員(中川聖也、齊藤高範、片岡美香、崎野史明、 橋本和聡、宇佐美法秀)

### 柴田信一先生 語録より

- ・理想を失ったとき、人は初めて老いる。
- ・人には個性がある。互いのターンを創造すること。
- ・同化し過ぎる日本のプレーヤー。
- ・外脚か、内脚か、両脚かにしばれる観念を  
もっている時代は過ぎ去ろうとしている。

一九五三(昭和二十八年)年 中林昭夫氏メモより抜粋



コラム7 小樽スキーまつりテーマソング

"Otaru Ski Song"  
(小樽スキーまつりテーマソング) 昭和13年

作詞 杉村麟太郎  
 作曲 味足村 深天  
 編曲 五修 秋野 武夫  
 左石本



一、ぼくのスキーは  
 ウィスキー  
 街の酒場を  
 スラローム  
 旗門々々で  
 ひっかゝり  
 ついに会社を  
 かウンヒル

二、雪の女王と  
 おだてられ  
 無理して買った  
 ヒッコリ  
 一度もはかずに  
 盗まれた  
 油断もスキーも  
 有りやしない

三、嫌がる親爺を  
 無理やりに  
 スキー滑りに  
 誘ったら  
 轉んで舌を  
 カンタハー  
 ころスキーかと  
 どやされた



小樽スキー連盟

宴会の締めにもいつも合唱していた



## 第1章 歴代会長



### 渡辺 龍 聖 初代会長（大正元年～）

- 文久2年(1862年)8月28日生 新潟県越後吉水村出身  
加藤周浄の長男として誕生、信州山寺の小僧から立身出世
- 明治19年(1885年) 渡辺伝蔵の養子となり加藤から渡辺に改姓する  
同 年 東京専門学校理学科入学（現：早稲田大学）
- 明治20年(1886年) 東京専門学校英文科卒業  
同 年 東京帝国大学文学部哲学科入学
- 明治24年(1891年) 米国ヒルスデール大学卒業
- 明治27年(1894年) 米国コーネル大学大学院修了 PhD学位取得
- 明治28年(1895年) 東京高等師範学校講師（現：筑波大学）
- 明治29年(1896年) 東京高等師範学校教授（嘉納治五郎と親交）
- 明治32年(1899年) 東京音楽学校校長（現：東京芸術大学）瀧廉太郎と親交
- 明治35年(1902年) 清国政府直轄総督学務顧問
- 明治43年(1910年) 東京高等師範学校教授（ベルリン大学留学）
- 明治44年(1911年) 小樽高等商業学校初代校長（ベルリン大学帰国）
- 明治45年(1912年) 学生の運動にスキーを採用、苫米地を新潟高田に派遣
- 大正9年(1919年) 名古屋高等商業学校初代校長（現：名古屋大学）
- 明治45年(1912年) 現小樽商科大学学生の運動にスキーを採用、苫米地を新潟高田に派遣
- 大正元年、同年(1912年)10月28日 小樽スキー倶楽部 初代会長

渡辺は幼少時より雪国育ちであったこと、国際感覚に優れ情報に敏感であったことが、小樽スキー伝来に繋がったと思われる。



### 伴 房次郎 第2代会長（大正10年～）

- 明治7年(1874年)9月20日－昭和31年(1956年)11月19日没  
京都市伏見区生まれ。法学者、専門は民法。  
京都府尋常中学校、第四高等学校（旧制）卒業
- 明治35年(1902年) 東京帝国大学法科大学法律学科卒業（現：東京大学）  
同 年 京都帝国大学法科大学講師
- 明治36年(1903年) 同校 助教授
- 明治41年(1908年) イギリス、フランス、ドイツへ留学
- 明治45年(1912年) 小樽高等商業学校教授（7月帰国後、赴任）  
（現：小樽商科大学）
- 大正10年(1921年) 同校 第二代校長

- 昭和10年(1935年) 同校 第二代校長退任  
 大正10年(1921年) 9月25日に再結成した小樽スキー倶楽部会長  
 大正12年(1923年) 第1回全日本スキー選手権小樽開催主管：小樽スキー倶楽部会長  
 昭和3年(1928年) 長男の伴素彦はジャンプで冬季五輪に日本人初出場  
 昭和4年(1928年) ヘルセット中尉の小樽商大訪問  
 昭和5年(1930年) ハンネス・シュナイダー氏のスキー講習会(小樽商大訪問)

長男の伴素彦は日本製粉株式会社の会長、全日本スキー連盟会長を務める。温厚篤実な人柄で周囲に慕われた。



### 苦米地 英 俊 第3代会長(昭和10年～)

- 明治17年(1884年)12月1日－昭和41年(1966年)5月5日没  
 福井県大野町生まれ、長野育ち、長野中学時代に柔道で頭角を現す。  
 1907年 東京外語学校英語本科卒業(嘉納治五郎の援助を受け、嘉納塾寮監)  
 1912年 小樽高等商業学校講師(現：小樽商科大学)  
 1916年 同校 教授  
 1935年 同校 校長  
 1944年 小樽経済専門学校校長(改称：現小樽商科大学)  
 1946年 衆議院議員(当選4回)  
 1948年 札幌文科専門学院教授 院長  
 1950年 札幌短期大学学長(現：札幌学院大学)  
 1953年 札幌自動車短大学長  
 1945年 勲二等瑞宝章拝受  
 1964年 勲二等旭重光章拝受

政治家として千歳空港の開発促進や北海道開発庁の創立に尽力し初代北海道開発審議会会長を務める。



アールベルグ滞在中の高橋

### 高 橋 次 郎 第4代会長(昭和22年～)

- 北海道スキー連盟 会長(昭和21～25年)  
 全日本スキー連盟 副会長(昭和21年～)

- 明治33年9月10日生まれ  
 昭和27年(1952年)1月没  
 大正9年 小樽商業学校卒業(現：小樽商業高校)

大正12年 小樽高等商業学校卒業（現：小樽商科大学）  
 大正15年 東北帝国大学法文学部卒業（経済学士）専門：経済地理学  
 大正15年 東北帝国大学法文学部助手  
 昭和3年 東北帝国大学法文学部副手  
 昭和4年 小樽高等商業学校講師  
 昭和4年 同校 教授  
 大正9年 第1回札幌スキー駅伝 団体優勝 アンカー選手  
 大正14年 全日本スキー連盟の第1回代表委員  
 昭和11年～13年 ドイツ留学（文部省在外研究員）  
 留学中には幻となった札幌五輪誘致（昭和15年）に成功し、  
 親交があったシュナイダーの指導を本場のチロルで受け、アールベルグスキー術の権威となって帰国した。  
 昭和11年（1936年）第4回冬季オリンピック監督（ガルミッシュパルテンキルヘン）  
 昭和12年～13年 国際五輪・F I S会議（シャモニー・ヘルシンキ）に  
 日本代表として出席  
 昭和14年 第1回全日本スキー連盟主催指導者講習会（山形県五色温泉）、  
 検定委員長

#### スキー出版物

昭和4年 アールベルグスキー術 博文館  
 昭和10年 日本のスキー術 弘明堂  
 昭和23年 スキー回転技術 北方出版



#### 秋野 武夫 第5代会長（昭和27年～）

北海道スキー連盟 会長（昭和31年～34年）  
 副会長（昭和26年～30年、昭和35年～50年）  
 理事長（昭和21年～25年）  
 「一の山形薬業」社長・薬剤師

明治37年 小樽生まれ（入舟町）  
 大正8年 量徳小学校卒業  
 大正13年 小樽中学卒業  
 大正13年 東京薬学専門学校入学（現：東京薬科大学）  
 大正12年 第1回全日本スキー選手権 2位 1km距離競技  
 大正13年 第2回全日本スキー選手権 3位 1km距離競技  
 大正14年 第3回全日本スキー選手権 3位 ジャンプ競技  
 昭和11年（1936年）第4回冬季オリンピック・ジャンプコーチ  
 昭和37年 北海道文化奨励賞受賞  
 昭和56年7月 逝去

戦前から戦後にかけて小樽出身の名ジャンパーの大半は指導を受けて

いる。稀にみるアイディアマンでコーチばかりでなくメーカーにも適切な助言を与え、日本初の合板スキー開発など、その意見はつねに漸進的で独創的であった。「ジャンプ王国・小樽の育て親」と云われ、小樽スキー連盟会長を30年間勤めた功労者である。

秋野家は小樽で有数の旧家で薬問屋「小樽一の秋野商店」を営んでいた。寒冷地で必要な医薬品（感冒薬、痔疾内服薬、駆梅薬）を製造、北海道樺太に販売。日露戦争中は軍の御用商人として露領北樺太のアレキサンドロフサハリンスキーに支店を開設、留刑のポーランド人学生を支配人に雇用、交流によりその影響を受けた。戦後は医薬品卸業に専念する。

6人の子供に恵まれ、5番目の秋野豊氏（元筑波大助教授）は、外務省に入省し国連政務官としてタジキスタンへ派遣され、平成10年7月紛争地域において反政府勢力の攻撃に会い無念の死を遂げる（当時48歳）。



## 柴田 信 一 第6代会長（昭和58年～59年）

生年月日 明治41年11月27日

### 学歴・職歴

大正13年3月	札幌通信講習所卒業
”	静内、小樽、塩谷郵便局
昭和4年4月	小樽市役所 土木課、水道課、教育委員会
昭和39年6月	北海道水道機材(株) 常務取締役
昭和52年4月	イレブンスキー(株) 社長
昭和54年10月	ミズノ(株) 顧問

### スキー関係役職等

昭和11年	全日本スキー連盟	アルペン部長
昭和14年12月	全日本スキー連盟	指導員検定員
昭和21年10月	全日本スキー連盟	技術委員
昭和23年2月	全日本スキー連盟	基礎スキー技術委員長
昭和25年2月	北海道スキー連盟	国体アルペン監督
昭和25年5月	全日本スキー連盟	理事
昭和25年5月	北海道スキー連盟	基礎教育部長
昭和29年5月	全日本スキー連盟	一般スキー技術委員長
昭和32年10月	小樽スキー連盟	理事長
昭和37年4月	全日本スキー連盟	基礎スキー教育本部長
昭和40年1月	世界スキー指導者会議	日本代表
昭和41年10月	北海道スキー連盟	副会長
昭和42年10月	小樽スキー連盟	副会長
昭和49年6月	全日本スキー連盟	基礎スキー教育本部顧問
昭和58年6月	小樽スキー連盟	会長
昭和58年4月	北海道スキー指導員会	会長
昭和58年4月	小樽市スポーツ振興審議会委員	

昭和58年5月 小樽体育協会理事  
昭和59年5月 日本スキー指導員会 会長

#### 受賞歴

昭和45年10月 小樽体育協会体育功労賞  
昭和52年10月 北海道スポーツ賞  
昭和55年10月 小樽市教育文化功労賞  
昭和55年11月 文部省体育功労賞  
昭和55年11月 北海道スキー連盟功労者賞  
平成3年11月 勲五等瑞宝章受章

逝 去 平成7年1月15日



### 藤 沢 伸 光 第7代会長（昭和60年～平成3年）

生年月日 1913(大正2)年4月1日

#### 学歴・職歴

大正6年3月 北海道庁立小樽商業学校卒業  
大正9年3月 早稲田大学専門部商科卒業  
昭和9年4月 日本海運株式会社 入社  
昭和17年5月 海軍省より高等官五等(位階従6位)の嘱託拝命  
少佐待遇  
昭和21年2月 高等官五等の嘱託を退官  
昭和21年3月 日本海運株式会社を依願退職  
昭和21年4月 大同石炭販売株式会社勤務 代表取締役社長

#### スキー関係役職等

昭和7年1月 学生スキー選手権 50km 3位  
昭和12年5月 全日本スキー連盟技術委員  
昭和22年10月 全日本スキー連盟「一般スキー術」刊行(共著)  
昭和30年5月 全日本スキー連盟技術委員長  
昭和31年10月 全日本スキー連盟常任理事  
昭和34年10月 北海道スキー連盟副会長  
昭和40年5月 北海道体育協会常任理事  
昭和47年10月 北海道スキー連盟副会長  
昭和47年2月 札幌オリンピック日本選手団長 秘書  
昭和50年10月 全日本スキー連盟理事  
昭和62年10月 小樽スキー連盟 会長  
平成4年10月 小樽スキー連盟 名誉会長

#### 受賞歴

昭和48年10月 小樽市体育協会 体育功労者表彰  
昭和48年11月 日本体育協会 功労者表彰  
昭和57年10月 北海道スキー連盟特別功労者表彰  
昭和58年10月 小樽スキー連盟70周年特別表彰

昭和59年10月 北海道体育協会功労賞表彰  
昭和59年10月 小樽市教育文化功労賞  
昭和60年10月 北海道スポーツ賞受賞  
平成元年11月 文部省体育功労者賞受賞  
平成4年5月 地崎宇三郎記念日刊スポーツ賞受賞  
平成6年11月 勲五等瑞宝章受章

逝 去 平成10年7月9日



## 渕 上 裕 夫 第8代会長（平成4年～11年）

生年月日 大正9年7月5日

### 学歴・職歴

昭和13年3月 北海道庁立小樽中学校卒業  
昭和17年9月 早稲田大学商学部卒業  
昭和22年12月 北海道中央乗合自動車株式会社 入社  
昭和44年6月 北海道中央バス株式会社 取締役  
昭和48年11月 中央不動産株式会社 取締役  
昭和58年6月 北海道中央バス株式会社 常務取締役  
昭和61年5月 中央バス観光商事株式会社 代表取締役社長  
平成3年5月 中央バス観光開発株式会社 代表取締役社長  
平成7年5月 中央バス観光開発株式会社 代表取締役社長退任

### スキー関係役職等

昭和20年頃 インカレ等でアルペン滑降競技選手として活躍  
昭和42年 小樽観光協会 副会長  
昭和44年 小樽自動車協会 副理事長、会長  
昭和55年 小樽スキー連盟 副会長  
昭和55年 北海道スキー連盟 副会長  
平成4年 小樽スキー連盟 会長  
平成8年 北海道スキー連盟後志ブロック協議会 会長

### 受賞歴

平成8年10月 小樽市体育協会体育功労者表彰  
平成9年10月 小樽市教育文化功労賞  
平成10年 小樽スキー連盟85周年特別表彰



## 野 戸 廣 美 第9代会長（平成12年～13年）

生年月日 昭和5年6月23日

### 学歴・職歴

昭和23年3月 北海道庁立小樽中学校卒業  
昭和25年3月 北海道第一師範学校中退  
昭和25年6月 小樽市立長橋小学校教諭

昭和57年4月 小樽市立若竹小学校教頭  
昭和61年4月 積丹町立入舸小学校校長  
昭和64年3月 小樽市立幸小学校校長退任

#### スキー関係役職等

昭和52年10月 北海道スキー連盟教育本部 ブロック技術員  
昭和61年10月 北海道スキー連盟教育本部 技術顧問  
平成5年 小樽天狗山スキー学校 校長  
平成6年 小樽スキー連盟 理事長  
平成8年 小樽スキー連盟 副会長  
平成12年 小樽スキー連盟 会長

#### 受賞歴

昭和55年10月 小樽市体育協会体育功労者表彰  
平成10年10月 小樽スキー連盟85周年特別表彰  
平成14年5月 勲五等瑞宝章受章

逝去 平成19年1月18日



### 板垣宏志 第10代会長（平成14年～22年）

生年月日 昭和20年4月27日

#### 学歴・職歴

昭和39年3月 北海道小樽潮陵高等学校卒業  
昭和43年3月 明治大学商学部卒業  
昭和43年4月 国土計画株式会社 入社  
昭和54年7月 国土計画株式会社 退社  
昭和54年8月 有限会社板垣組 専務取締役  
昭和61年5月 株式会社板垣組 代表取締役社長  
平成23年4月 株式会社板垣組 代表取締役社長退任

#### スキー関係競技歴及び役職等

昭和38年2月 全国高校 ジャンプ 優勝  
昭和39年2月 全国高校 ジャンプ・複合 優勝  
昭和39年2月 冬季国民体育大会(少年) 複合 優勝  
昭和40年1月 全日本学生選抜大会 ジャンプ 優勝  
昭和41年2月 全日本選手権 90m級ジャンプ 優勝  
昭和41年2月 冬季国民体育大会 複合 優勝  
昭和42年2月 全日本学生選抜大会 複合 優勝  
昭和42年2月 冬季国民体育大会 複合 優勝  
昭和43年1月 全日本学生選抜大会 複合 優勝  
昭和43年1月 ユニバーシアード(インスブルック)  
ジャンプ・複合 優勝  
昭和43年2月 冬季オリンピック(グルノーブル) 複合 10位  
昭和44年2月 冬季国民体育大会 複合 優勝



昭和47年2月 冬季オリンピック(札幌) 90m級ジャンプ 19位  
 昭和47年3月 全日本選手権 70m級・90m級ジャンプ 優勝  
 昭和50年3月 冬季国民体育大会70m級ジャンプ 優勝  
 昭和51年2月 冬季オリンピック(インスブルック)ジャンプ出場  
 平成2年～16年 F I S 公認飛型審判員  
 平成12年7月 小樽スキー連盟 副会長  
 平成14年5月 小樽スキー連盟 会長  
 平成14年5月 北海道スキー連盟後志ブロック協議会会長  
 平成15年10月 北海道スキー連盟 副会長

#### 受賞歴

昭和48年10月 小樽市体育協会体育功労賞  
 昭和58年10月 小樽スキー連盟70周年特別表彰  
 昭和59年10月 小樽市教育文化功労賞



### 青山 勝 第11代会長(平成23年～)

生年月日 昭和17年1月7日

#### 学歴・職歴

昭和35年3月 北海道小樽千秋高等学校卒業  
 昭和36年4月 小樽市役所建築部 勤務  
 平成14年3月 小樽市役所建築部 退職

#### スキー関係役職等

昭和43年3月 全日本スキー連盟 基礎スキー指導員合格  
 昭和54年8月 北海道スキー連盟 教育本部技術員  
 昭和56年8月 全日本スキー連盟 教育本部ブロック技術員  
 昭和58年12月 全日本スキー連盟 基礎スキーA級検定員合格  
 平成2年10月 小樽スキー連盟 理事  
 平成6年8月 北海道スキー連盟 理事  
 平成6年10月 小樽スキー連盟 教育部部長  
 平成14年8月 北海道スキー連盟 シニアアドバイザー  
 平成23年4月 小樽スキー連盟 会長代行  
 平成23年4月 北海道スキー連盟後志ブロック協議会 会長  
 平成23年8月 小樽スキー連盟 会長  
 平成23年8月 小樽天狗山スキー場等管理運営協議会 委員

#### 受賞歴

平成5年10月 小樽市体育協会体育功労賞



## 第2章 小樽スキー連盟役員変遷

---

### 小樽スキー倶楽部

大正2年	会 長	渡邊 龍聖	
	理 事 長	国松 豊	
	理 事	苔米地英俊	奥谷 甚吉

### 踏鯉クラブ

大正7年	会 長	西谷 謙三	
------	-----	-------	--

### 小樽スキークラブ

大正10年	会 長	伴 房次郎	
	理 事 長	黒崎 三市	
昭和8年	会 長	伴 房次郎	
	理 事 長	山田 実	

### 小樽スキー連盟

昭和10年	会 長	苔米地英俊	
	副 会 長	高橋 次郎	
	理 事 長	杉村麟太郎	

昭和14年	会 長	苔米地英俊	
	副 会 長	高橋 次郎	

昭和22年	会 長	高橋 次郎	
	理 事 長	杉村麟太郎	

昭和24年	会 長	高橋 次郎	
	副 会 長	秋野 武夫	
	理 事 長	杉村麟太郎	

昭和27年	会 長	秋野 武夫	
-------	-----	-------	--

昭和32年	会 長	秋野 武夫	
	副 会 長	木村 円吉	
	理 事 長	柴田 信一	

昭和34年	会 長 副 会 長 理 事 長	秋野 武夫 箕輪 正治 柴田 信一					
昭和38年	会 長 副 会 長 理 事 長	秋野 武夫 箕輪 正治 柴田 信一	藤沢 伸光				
昭和44年	会 長 副 会 長 理 事 長	秋野 武夫 柴田 信一 沢本 長市	藤沢 伸光	松川 行雄			
昭和46年	会 長 副 会 長 理 事 長	秋野 武夫 柴田 信一 松川 行雄	藤沢 伸光	沢本 長市			
昭和47年	会 長 副 会 長 理 事 長	秋野 武夫 柴田 信一 内山 拓治	藤沢 伸光	沢本 長市			
昭和48年	会 長 副 会 長 理 事 長 副理事長	秋野 武夫 柴田 信一 内山 拓治 東野 靖信	藤沢 伸光	沢本 長市			
昭和50年	会 長 副 会 長 理 事 長 副理事長	秋野 武夫 柴田 信一 内山 拓治 東野 靖信	藤沢 伸光	沢本 長市			
昭和55年	会 長 副 会 長 理 事 長 副理事長	秋野 武夫 柴田 信一 内山 拓治 中野 一久 東野 靖信	藤沢 伸光	沢本 長市	淵上 裕夫		
昭和58年	会 長 副 会 長 理 事 長 副理事長	柴田 信一 藤沢 伸光 中野 一久 東野 靖信	沢本 長市	淵上 裕夫	内山 拓治		

昭和59年	会 長	柴田 信一					
	副 会 長	藤沢 伸光	沢本 長市	湊上 裕夫	内山 拓治		
	理 事 長	中野 一久					
	副理事長	東野 靖信					
昭和60年	会 長	藤沢 伸光					
	副 会 長	浅木 文雄	湊上 裕夫	池田 利勝			
	理 事 長	中野 一久					
	副理事長	野戸 廣美					
昭和63年	会 長	藤沢 伸光					
	副 会 長	浅木 文雄	湊上 裕夫	池田 利勝			
	理 事 長	中野 一久					
	副理事長	野戸 廣美					
平成 2 年	会 長	藤沢 伸光					
	副 会 長	浅木 文雄	湊上 裕夫	池田 利勝	田窪 明三		
		東野 靖信					
	理 事 長	中野 一久					
	副理事長	野戸 廣美					
平成 4 年	会 長	湊上 裕夫					
	副 会 長	浅木 文雄	池田 利勝	東野 靖信			
	理 事 長	中野 一久					
	副理事長	野戸 廣美					
平成 6 年	会 長	湊上 裕夫					
	副 会 長	浅木 文雄	池田 利勝	東野 靖信	安達 徹		
		中野 一久					
	理 事 長	野戸 廣美					
	副理事長	青木 祐司					
平成 8 年	会 長	湊上 裕夫					
	副 会 長	浅木 文雄	池田 利勝	安達 徹	中野 一久		
		野戸 廣美	富田 英稔				
	理 事 長	青木 祐司					
	副理事長	小林 隆					
平成10年	会 長	湊上 裕夫					
	副 会 長	浅木 文雄	池田 利勝	安達 徹	中野 一久		
		野戸 廣美	富田 英稔				

監 事	中根 庸光	渡邊 敏郎			
理 事 長	青木 祐司				
副理事長	小林 隆				
常任理事	総 務 部	飯田 誠一			
理 事	総 務 部	熊沢 範子	小鷹 孝一	六条 祐二	
常任理事	アルペン部	伊藤 啓三			
理 事	アルペン部	白澤 秀一	三国谷淳司	工藤 裕	
		中嶋 八夫	笹木 正広	坂井 栄二	
		天笠 弘満			
常任理事	クロカン部	今野 巖			
理 事	クロカン部	石村 實	深澤 靖弘	真下 傳	
常任理事	ジャンプ部	高谷 建二			
理 事	ジャンプ部	中根 慶雄	板垣 宏志	斎藤 幸三	
		島 敏昭			
常任理事	教 育 部	青山 勝			
理 事	教 育 部	本間 照康	畑中 史雄	藤田 晴美	
		坂田行次朗	林 忠彦	細野 博	
		串 力男			
常任理事	安全対策部	佐藤 寿			
理 事	安全対策部	北島 三郎	安藤 孝史		

平成12年	会 長		野戸 廣美		
	副 会 長		板垣 宏志	小野 民夫	中野 一久
	理 事 長		青木 祐司		
	副理事長		林 忠彦		
	常任理事	総 務 部	小鷹 孝一		
	常任理事	アルペン部	伊藤 啓三		
	常任理事	ジャンプ部	斎藤 幸三		
	常任理事	クロカン部	深澤 靖弘		
	常任理事	教 育 部	青山 勝		
	常任理事	安全対策部	斎藤 勝広		

平成14年	会 長	板垣 宏志			
	副 会 長	小野 民夫	青山 勝		
	監 事	中根 庸光	坂田行次朗		
	理 事 長	青木 祐司			
	副理事長	小鷹 孝一			
	常任理事	総 務 部	飯田 誠一		
	理 事	総 務 部	熊沢 範子		
	常任理事	アルペン部	伊藤 啓三		
	理 事	アルペン部	渡辺 幹夫	坂井 栄二	武田 尚巳

常任理事	クロカン部	深澤 靖弘			
理 事	クロカン部	今野 厳	六条 祐二		
常任理事	ジャンプ部	齋藤 幸三			
理 事	ジャンプ部	島 敏昭	今堀 弘一		
常任理事	教 育 部	畑中 史雄			
理 事	教 育 部	中林 昭夫	本間 照康	輪島 祥司	
		林 忠彦			
常任理事	安全対策部	今村 伸八			
理 事	安全対策部	今村 伸八			

平成16年

会 長	板垣 宏志				
副 会 長	小野 民夫	青山 勝			
監 事	中根 庸光	坂田行次朗			
理 事 長	青木 祐司				
副理事長	輪島 祥司				
常任理事	総 務 部	飯田 誠一			
理 事	総 務 部	小鷹 孝一	奥山 充		
常任理事	アルペン部	伊藤 啓三			
理 事	アルペン部	渡辺 幹夫	坂井 栄二	武田 昌巳	
常任理事	クロカン部	六条 祐二			
理 事	クロカン部	金谷 浩克	大島 行司		
常任理事	ジャンプ部	齋藤 幸三			
理 事	ジャンプ部	島 敏昭	今堀 弘一		
常任理事	教 育 部	畑中 史雄			
理 事	教 育 部	中林 昭夫	林 忠彦	荒木 誠	
常任理事	安全対策部	佐藤 貴文			

平成18年

会 長	板垣 宏志				
副 会 長	小野 民夫	青山 勝	八木 博		
監 事	中根 庸光	坂田行次朗			
理 事 長	青木 祐司				
副理事長	輪島 祥司				
常任理事	総 務 部	飯田 誠一			
理 事	総 務 部	小鷹 孝一	奥山 充		
常任理事	アルペン部	伊藤 啓三			
理 事	アルペン部	渡辺 幹夫	武田 昌巳	中澤 孝夫	
常任理事	クロカン部	六条 祐二			
理 事	クロカン部	金谷 浩克	宮崎 英宏		
常任理事	ジャンプ部	島 敏昭			
理 事	ジャンプ部	今堀 弘一	木村 讓		
常任理事	教 育 部	畑中 史雄			

	理事	教育部	中林 昭夫	林 忠彦	荒木 誠
	常任理事	安全対策部	藪 智樹		
平成20年	会長	板垣 宏志			
	副会長	小野 民夫	青山 勝	八木 博	
	監事	中根 庸光	坂田行次朗		
	理事長	青木 祐司			
	副理事長	小鷹 孝一			
	常任理事	総務部	飯田 誠一		
	理事	総務部	菊池 宏二		
	常任理事	アルペン部	伊藤 啓三		
	理事	アルペン部	工藤 裕	石田 要	斉藤 博
			佐藤 徳造	武田 昌巳	玉川 英一
	常任理事	クロカン部	六条 祐二		
	理事	クロカン部	金谷 浩克	宮崎 英宏	
	常任理事	ジャンプ部	島 敏昭		
	理事	ジャンプ部	今堀 弘一	木村 讓	
	常任理事	教育部	畑中 史雄		
	理事	教育部	中林 昭夫	林 忠彦	荒木 誠
			輪島 祥司		
	常任理事	安全対策部	林 信夫		
平成22年	会長	青山 勝			
	副会長	小野 民夫	八木 博	青木 祐司	伊藤 啓三
		坂田行次朗			
	監事	中根 庸光	小田原正弘		
	理事長	輪島 祥司			
	副理事長	小鷹 孝一			
	常任理事	総務部	飯田 誠一		
	理事	総務部	奥山 充		
	常任理事	アルペン部	工藤 裕		
	理事	アルペン部	武田 昌巳	石田 要	斉藤 博
			佐藤 徳造	玉川 英一	三国谷淳司
			渡辺 幹夫		
	常任理事	クロカン部	六条 祐二		
	理事	クロカン部	金谷 浩克	宮崎 英宏	
	常任理事	ジャンプ部	石川 稔		
	理事	ジャンプ部	今堀 弘一	木村 讓	
	常任理事	教育部	松本 徹		
	理事	教育部	畑中 史雄	林 忠彦	荒木 誠
			倉谷 秀之		

	常任理事	安全対策部	戸塚 浩司			
	理 事	安全対策部	岡田 和典			
平成24年	会 長	青山 勝				
	副 会 長	八木 博	伊藤 啓三	坂田行次朗	輪島 祥司	
		六条 祐二				
	監 事	小田原正弘	一原 正明			
	理 事 長	小鷹 孝一				
	副理事長	佐藤 徳造				
	常任理事	総 務 部	飯田 誠一			
	理 事	総 務 部	松原 稔			
	常任理事	アルペン部	工藤 裕			
	理 事	アルペン部	武田 昌巳	石田 要	斉藤 博	
			玉川 英一	三国谷淳司	渡辺 幹夫	
			玉川 祐介			
	常任理事	クロカン部	金谷 浩克			
	理 事	クロカン部	石村 實	大貫 祐一		
	常任理事	ジャンプ部	石川 稔			
	理 事	ジャンプ部	今堀 弘一	木村 讓		
	常任理事	教 育 部	松本 徹			
	理 事	教 育 部	畑中 史雄	林 忠彦	荒木 誠	
			倉谷 秀之	山本 悌二	本間 照康	
			竹内 章			
	常任理事	安全対策部	戸塚 浩司			
	理 事	安全対策部	岡田 和典			

## コラム8 アッツ島玉砕…スキーを履いて……

量徳寺の三男として生まれた岡崎裕雄氏は樽中で複合を始め、早大進学後は学生選手権入賞の常連となった。昭和13年大学卒業後現役兵として入営し、18年1月アッツ島警備の大隊副官として岡崎は任に就く。5月12日、遂に米軍が上陸を開始。日本軍は孤立無援の島で18日間の激戦の末、29日に総攻撃により玉砕した。

岡崎の戦死状況は不明だったが、樽中同期の伊黒正次が米軍資料から知ったところによると、岡崎は機関銃を抱えスキーを履き、山から敵陣に単身突撃したという。米軍が遺体を調べ「オカザキヒロオ」の氏名が判明した。玉砕の1ト月前に北方軍参謀が視察した際、岡崎がスキーで島を案内したことから、戦地でもスキーを手放さなかったことが判る。

昭和18年5月29日満30歳で戦死。同日付で大尉昇進。



## 小樽スキー連盟加盟団体一覧

	団体名	代表者	連絡者	連絡者住所	同電話	評議員名
1	小樽スキー指導員会	輪島 祥司	武田 勇蔵	小樽市銭函1丁目8番17号	62-6602	雨宮 嘉宏
2	小樽市役所スキー部	小鷹 孝一	松原 稔	小樽市新光町324番72号	54-5102	名取 朋彦
3	北照スキー部 OB・OG会	工藤 哲史	岸 輝一	小樽市稲穂1丁目1番14号	090- 8635-5958	岸 輝一
4	小樽アルペンスキー クラブ	三國谷淳司	三國谷淳司	小樽市入船3丁目11番3号	33-4603	白澤 秀一
5	小樽ジャンプクラブ	竹内 賢司	石川 稔	小樽市相生町5番33号	61-1108	小澤 英治
6	小樽クロスカントリー スキークラブ	安藤 博文	六条 祐二	小樽市星野町12番32号	62-3191	安藤 博文
7	小樽地区救急法 赤十字奉仕団	前田 正夫	戸塚 浩司	小樽市入船5丁目23番12号	22-1639	藪 智樹
8	NPOジョイフル スキー同好会					上出 憲幸
9	小樽チャレンジクラブ					片岡 浩一
10	ツイールスキークラブ					
11	R&Iスキークラブ	佐藤 徳造	佐藤 徳造	小樽市オタモイ3丁目16番7号	26-3636	小林 満
12	朝里川温泉 スキークラブ	玉川 映一	玉川 映一	小樽市朝里川温泉2丁目673番	54-0212	西川 健治
13	T.プランニング スキークラブ	石田 要	武田 昌巳	小樽市緑1丁目18番14号	33-8846	吉田 尚正
14	小樽商科大学 基礎スキー部					
15	小樽天狗山 スキーレーシング	武田 昌巳	小鷹 孝一	小樽市若竹町32番29号	32-2730	天笠 弘満
16	朝里スキースクール					
17	オーンズスキー スクール	霜鳥 敏明	霜鳥 敏明	札幌市手稲区前田6条5丁目2-13	011- 683-0567	米塚 洋一
18	キロロスキー& スノーボードアカデミー	栗野 利信	栗野 利信	赤井川村字常盤650		尾坂 直樹
19	双葉高等学校	玉川 祐介	玉川 祐介	小樽市桜3丁目15番28号	64-5211	玉川 祐介
20	北照高等学校	四戸 智也	高校内	小樽市最上2丁目5番1号	32-0331	四戸 智也
21	小樽工業高校 スキークラブ	渡辺 幹夫	渡辺 幹夫	小樽市稲穂3丁目9番1007号	26-6257	松田谷友宏



## 第2章 日本の勝者

### 全日本スキー選手権大会優勝者（小樽関係分）◎は小樽開催

回	開催年	種目	氏名	所属	回	開催年	種目	氏名	所属
1	1923 (T12)	1 km	上野 秀麿	樽 中	19		女子滑降	南 伶子	小樽市女
◎		飛 躍	讃岐 梅二	高 商	20	1942 (S17)	男子新複合	橋本 茂生	早 大
		クリスチャニア	船津 皐二	高 商			女子個人戦	市岡香代子	小樽市女
		継 走(男子)	樽 商		21	1943 (S18)	複 合(成年)	星野 昇	明 大
3	1925 (T13)	長距離	松田 幸義	北海炭鉱			複 合(少年)	久保登志夫	
		飛 躍	青山 馨	北 大			女子個人戦	南 伶子	小樽市女
4	1926 (T15)	飛 躍	伴 素彦	北 大	26	1948 (S23)	長距離(成年)	落合 力松	明 大
8	1930 (S5)	15 km	坪川 武光	早 大		兼国体	飛 躍(成年)	浅木 文雄	北海道
		飛 躍	関口 勇	北海商			複 合(少年)	川崎 義治	学 連
9	1931 (S6)	飛 躍(少年)	安達 五郎	樽 中			新複合(女子)	木谷 初子	北海道
10	1932 (S7)	複 合(成年)	奥井 由雄	北 大	27	1949 (S24)	40 km	落合 力松	明 大
		複 合(少年)	澤本 長市	樽 商		兼国体	複 合(成年)	藤沢 良一	明 大
11	1933 (S8)	長距離(少年)	関戸 力	樽 商			複 合(壮年)	宮島 巖	北海道
		飛 躍(成年)	伊黒 正次	北 大			飛 躍(成年)	星野 昇	北海道
		複 合(成年)	坪川 武光	早 大			飛 躍(少年)	佐藤 耕一	
		複 合(少年)	関戸 力	樽 商			飛 躍(壮年)	宮島 巖	
12	1934 (S9)	耐 久	箕輪 正治	小樽缶友			新複合(成年)	水上 久	
		飛 躍(成年)	伊黒 正次	北 大			回 転(女子)	木谷 初子	北海道
13	1935 (S10)	飛 躍(成年)	安達 五郎	札 鉄	28	1950 (S25)	長距離(少年)	関戸 茂	北海道
		飛 躍(壮年)	秋野 武夫	小 樽		兼国体	飛 躍(成年)	浅木 文雄	北海道
		複 合(成年)	関口 勇	北大若老			複 合(成年)	藤沢 良一	東京都
14	1936 (S11)	飛 躍(少年)	星野 昇	北海商			回 転(女子)	木谷 初子	北海道
15	1937 (S12)	飛 躍(成年)	伊黒 正次	札 鉄	29	1951 (S26)	回 転(女子)	寺岡 敏子	三馬ゴム
		飛 躍(少年)	伊藤 英夫	樽 中			新複合(女子)	寺岡 敏子	三馬ゴム
		男子回転	関口 勇	北大若老	30	1952 (S27)	15 km	菊地 重雄	三馬ゴム
		男子新複合	関口 勇	北大若老			飛 躍	柴野 宏明	早 大
16	1938 (S13)	男子滑降	龍田 鳳三	早 大			滑 降(男子)	斉藤 貢	桜 陽
		女子滑降	末武 清江	小樽スキークラブ			回 転(男子)	金丸 睦郎	東洋高圧
		女子新複合	末武 清江	小樽スキークラブ			新複合(男子)	金丸 睦郎	東洋高圧
17	1939 (S14)	耐 久	関戸 力	旭 鉄			滑 降(女子)	寺岡 敏子	三馬ゴム
		距 離(少年)	落合 力松	北海商			新複合(女子)	寺岡 敏子	三馬ゴム
		飛 躍(成年)	浅木 文雄	北海商	31	1953 (S28)	飛 躍	吉沢 広司	早 大
		飛 躍(少年)	久保登喜夫	樽 中			複 合	藤沢 良一	明 大
18	1940 (S15)	飛 躍(成年)	菅野 駿一	高 商			滑 降(男子)	橋本 茂生	三井芦別
		男子回転	橋本 茂生	樽 商			回 転(男子)	斉藤 貢	早 大
		女子大回転	木元セツ子	小樽市女			回 転(女子)	寺岡 敏子	三馬ゴム
		女子新複合	木元セツ子	小樽市女	33	1955 (S30)	10 km(女子)	須田 桂子	三馬ゴム
19	1941 (S16)	長距離(成年)	落合 力松	明 大			飛 躍	吉沢 広司	同和鉱業
◎		飛 躍(成年)	伊黒 正次	日立製作所			複 合	佐藤 耕一	明 大
		男子回転	近藤 寿夫	小樽鶴裳			滑 降(男子)	斉藤 貢	早 大
		女子大回転	木元セツ子	小樽市女			回 転(女子)	蛭田 佳子	競泳スポーツマンクラブ

回	開催年	種 目	氏 名	所 属	回	開催年	種 目	氏 名	所 属
34	1956(S31)	飛 躍	渋谷 昭男	早 大	45		継 走(女子)	三馬 ゴム	
		滑 降(男子)	金丸 睦郎	東洋高压			飛 躍(90m)	青地 清二	雪印乳業
		大回転(男子)	金丸 睦郎	東洋高压			飛 躍(少年)	斉藤 信和	北 照
		大回転(女子)	大滝はつえ	三馬ゴム			複 合(少年)	勝呂 裕司	北 照
35	1957(S32)	飛 躍	杉山 安久	三井芦別	46	1968(S43)	複 合	勝呂 裕司	北 照
		回 転(女子)	大滝はつえ	三馬ゴム	◎		飛 躍(少年)	勝呂 裕司	北 照
		大回転(女子)	大滝はつえ	三馬ゴム			回 転(男子)	野戸 恒男	ヤマハスキー
36	1958(S33)	継 走(女子)	三馬 ゴム				大回転(男子)	野戸 恒男	ヤマハスキー
◎		飛 躍	吉沢 広司	同和鉱業	47	1969(S44)	継 走(女子)	三馬 ゴム	
		回 転(男子)	金丸 睦郎	東洋高压			飛 躍(少年)	斎藤 幸三	芝浦工大
37	1959(S34)	飛 躍	佐藤 耕一	雪印乳業			複 合	勝呂 裕司	北 照
		複 合	田畑日出春	大嶋農機			複 合(少年)	中野 秀樹	北 照
		回 転(女子)	大滝はつえ	三馬ゴム	48	1970(S45)	飛 躍(少年)	中野 秀樹	北 照
		大回転(女子)	金丸恵美子	平出マグネット			複 合(成年)	中野 秀樹	北 照
38	1960	飛 躍	吉沢 広司	同和鉱業			複 合(少年)	中野 秀樹	北 照
	(S35)	滑 降(女子)	河畑 栄子	双 葉			回 転(女子)	村山八千代	東洋木材
		回 転(女子)	大滝はつえ	三馬ゴム	49	1971(S46)	5 km(女子)	大関 時子	三馬ゴム
		大回転(女子)	大滝はつえ	三馬ゴム			継 走(女子)	三馬 ゴム	
39	1961(S36)	飛 躍	松井 孝	早 大			複 合	勝呂 裕司	日本軽金属
40	1962(S37)	継 走(女子)	双 葉				回 転(男子)	柏木 正義	芝浦工大
		飛 躍(70m)	菊地 定夫	雪印乳業	50	1972(S47)	継 走(女子)	三馬 ゴム	
		飛 躍(90m)	菊地 定夫	雪印乳業			飛 躍(70m)	板垣 宏志	国土計画
		大回転(男子)	大平 義博	早 大			飛 躍(90m)	板垣 宏志	国土計画
		回 転(女子)	中家千鶴子	東洋木材			飛 躍(少年)	川端隆普実	北 照
41	1963(S38)	10 km(女子)	加藤富士子	三馬ゴム	51	1973(S48)	回 転(男子)	柏木 正義	帝国観光
		飛 躍(60m)	菊地 定夫	雪印乳業			回 転(女子)	岡崎恵美子	アジアスキー
		回 転(女子)	細井ミヤ子	東洋木材	52	1974(S49)	複 合	荒谷 一夫	拓 銀
		大回転(女子)	西村 蓉子	東洋木材	53	1975(S50)	複 合	勝呂 裕司	東京美装
42	1964(S39)	30 km	藤崎 進	国鉄北海道	54	1976(S51)	飛 躍(90m)	板垣 宏志	国土計画
		飛 躍(60m)	菊地 定夫	雪印乳業			複 合	荒谷 一夫	拓 銀
		回 転(女子)	細井ミヤ子	東洋木材			複 合(少年)	中津 信雄	北 照
43	1965(S40)	大回転(男子)	野戸 恒男	芝浦工大			滑 降(女子)	佐藤 祐子	トーモク
		滑 降(男子)	野戸 恒男	芝浦工大			回 転(女子)	岡崎恵美子	アジアスキー
44	1966(S41)	30 km	大塚 裕	朝日鉄工			大回転(女子)	岡崎恵美子	アジアスキー
		10 km(女子)	加藤富士子	三馬ゴム	55	1977(S52)	飛 躍(90m)	相内 富久	雪印乳業
		5 km(女子)	加藤富士子	三馬ゴム			滑 降(女子)	佐藤 祐子	トーモク
		継 走(女子)	三馬 ゴム		56	1978(S53)	飛 躍(少年)	八木 弘和	北 照
		飛 躍(90m)	板垣 宏志	明 大			複 合(少年)	橋本 正悟	北 照
		飛 躍(少年)	斎藤 公男	潮 陵			大回転(男子)	上山 利治	西沢スキー
		複 合	板垣 宏志	明 大	57	1979(S54)	滑 降(女子)	佐藤 祐子	トーモク
		回 転(少年)	中谷 弘				回 転(男子)	上山 利治	西沢スキー
		滑 降(女子)	西村 蓉子	ヤマハスキー	58	1980(S55)	滑 降(男子)	相原 博之	北 照
		回 転(女子)	細井ミヤ子	東洋木材			滑 降(女子)	佐藤 祐子	トーモク
45	1967(S42)	10 km(女子)	加藤富士子	三馬ゴム			回 転(男子)	上山 利治	西沢スキー
		5 km(女子)	加藤富士子	三馬ゴム			大回転(男子)	上山 利治	西沢スキー

回	開催年	種 目	氏 名	所 属	回	開催年	種 目	氏 名	所 属
58		飛 躍(少年)	斉藤 孝行	北 照	85	2007(H19)	回 転(男子)	佐々木 明	グローバル・エクステンド
59	1981(S56)	飛 躍(70m)	八木 弘和	拓 銀	86	2008(H20)	ノーマルヒル(女子)	山田いずみ	神戸クリニック
		複 合(少年)	宮崎 秀基	北 照	87	2009(H21)	回 転(男子)	皆川賢太郎	アルビレックス
		滑 降(男子)	相原 博之	日体大	89	2011(H23)	ラージヒル	船木 和喜	フィットスキー
		滑 降(女子)	横尾 恵理	トーモク			回 転(男子)	武田 竜	サンミリオンSC
61	1983(S58)	飛 躍(90m)	八木 弘和	拓 銀	90	2012(H24)	ラージヒル	吉岡 和也	土屋ホーム
		飛 躍(70m)	木村 譲	国鉄北海道			ノーマルヒル	吉岡 和也	土屋ホーム
		滑 降(男子)	相原 博之	日体大			回 転(男子)	佐々木 明	チームエムシ
		回 転(女子)	佐藤 幸恵	昭 和			S大回転(男子)	成田 秀将	北 照
62	1984(S59)	飛 躍(90m)	八木 弘和	拓 銀	91	2013(H25)	回 転(男子)	佐々木 明	石井スポーツSC
		滑 降(男子)	相原 博之	日体大			大回転(男子)	武田 竜	サンミリオンSC
		複 合	宮崎 秀基	東洋実業					
63	1985(S60)	飛 躍(少年)	須田 健仁	東京美装					
		大回転(男子)	岡部 哲也	デザート					
		回 転(女子)	佐藤 幸恵	リーベルマン					
64	1986(S61)	大回転(女子)	佐藤 幸恵	リーベルマン					
65	1987(S62)	滑降1(男子)	相原 博之	道東海大教					
		滑降2(女子)	佐藤 幸恵	リーベルマン					
		回 転(男子)	岡部 哲也	デザート					
		大回転(男子)	岡部 哲也	デザート					
67	1989(H1)	回 転(男子)	岡部 哲也	デザート					
		大回転(男子)	岡部 哲也	デザート					
		滑 降(女子)	加藤 祐希	双 葉					
68	1990(H2)	滑 降(女子)	加藤 祐希	双 葉					
		S大回転(女子)	加藤 祐希	双 葉					
69	1991(H3)	飛 躍(70m)	川崎 清司	東洋実業グループ					
71	1993(H5)	回 転(男子)	岡部 哲也	デザート					
		滑 降(女子)	加藤 祐希	筑波大					
73	1995(H7)	ノーマルヒル	野呂田義一	デザート					
75	1997(H9)	回 転(男子)	皆川賢太郎	日体大					
		滑 降(女子)	鈴木 彩乃	双 葉					
		S大回転(女子)	鈴木 彩乃	双 葉					
76	1998(H10)	大回転(男子)	皆川賢太郎	日体大					
77	1999(H11)	ラージヒル	宮平 秀治	ミズノ					
		大回転(男子)	皆川賢太郎	日体大					
78	2000(H12)	ラージヒル	吉岡 和也	デザート					
79	2001(H13)	大回転(女子)	柏木久美子	SW苗場					
80	2002(H14)	ノーマルヒル(女子)	山田いずみ	浅井学園大職					
81	2003(H15)	ノーマルヒル(女子)	山田いずみ	ロイズ					
82	2004(H16)	大回転(男子)	吉岡 大輔	日体大					
83	2005(H17)	ノーマルヒル	山田いずみ	ロイズ					
84	2006(H18)	ラージヒル	宮平 秀治	ミズノ					
		ノーマルヒル	吉岡 和也	土屋ホーム					
		ノーマルヒル(女子)	山田いずみ	ロイズ					
		大回転(男子)	安食 真治	陸東レーシングSC					

## 国民体育大会スキ一競技会優勝者（小樽関係分）◎は小樽開催

回	開催年	種目	氏名	回	開催年	種目	氏名
3	1948 (S23)	長距離(成年)	落合 力松	14		複合(壮年)	河淵 薫
		飛躍(成年)	浅木 文雄			大回転(少年)	大平 義博
		複合(少年)	川崎 義治			大回転(女子)	大滝はつえ
		新複合(女子)	木谷 初子			15	1960 (S35)
4	1949 (S24)	40 km	落合 力松			飛躍(教員)	中沢 昌俊
		複合(成年)	藤沢 良一			飛躍(壮年)	新田 誠
		複合(壮年)	宮島 巖			複合(成年)	岸本 光夫
		飛躍(成年)	星野 昇			大回転(少年)	伊藤 敏信
		飛躍(少年)	佐藤 耕一	16	1961 (S36)	飛躍(成年)	菊地 定夫
		飛躍(壮年)	宮島 巖			飛躍(少年)	東 恒弘
		新複合(成年)	水上 久			大回転(成年)	大平 義博
		新複合(女子)	木谷 初子			大回転(女子)	須田 節子
5	1950 (S25)	長距離(少年)	関戸 茂	◎17	1962 (S37)	飛躍(成年)	菊地 定夫
		飛躍(成年)	浅木 文雄			飛躍(教員)	沼端 建一
		複合(成年)	藤沢 良一			大回転(成年)	大平 義博
		新複合(女子)	木谷 初子			大回転(壮年)	佐藤 清
6	1951 (S26)	新複合(少年)	斉藤 貢			大回転(女子)	細井ミヤ子
		回転(女子)	寺岡 敏子	18	1963 (S38)	飛躍(教員)	小林 光男
		新複合(女子)	寺岡 敏子			大回転(壮年)	佐藤 清
◎7	1952 (S27)	飛躍	柴野 宏明	19	1964 (S39)	飛躍(成年)	松井 孝
		大回転(女子)	寺岡 敏子			飛躍(教員)	小林 光男
8	1953 (S28)	複合(成年)	藤沢 良一			複合(少年)	板垣 宏志
		継走(女子)	双葉 混成			大回転(壮年)	佐藤 二郎
		大回転(女子)	寺岡 敏子			大回転(女子)	西村 蓉子
9	1954 (S29)	15 km(壮年)	落合 力松	20	1965 (S40)	大回転(女子)	西村 蓉子
		飛躍(成年)	菊地 定夫	21	1966 (S41)	飛躍(少年)	斎藤 公男
		飛躍(少年)	田畑日出春			複合(成年)	板垣 宏志
		複合(成年)	佐藤 耕一			大回転(女子)	細井ミヤ子
		複合(少年)	田畑日出春	22	1967 (S42)	6 km(女子)	加藤富士子
		大回転(成年)	金丸 睦郎			複合(成年)	板垣 宏志
		大回転(教員)	河合 義雄			複合(少年)	勝呂 裕司
10	1955 (S30)	4 km(女子)	笹谷 敏子	23	1968 (S43)	飛躍(少年)	勝呂 裕司
		飛躍	吉沢 広司			複合(少年)	勝呂 裕司
		複合(成年)	佐藤 耕一	24	1969 (S44)	6 km(女子)	樋口佐江子
飛躍(成年)	菊地 定夫	飛躍(少年)	笠原 純一				
		大回転(女子)	大滝はつえ			複合(成年)	板垣 宏志
12	1957 (S32)	飛躍(成年)	菊地 定夫	25	1970 (S45)	複合(成年)	中村 守
13	1958 (S33)	15 km(壮年)	落合 力松			複合(少年)	中野 秀樹
		6 km(女子)	須田 桂子	26	1971 (S46)	複合(成年)	勝呂 裕司
		複合(壮年)	関戸 末広			飛躍(少年)	川端隆普美
		大回転(成年)	佐藤 清	27	1972 (S47)	複合(成年)	勝呂 裕司
14	1959 (S34)	飛躍(成年)	酒井 清孝	28	1973 (S48)	複合(成年)	工藤 幸夫
		飛躍(少年)	大森 享一			29	1974 (S49)

回	開催年	種 目	氏 名
30	1975 (S50)	5 km(成年3部)	村田 健一
		飛 躍(成年1部)	川端隆普実
		飛 躍(成年2部)	板垣 宏志
		複 合(成年2部)	荒谷 一夫
		複 合	勝呂 裕司
		大回転(成年2部)	斉藤 博
		大回転(成年3部)	木村 仁
31	1976	飛 躍(成年3部)	青地 清二
	(S51)	複 合(成年2部)	工藤 幸夫
		複 合(少年)	工藤 哲史
		大回転(成年3部)	木村 仁
		大回転(女子2部)	岡崎恵美子
32	1977 (S52)	大回転(成年3部)	三国屋淳司
		大回転(女子1部)	佐藤 祐子
33	1978 (S53)	飛 躍(少年)	八木 弘和
		複合(成年1部)	中野 秀樹
		複合(成年2部)	大橋 康孝
34	1979 (S54)	飛躍(成年1部)	八木 弘和
		飛躍(成年2部)	大橋 康孝
		大回転(成年3部)	木村 仁
		大回転(少年)	相原 博之
		大回転(女子2部)	佐藤 祐子
◎35	1980 (S55)	飛躍(少年)	斎藤 孝行
		大回転(成年1部)	上山 利治
		大回転(成年3部)	三国屋淳司
		大回転(女子2部)	佐藤 祐子
36	1981 (S56)	大回転(成年2部)	上山 利治
		大回転(成年3部)	木村 仁
		複 合(少年)	宮崎 秀基
37	1982 (S57)	大回転(成年2部)	上山 利治
		大回転(成年3部)	木村 仁
		大回転(少年)	岡部 哲也
38	1983 (S58)	大回転(成年3部)	木村 仁
39	1984 (S59)	大回転(少年)	岡部 哲也
40	1985 (S60)	大回転(成年3部)	木村 仁
		大回転(少年女子)	神 治美
		複 合(成年1部)	宮崎 秀基
44	1989 (H1)	飛 躍(少年)	鶴巻 信也
45	1990 (H2)	飛 躍(成年1部A)	須田 健仁
46	1991 (H3)	飛 躍(成年1部A)	須田 健仁
47	1992 (H4)	大回転(成年1部B)	古川 昇
48	1993 (H5)	飛 躍(少年)	船木 和喜
		大回転(成年1部B)	古川 昇
49	1994 (H6)	大回転(少年女子)	佐藤 友美
50	1995 (H7)	飛 躍(成年1部A)	鶴巻 信也

回	開催年	種 目	氏 名
50		飛 躍(成年1部B)	竹内 卓哉
51	1996 (H8)	飛 躍(成年男子A)	宮平 秀治
		飛 躍(少年)	吉岡 和也
		複 合(少年)	大島 岳久
		大回転(少年)	皆川賢太郎
52	1997 (H9)	飛 躍(少年)	吉岡 和也
53	1998 (H10)	飛 躍(少年)	西下 和記
		大回転(少年女子)	佐藤ひろみ
◎54	1999 (H11)	飛 躍(成年男子A)	須田 健仁
		飛 躍(少年)	西下 和記
55	2000 (H12)	10 km(成年男子C)	高石 敏信
		大回転(成年男子C)	古川 昇
56	2001 (H13)	大回転(成年男子C)	古川 昇
57	2002 (H14)	大回転(成年男子C)	古川 昇
		大回転(少年男子)	四戸 智也
58	2003 (H15)	大回転(成年男子C)	古川 昇
60	2005 (H17)	飛 躍(少年)	田中 翔大
61	2006 (H18)	大回転(少年女子)	長田 愛未
63	2008 (H20)	飛 躍(成年男子B)	西森 享平
64	2009 (H21)	飛 躍(成年男子B)	吉岡 和也
67	2012 (H24)	飛 躍(成年男子B)	船木 和喜
		大回転(少年女子)	石栗 優
68	2013 (H25)	大回転(少年男子)	廣島 聖也

## 全国高等学校スキ一大会優勝者(小樽関係分) ◎は小樽開催

回	開催年	種 目	氏 名	所 属	回	開催年	種 目	氏 名	所 属
3	1954(S29)	距 離(女子)	外村 弘子	双 葉	20	1971(S46)	飛 躍	相内 富久	北 照
		継 走(女子)	双 葉				複 合	中野 秀樹	北 照
		飛 躍	田畑日出春	潮 陵	24	1975(S50)	大回転(女子)	田島恵美子	双 葉
		複 合	田畑日出春	潮 陵	26	1977(S52)	飛 躍	今 巧	北 照
		回転(女子)	大滝はつえ	双 葉			大回転(男子)	大高 弘昭	北 照
		大回転(女子)	原田 淑江	双 葉	◎27	1978(S53)	飛 躍	八木 弘和	北 照
4	1955(S30)	飛 躍	山谷 晃	潮 陵	28	1979(S54)	大回転(男子)	佐藤 謙	北 照
		回 転(男子)	中島 悦雄	潮 陵			大回転(女子)	横尾 恵理	双 葉
5	1956(S31)	継 走(男子)	潮 陵		30	1981(S56)	複 合	宮崎 秀基	北 照
6	1957(S32)	飛 躍	松井 孝	潮 陵	31	1982(S57)	飛 躍	竹内 元康	北 照
		回 転(男子)	北 正明	潮 陵			回 転(女子)	佐藤 幸恵	昭 和
		大回転(男子)	見谷 昌禧	潮 陵	33	1984(S59)	回 転(男子)	後藤 博文	北 照
		回 転(女子)	西谷 紀子	千 秋			回 転(女子)	佐藤 幸恵	昭 和
7	1958(S33)	回 転(男子)	大平 義博	潮 陵	34	1985(S60)	回 転(男子)	伊藤 敦	北 照
		大回転(女子)	黒滝津恵子	双 葉			大回転(男子)	後藤 伸昭	北 照
8	1959(S34)	回 転(男子)	伊藤 敏信	潮 陵	41	1992(H4)	大回転(女子)	佐藤 友美	双 葉
◎9	1960(S35)	回 転(男子)	本間 淳六	潮 陵	42	1993(H5)	大回転(女子)	佐藤 友美	双 葉
		回 転(女子)	細井ミヤ子	千 秋	43	1994(H6)	大回転(女子)	佐藤 友美	双 葉
		大回転(女子)	河畑 栄子	双 葉	45	1996(H8)	飛 躍	斎藤慎一郎	北 照
10	1961(S36)	回転(女子)	岡田 眸	双 葉			回 転(男子)	皆川賢太郎	北 照
		大回転(女子)	細井ミヤ子	千 秋	46	1997(H9)	飛 躍	仲村 和博	北 照
11	1962(S37)	大回転(男子)	野戸 恒男	北 照			回 転(男子)	吉岡 大輔	北 照
		回転(女子)	岡田 眸	双 葉	47	1998(H10)	飛 躍	仲村 和博	北 照
		大回転(女子)	岡田 眸	双 葉			大回転(男子)	吉岡 大輔	北 照
12	1963(S38)	飛 躍	板垣 宏志	潮 陵	48	1999(H11)	大回転(男子)	佐々木 明	北 照
		大回転(男子)	則本 聡	北 照	49	2000(H12)	回 転(男子)	佐々木 明	北 照
13	1964(S39)	飛 躍	板垣 宏志	潮 陵	50	2001(H13)	回 転(男子)	四戸 智也	北 照
		複 合	板垣 宏志	潮 陵			回 転(女子)	沖 聖子	双 葉
14	1965(S40)	飛 躍	斎藤 文宏	潮 陵	52	2003(H15)	回 転(男子)	四戸 智也	北 照
		複 合	斎藤 文宏	潮 陵	54	2005(H17)	飛 躍	田中 翔大	北 照
		大回転(男子)	則本 聡	北 照	56	2007(H19)	回 転(女子)	丸子由里香	北 照
15	1966(S41)	継 走(女子)	双 葉		57	2008(H20)	回 転(男子)	石井 智也	北 照
◎16	1967(S42)	継 走(男子)	北 照				大回転(男子)	石井 智也	北 照
		継 走(女子)	双 葉				大回転(女子)	長田 愛未	北 照
		距 離(女子)	関戸 ゆり	双 葉	58	2009(H21)	大回転(女子)	眞田ひばり	北 照
		飛 躍	斉藤 信和	北 照	59	2010(H22)	回 転(男子)	安藤佑太郎	北 照
		複 合	勝呂 裕司	北 照			回 転(女子)	眞田ひばり	北 照
17	1968(S43)	飛 躍	勝呂 裕司	北 照	60	2011(H23)	大回転(男子)	安藤佑太郎	北 照
		複 合	勝呂 裕司	北 照	61	2012(H24)	回 転(男子)	成田 秀将	北 照
18	1969(S44)	飛 躍	勝呂 裕司	北 照			回 転(女子)	石川 晴菜	北 照
		複 合	勝呂 裕司	北 照			大回転(女子)	石川 晴菜	北 照
19	1970(S45)	複 合	中野 秀樹	北 照	63	2013(H25)	回 転(男子)	降旗 一樹	北 照
							大回転(男子)	中村 舜	双 葉
							大回転(女子)	安藤 麻	北 照



## 第3章 世界で活躍

### オリンピック出場者（小樽出身者・小樽関係者）

回	開催年・開催地	種目	成績	氏名	所属
2	1928 スイス・サンモリッツ	飛躍	36	伴 素彦	北海道帝大
3	1932 米・レークプラシッド	18.2km	15	坪川 武光	早 大
		複合	15	"	"
		飛躍	8	安達 五郎	札 鉄
		飛躍	—	関口 勇	北海道帝大若老会
4	1936 独・ガルミッシュ・パルテンキルヘン	長距離	55	関戸 力	札 鉄
		継走	12	"	"
		複合	35	"	"
		アルペン複合	失格	"	"
		複合	29	関口 勇	北海道帝大若老会
		アルペン複合	失格	"	"
		飛躍	7	伊黒 正次	札 鉄
		飛躍	31	宮嶋 巖	高 商
		飛躍	45	安達 五郎	札 鉄
6	1952 ノルウェー・オスロ	飛躍	46	龍田 峻次	早 大
		15km	61	藤沢 良一	明 大
		複合	14	"	"
		飛躍	34	"	"
		飛躍	27	渡部 龍雄	三井鉱山
		飛躍	36	吉沢 広司	早 大
		飛躍	42	川島 弘三	明 大
		回転	失格	水上 久	国 鉄
		大回転	26	"	"
7	1956 伊・コルティナ・ダンペッツォ	滑降	失格	"	"
		飛躍	13	吉沢 広司	同和鉱業
		複合	途中棄権	"	"
		飛躍	39	佐藤 耕一	クローバー・バター
8	1960 米・スコobarレー	複合	33	"	"
		飛躍	15	菊地 定夫	雪印乳業
		飛躍	22	佐藤 耕一	雪印乳業
		飛躍	30	松井 孝	早 大
		回転	失格	見谷 昌禧	早 大
		大回転	33	"	"
9	1964 奥・インスブルック	滑降	53	"	"
		飛躍(70m)	26	菊地 定夫	雪印乳業
		飛躍(90m)	47	"	"
		回転	38	大平 義博	東洋木材
		滑降	57	"	"
		大回転	35	野戸 恒男	芝浦工大
		滑降	46	"	"



回	開催年・開催地	種目	成績	氏名	所属
10	1968 仏・グルノーブル	飛躍 (90m)	26	青地 清二	雪印乳業
		飛躍	—	杉本 政徳	早 大
		複合	10	板垣 宏志	明 大
		5 km (女子)	23	加藤富士子	三馬ゴム
		10km (女子)	32	〃	〃
		回 転	失格	野戸 恒男	日本楽器
		大回転	40	〃	〃
		滑 降	45	〃	〃
11	1972 札幌	飛躍 (70m)	3	青地 清二	雪印乳業
		飛躍 (90m)	19	板垣 宏志	国土計画
		複合	5	勝呂 裕司	日本軽金属
		複合	13	中野 秀樹	早 大
		複合	15	荒谷 一夫	拓 銀
		30 k m	44	工藤 誠二	国 鉄
		50 k m	29	〃	〃
		5 km (女子)	37	大関 時子	三馬ゴム
		10km (女子)	33	〃	〃
		継走 (女子)	9	〃	〃
		回 転	18	柏木 正義	日仏貿易
		大回転	失格	〃	〃
		回転 (女子)	13	岡崎恵美子	アジアスキー
		大回転 (女子)	32	〃	〃
		滑降 (女子)	41	〃	〃
12	1976 墺・インスブルック	飛躍 (70m)	20	板垣 宏志	国土計画
		飛躍 (90m)	33	〃	〃
		複合	21	勝呂 裕司	東京美装
13	1980 米・レークプラシッド	飛躍 (70m)	2	八木 弘和	拓 銀
		飛躍 (90m)	19	〃	〃
		飛躍 (70m)	29	川端隆普美	拓 銀
		飛躍 (90m)	32	〃	〃
14	1984 ユーゴスラビア・サラエボ	飛躍 (70m)	55	八木 弘和	拓 銀
		飛躍 (90m)	19	〃	〃
15	1988 加・カルガリー	複合	37	宮崎 秀基	東洋実業グループ
		複合 (団体)	9	〃	〃
		回 転	12	岡部 哲也	デサント
		大回転	28	〃	〃
16	1992 仏・アルペールビル	ノーマルヒル	39	須田 健仁	東京美装
		ラージヒル	17	〃	〃
		飛躍 (団体)	4	〃	〃
		回 転	18	岡部 哲也	デサント
17	1994 ノルウェー・リレハンメル	飛躍	—	須田 健仁	東京美装
		回 転	途中棄権	岡部 哲也	デサント
18	1998 長野	ノーマルヒル	2	船木 和喜	デサント
		ラージヒル	1	〃	〃
		飛躍 (団体)	1	〃	〃

回	開催年・開催地	種目	成績	氏名	所属
18	1998 長野	飛躍	—	須田 健仁	東京美装
		飛躍	—	宮平 秀治	ミズノ
		飛躍	—	吉岡 和也	デサント
		回転	21	皆川賢太郎	日体大
		大回転	29	〃	〃
		回転(女子)	24	柏木久美子	小樽スキー連盟
		大回転(女子)	27	〃	〃
		S大回転(女子)	36	〃	〃
19	2002 米・ソルトレークシティ	ノーマルヒル	9	船木 和喜	フィットスキー
		ラージヒル	7	〃	〃
		飛躍(団体)	5	〃	〃
		ラージヒル	24	宮平 秀治	ミズノ
		飛躍(団体)	5	〃	〃
		回転	失格	皆川賢太郎	エオス
		回転	途中棄権	佐々木 明	日体大
		大回転	34	〃	〃
		回転(女子)	16	柏木久美子	苗場スキーアカデミー
		大回転(女子)	35	〃	〃
		モーグル	26	中元 勝也	ニセコB&J
20	2006 伊・トリノ	回転	4	皆川賢太郎	アルビレックス新潟
		回転	失格	佐々木 明	エムシ
		大回転	失格	〃	〃
		大回転	24	吉岡 大輔	アルビレックス新潟
21	2010 加・バンクーバー	回転	途中棄権	皆川賢太郎	竹村総合設備
		回転	18	佐々木 明	エムシ



## 第4章 小樽スキー一年表

(◆は国外などの主な事項)

### 1912(明治45・大正元)年

- レルヒ中佐が旭川7師団でスキー指導、小樽から奥谷甚吉(小樽新聞記者、後に小樽市議)、佐藤林三(小樽高女教諭)、松丸乙近(同)が受講(2月)
- 苫米地英俊小樽高商講師(後に校長、衆議院議員、参議院議員)、高田のスキー講習参加、高田製スキー3台(1台6円50銭)を購入(2月)
- 札幌25聯隊三瓶勝美中尉ら来樽、花園公園で公開指導。地元からも13台のスキー参加(4月)
- 高商校友会スキー部創設(10月)
- 小樽スキー倶楽部発起人会(10月28日)
- 高商敷地などで「レルヒ中佐の直弟子」中澤治平少尉を講師にスキー講習会、約40人参加(12~3月)
- 笠原下駄店でスキー製作
- 梅屋商店がスキー試作品製作
- 音崎鉄工場がスキー製造販売(貸スキー1日30銭)。柴田工場もスキー製造販売に着手

### 1913(大正2)年

- 小樽中でスキー練習規定設定、有志が練習開始(1月)
- 札幌スキー倶楽部の小樽壮行会。札幌合同チーム約110人が花園公園で練習後、稲穂岳の斜面滑走(2月)
- 小樽スキー倶楽部発会式(3月31日)
- 第1回小樽スキー大会(3月31日)
- 樽中校友会がスキー部創立、予算63円24銭(5月)
- 庁立水産学校がスキー部創立(11月)
- 庁立小樽商がスキー部創立

### 1914(大正3)年

- 道内初の競技会、北大スキー部大会が銭函で行われる。約2kmのデスタンス・レース(2月)
- 梅屋がスキー製造開始

### 1915(大正4)年

- 北大スキー部が緑町地獄坂・兵藤宅で合宿練習
- 梅屋がアルパインスキー販売(パネつき単杖5円)

### 1916(大正5)年

- 小樽スキー倶楽部事務所を梅屋に置く
- 遠藤吉三郎北大教授、毛無山一帯のスキー場を拓く。遠藤山と名付ける

### 1917(大正6)年

- 庁商第1回スキー大会開催

○大矢敏範(樽中-北大)が指導書「HOW TO SKI」でジャンプ独習。緑ヶ丘に仮設ジャンプ台(20m級、木組)を造り練習開始

○北海商業(現北照高)スキー部創立

○遠藤北大教授が遠藤山-大毛無-蘭島のスキーツアー実施(2月)

### 1918(大正7)年

- 庁商300名が天狗山スキー登山(1月)
- 第1回樽中スキー大会、住吉神社裏南斜面で開催(2月)
- 踏皚倶楽部発会式(2月)
- 信香町の前田大工、スキー製作

### 1919(大正8)年

- 踏皚倶楽部、小樽スキークラブと改称(12月)
- 梅屋主催でスキー展覧会開く(12月)

### 1920(大正9)年

- 小樽スキークラブが発会式(1月)
- 小樽スキークラブ命名記念スキー大会、聖ヶ丘で開催(1月)
- 第1回札幌中等学校スキー駅伝競走(北大スキー部主催)、庁商が優勝(1月)
- 大矢敏範、庁商スキー大会でジャンプ21mを記録
- 堺町のキング商会がスキー部設置(12月)

### 1921(大正10)年

- 庁立小樽高女で初のスキー授業
- 夜間スキー練習場開設
- 小樽スキー倶楽部創立総会(9月25日)
- 小川スキー工業所創業

### 1922(大正11)年

- 緑ヶ丘で全国スキー大会開催。種目は3哩マラソンとジャンプ(2月)

### 1923(大正12)年

- 札幌中学スキー駅伝で樽中が初優勝
- 全日本スキー北海道予選会、緑ヶ丘で開催(2月)
- 第1回全日本スキー選手権大会、緑ヶ丘で開催、全国6地区対抗制、7種目に150人が参加(2月10~11日)
- アルペンスキー倶楽部発足

### 1924(大正13)年

- 第1回全小樽スキー大会(2月)
- 小樽スキー倶楽部と北大スキー部の和解覚書を交換。第1回全日本選手権道予選を巡る紛糾に終止符(10月)

- スキー倶楽部主催映画会「スキーの驚異」を公園館で上映。純益248円8銭(11月)
  - ◆第1回冬季オリンピック、シャモニー・モンブランで開催(日本は不参加)
  - ◆国際スキー連盟(F I S)創立
- 1925(大正14)年**
- 聖ヶ丘練習会(1月)
  - 第2回全小樽スキー大会(2月)
  - O・S・Cタイムス(OTARU SKI CLUB TIMES)発行(2月)
  - ◆全日本スキー連盟(S A J)発足、初代会長に稲田昌植男爵(北大出身)就任(2月15日)
- 1926(大正15・昭和元)年**
- 高商スキー部が第1回全国実業団スキーリレー大会開催(1月)
  - 第3回全小樽スキー大会(2月)
  - 小樽シャンツェ地鎮祭(11月)
  - 奥沢町の河原氏が奥沢青年団スキー部の後援を受け育成院前にスキー場設置(11月)
  - 小樽スキー倶楽部に婦人、少年両部新設
- 1927(昭和2)年**
- ◆大正天皇崩御により各種競技会中止
  - 夜間スキー講習会開く(11月)
  - 小樽体育連盟(現小樽体育協会)が発会式。小樽スキー倶楽部など10団体加盟(12月)
- 1928(昭和3)年**
- ◆第2回冬季オリンピック、サンモリッツで開催。日本が初参加し伴素彦(樽中一北大、後にS A J会長)が代表に
  - 天狗山で神宮大会北海道予選開催(1月)
  - 全小樽スキー大会を開催し、天狗山新シャンツェ使用(2月)
  - 秩父宮殿下御来樽。スキー滑走及び視察(3月)
  - 朝里岳ヒュッテ完成(11月)
  - 小樽シャンツェ開き(12月)
  - 小樽教職員スキー大会始まる
- 1929(昭和4)年**
- ノルウェーのヘルセット中尉一行来樽、ジャンプ、距離競技の指導(1月)
  - 高松宮殿下御来樽(1月)
  - 第6回全小樽スキー大会(2月)
  - 教職員スキー講習会を開始(12月)
  - 高橋次郎「アールバルグスキー術」発刊
- 1930(昭和5)年**
- ◆宮様スキー大会始まる(1月)
- 全道中等学校スキー大会が始まり、庁商が総合優勝(1月)
  - 第7回全小樽スキー大会(2月)
  - ハンネス・シュナイダー(オーストリアのスキー講師。「アルペンスキーの父」として知られ映画「スキーの驚異」を制作)来樽、実技指導と講演(3月)
  - 小樽スキー倶楽部創立10周年記念式典と記念誌発行(12月)
  - 樽中校庭に15mジャンプ練習台完成
  - 毛利氏(アジア商会)がストックリング、縮具の製造販売を開始
- 1931(昭和6)年**
- 第2回全道中等学校大会で庁商2連勝
  - 第8回小学生スキー大会(全小樽スキー大会より小学生部門独立)(2月)
  - ◆大倉シャンツェが完成(1970年「大倉山」に改称)。秩父宮殿下のおことばにより大倉財閥総帥・大倉喜七郎男爵が私財を投じ建設(11月)
  - 新シャンツェを小樽シャンツェと命名、落成式(12月)
  - 高商シャンツェ開き、竣工式(12月)
  - 樽中スキーヒュッテ開きと、潮陵スキークラブ発会式(12月)
  - 長橋町で山楽荘スキー倶楽部創立(12月)
- 1932(昭和7)年**
- 小樽スキー倶楽部の天狗山ヒュッテ竣工(1月)
  - 木材商・野村軍規氏がスキー製造を始める
  - ◆第3回冬季オリンピック(レークプラシッド)、安達五郎(樽中一札鉄)ジャンプ8位、関口勇(北海商一北大若老会)坪川武光(奥沢小出身、早大)も代表
  - ◆北海道スキー連盟創立、初代会長に後藤耕造就任。同じ日北海道体育協会設立
- 1933(昭和8)年**
- 第4回全道中等学校大会で庁商優勝
  - 皇太子殿下御降誕記念シャンツェ完成(7月)、同シャンツェ開き(12月)
- 1934(昭和9)年**
- ◆万国学生スキー大会(スイス)で木越定彦(樽中一明大)が16km優勝。栗山巍(樽中一早大)複合4位ジャンプ6位入賞
  - 小樽公園グラウンドにシャンツェ3台竣工(スキー靴製造も行っていた長靴メーカー日東ゴムが建設費負担)、日東シャンツェとしてジャンプ台開き(12月)

- 樽中シャンツェに全国初の夜間照明(12月)
- 日本特許スキー工業所創業(昭和13年まで)
- 1935(昭和10)年**
  - 第8回全日本学生選手権大会、小樽開催(1月)
  - 記念シャンツェで全国スキージャンプ大会開催(2月)
  - ◆北手宮小で雪まつり開催(雪まつりのルーツ)(2月)
  - 小樽出身スキー選手後援会の発会式(11月)
- 1936(昭和11)年**
  - ◆第4回冬季オリンピック(ガルミッシュ・パルテンキルヘン)開催、日本選手団15人中9人が小樽出身、ジャンプ陣4選手は全員樽中出身。伊黒正次ジャンプ7位
  - ◆第5回冬季オリンピック会場に札幌決定
  - 皇太子殿下御降誕記念飛躍大会開催(1月)
  - 第1回国鉄対抗スキー大会開催(2月)
  - 柴田、今井両氏が大雪山踏破(4月)
  - 小樽山岳スキー倶楽部発会式(11月)
  - 野村スキーが国内初の合板スキー製作、翌年特許取得
- 1937(昭和12)年**
  - 小樽製缶健康保険組合が塩谷丸山に製缶ヒュッテ開き(1月)
  - ◆全日本選手権にアルペン種目加わる
- 1938(昭和13)年**
  - 第11回全日本学生選手権大会(1月)
  - 第9回全道中学で庁商優勝(4回目)
  - 第1回全小樽スキー大会開く(2月)
  - 小樽壮岳スキークラブ結成
  - 小樽アルペンクラブ結成
  - ◆世界スキー選手権大会初参加、小樽出身の伊黒正次、藤山嘉造代表に
- 1939(昭和14)年**
  - 第10回全道中学で庁商2連勝(1月)
  - 第10回宮様大会で浅木文雄、79mの国内最長不倒。52年まで記録破られず(2月)
  - ◆2月26日全国皆スキー行進日
  - 小樽スキー倶楽部は小樽スキー連盟に改組決定(5月29日)、10月11日創立総会
  - 第1回指導者検定講習会(高橋次郎高商教授が委員長)で日本初の指導員11人認定。小樽から柴田信一、末武久、曾田起一郎の3人(12月)
  - ◆全国スキー講習会開く、3600人受講
  - ◆第5回冬季オリンピックの札幌開催返上(7月)

- 1940(昭和15)年**
  - 第11回全道中学で庁商初の3連覇(1月)
  - 小樽建国スキー祭(2月)
- 1941(昭和16)年**
  - 第12回全道中学で北海商が初優勝
  - 第14回全日本学生選手権大会開催。戦前最後のインカレ(1月)
  - 第19回全日本選手権・アルペン種目開催、ノルディックは札幌(2月)
  - 小樽教育会の教職員スキー大会開催(2月)
  - 紀元二千六百年奉祝明治神宮冬季大会開催(2月)
  - 第1回天狗山回転競技大会
  - 本多家具店運道具部がスキー製作(アジア商会の前身)
- 1942(昭和17)年**
  - 第13回全道中学で北海商が連覇(1月)
  - 道スキー連盟、道体協スキー部会に改組。初代部会長に高橋次郎
- 1943(昭和18)年**
  - 第14回全道中学で北海商3連覇(1月)
  - 全国学徒スキー大会開催(1月)
  - 第19回小学生スキー大会を国民学校スキー大会と名称を替え開催
  - 第1回国民練成スキー回転競技会開催
- 1944(昭和19)年**
  - ◆全日本選手権、全日本学生、神宮大会など全国大会は中止。雪上訓練の名目で国防スキー大会開催
- 1945(昭和20)年**
  - ◆太平洋戦争終わる(8月)
  - ◆財団法人全日本スキー連盟再発足(12月)
- 1946(昭和21)年**
  - ◆第1回北海道スキー選手権大会始まる
  - ◆全道中学大会復活(2月)
  - 北海道スキー連盟再発足  
会長に高橋次郎、理事長に秋野武夫就任
  - 文部省主催のスキー講習会、小樽で開催(1月)
  - 樽中仮設ジャンプ台(15m級)完成(12月)
- 1947(昭和22)年**
  - 全日本学生選手権復活大会開催(1月)
  - 指導者検定講習会開催
- 1948(昭和23)年**
  - 第21回全日本学生選手権開催(1月)
  - 第3回全道中学で樽中が初優勝(2月)
  - ◆第3回国体スキー長野県野沢で開催。

- 復活全日本選手権を兼ねる(3月)
- 小樽スキー連盟、個人会員を募集
- 1949(昭和24)年**
  - 従来の中学大会に替わる第1回全道高校大会開催。小樽商初優勝(2月)
  - 高松宮、三笠宮両殿下御来樽。歓迎ジャンプ・スラローム大会開く(3月)
  - 戦後初のオリンピック強化合宿(3月)
  - 量徳小に仮設ジャンプ台、サマージャンプ開催(7月)
  - アジアスキー工業設立
- 1950(昭和25)年**
  - 第2回全道高校大会で男子小樽商・女子小樽女優勝
  - 第1回小学生バンビスキー大会開催(三角山)
  - 秋野武夫、道スキー連盟副会長に
- 1951(昭和26)年**
  - 第3回全道高校大会で男子小樽緑陵、女子小樽桜陽定時優勝
  - 小樽シャンツェ(80m級)完成、高松宮殿下が御来樽し命名式(1月)
  - 小樽スキー学校発足、参加65名
  - 第1回小樽小学生アルペンスキー大会
  - ◆国際スキー連盟が日本の復帰承認(4月)
  - ◆第6回冬季オリンピック日本代表決まる。選手7人中5人が小樽出身者(10月)
- 1952(昭和27)年**
  - 道スキー連盟会長高橋次郎逝去(1月)
  - 第4回全道高校大会で女子桜陽定時2連勝(2月)
  - 天狗山スキーリフト完成(512m)。道内初
  - ◆第6回冬季オリンピック、オスロで開催
  - ◆宮様スキー大会で柴野宏明(緑陵-早大)が84mの国内最長不倒記録(2月)
  - 第7回国体スキーを天狗山などで開催。女子距離競技新設、役員・選手1100名参加(3月)。この年から国体と全日本が分離
- 1953(昭和28)年**
  - 第5回全道高校大会開催。女子双葉が初優勝し、以後総合23連勝飾る(1月)
  - 全国高校大会で双葉が初の総合優勝、以後総合3連覇
  - 第1回アジアスラローム大会始まる
- 1954(昭和29)年**
  - 第27回全日本学生選手権大会開催(1月)
  - 第1回天理教体育大会スキー競技会開催。参加1000名、宗教団体として初(1月)
  - 全国高校大会で潮陵、双葉が共に総合優勝

- ◆世界選手権大会に日本初参加。選手8人中4人が小樽出身者(2月)
- フランスからピエール・ギョー、アンリ・オレイエ来樽。天狗山で講習会(3月)
- 第1回少年ジャンプ大会開く
- 市民スラローム大会開く
- 1955(昭和30)年**
  - 第10回北海道選手権大会開催(2月)
  - 橋本茂生(樽商OB)フランス国立スキー学校留学(2月)
  - 加盟団体対抗競技会開く(3月)
  - 野村スキー、国内で初めてジュラルミンスキー製作。小川スキーで合板製作
- 1956(昭和31)年**
  - ◆第7回冬季オリンピック、コルチナで開催。吉沢広司、佐藤耕一が出場
  - 第8回全道高校大会開催。男子潮陵3連勝、女子双葉4連勝(1月)
  - 第5回全国高校大会で男子潮陵優勝
  - 道スキー連盟会長に秋野武夫就任
  - 池田シャンツェ開き(2月)
  - 朝里川温泉スキー場開業
- 1957(昭和32)年**
  - 第30回全日本学生選手権大会開催(1月)
  - 第12回全道選手権アルペン開催(2月)
  - 第6回全国高校大会で男子潮陵、史上最多得点(80点)で2連勝
  - 小樽山岳会、天狗山でスキーパトロール始める
  - 西ドイツの国際見本市に野村スキーが日本で初めてスキーを出品
- 1958(昭和33)年**
  - 第7回全国高校大会で女子双葉4回目の優勝(2月)
  - 第36回全日本選手権ノルディック競技開催(2月)
  - キリヨーネン、インモネン(フィンランド)来樽、ジャンプ練習会開く(3月)
  - 佐藤耕一92mの国内最長不倒を記録
  - 藤沢伸光、道スキー連盟理事長就任
- 1959(昭和34)年**
  - 第11回全道高校大会開催(1月)
  - ◆第30回宮様スキー国際競技会開く。外国選手が初参加(3月)
  - 日赤スキーパトロール誕生
  - アジアスキー桜町工場完成

- 緑陵高スキーハウス竣工
- 天狗山スキーリフト延長、758mに

#### 1960(昭和35)年

- ◆第8回冬季オリンピック、スコーパーレーで開催。小樽出身者4人出場
- 第33回全日本学生アルペン開催(1月)
- 第9回全国高校大会開催。194校、619名参加。女子双葉優勝(2月)
- 第1回小樽ジャンプ学校開く
- 第1回秋野杯争奪ジャンプ大会
- アジアスキーが米・シアトルに1万台のスキーを輸出
- ◆日本スキー発祥50周年記念祭。故高橋次郎、秋野武夫、功労者表彰受く(12月)

#### 1961(昭和36)年

- 第16回全道選手権大会開催(1月)
- 第10回全国高校大会で女子双葉優勝(2月)
- ◆札幌市が1968年冬季オリンピック開催地に立候補(3月)
- 天狗山シャンツェ90mに改修
- 野村スキーでプラスチックスキー第1号完成
- 小樽ジャンプクラブ創立(10月)
- 緑陵高ジャンプ台完成(11月)

#### 1962(昭和37)年

- 第11回全国高校大会で男子北照、女子双葉優勝(2月)
- 第17回国体スキーを開催。35都道府県、1453名が参加。本道が圧勝(2月)
- 世界選手権アルペンに河畑栄子(双葉OG)出場、女性として初(2月)
- ジャンプの菊地定夫、国内13大会中12タイトル
- 柴田信一、インターシー代表に
- 野村スキーがグラスファイバースキー国産第1号製作(8月)

#### 1963(昭和38)年

- 第15回全道高校大会開催。男子北照優勝、女子双葉11連勝(1月)
- 第18回全道選手権ノルディック開催(1月)
- 第12回全国高校大会で双葉4連勝(史上初)達成(2月)

#### 1964(昭和39)年

- ◆第9回冬季オリンピック、インスブルックで開く。菊地定夫、大平義博、野戸恒男3選手が代表
- ◆札幌市の第10回冬季五輪招致失敗(2月)
- 第16回全道高校アルペン開催(1月)
- 第19回全道選手権ノルディック開催(1月)

- NHK全日本選抜スラローム大会始まる
- 距離の加藤富士子(双葉)、高校生で日本チャンピオンに(2月)

- 第1回NHK杯少年ジャンプ始まる(3月)

#### 1965(昭和40)年

- 第17回全道高校大会開催(1月)
- 柴田信一、2度目のインターシーへ参加
- 天狗山民営スカイウェイリフト建設
- 春香スキー場開業

#### 1966(昭和41)年

- 第5回全道学生選手権大会開催(1月)
- ジュニアアルペン大会始まる
- 天狗山60m級シャンツェ新設(12月)
- 柴田信一、道スキー連盟副会長就任
- 天狗山市営リフト移設
- ◆第11回冬季オリンピックの札幌市開催、IOC総会で決定(4月)

#### 1967(昭和42)年

- 第16回全国高校大会開催。男子北照優勝(2月)
- 第1回スキー指導員大回転競技始まる

#### 1968(昭和43)年

- 第20回全道高校大会開催。男子北照、女子双葉優勝(1月)
- ◆第10回冬季オリンピック、グルノーブルで開く。小樽出身者5人出場(2月)
- 複合の勝呂裕司(北照)、高校生で日本チャンピオンに(2月)
- 第1回全道スラローム兼柴田杯争奪大会始まる(4月)
- ホワイトバレースキー場リフト完成

#### 1969(昭和44)年

- 第1回全道アルペン大回転大会(1月)
- 第47回全日本選手権ノルディック開催、複合で高校生の勝呂2連勝(2月)
- 第19回小学生アルペン大会、ライオンズクラブ共催

#### 1970(昭和45)年

- 第25回全道選手権ノルディック開催(1月)
- 全日本冬季競技総合大会開く。90m級ジャンプを小樽シャンツェで開催(2月)
- 全国高校大会で北照が総合優勝
- ◆札幌オリンピック競技運営本部設置。副本部長に秋野武夫就任

#### 1971(昭和46)年

- 天狗山シャンツェ70m級に改修

○第23回全道高校大会開催、男子北照女子双葉優勝(1月)

○ジャンプ少年団結成(6月)

#### 1972(昭和47)年

◆第11回冬季オリンピック札幌大会。小樽関係者9人出場、70m級ジャンプで青地清二3位、複合勝呂裕司5位入賞。70m級ジャンプは笠谷幸生優勝、金野昭次2位とメダル独占(2月)

○小樽中央ライオンズ杯全国少年ジャンプ大会始まる

○小樽小学生アルペンスキー大会(第22回)参加者が1600人を超え、アルペン競技の1日参加人数世界一

○小樽クロスカントリースキー少年団設立

○道スキー連盟副会長に藤沢伸光就任

#### 1973(昭和48)年

○第28回全道選手権ノルディック開催(1月)

○第1回北海道・ソ連極東地区親善スポーツ大会開催(2月)

○小樽市中学校スキー大会始まる

○全道クロスカントリースキー大会始まる(2009年終了)

○アジア杯、白樺杯、道新杯、小樽市長杯、小樽教育杯の各少年ジャンプ大会始まる

#### 1974(昭和49)年

○第11回全国中学校スキー大会、ジャンプで中津信雄(向陽中、後に雪印乳業監督)優勝

○天狗クラブ杯距離競技始まる

○第10回NHK全日本選抜スラローム大会開催

○スカイウェーリフト市営に

○天狗山麓マラソン大会始まる(10月)

#### 1975(昭和50)年

○第30回全道選手権ノルディック開催(1月)

○北海道・ソ連極東地区親善スキー競技会開催(2月)

○全国ろうあ者冬季スポーツ大会兼全道大会開催

○北海道高等聾学校が連盟加盟

#### 1976(昭和51)年

◆第12回インスブルック冬季オリンピック、板垣広志、勝呂裕司が会場

○第28回全道高校大会で女子双葉24連勝ならず(1月)

#### 1977(昭和52)年

○第29回全道高校大会開催(1月)

◆アルペンワールドカップ富良野大会開く。本道で初めて(2月)

○NHK杯全国少年ジャンプ大会始まる(3月)

○第1回タイガーカップGS大会(後のアシックス杯)開催

#### 1978(昭和53)年

○第27回全国高校大会開催(2月)

○第1回全国ジャンプ少年団交流大会開催

○第1回小樽スキー運動会始まる

○30m級プラスチックジャンプ台潮見台に完成(全道初)

○藤沢伸光、道スキー連盟顧問に

#### 1979(昭和54)年

○ジュニアアルペンGS大会始まる

○市営リフトを北海道中央バスに譲渡(8月)

○天狗山に30人乗りロープウェイ完成(12月)

○ダイヤワックス社が歩くスキー「スラロム」をノルウェーから輸入販売

#### 1980(昭和55)年

◆第13回レークプラシッド冬季オリンピック、八木弘和(北照-拓銀)70m級ジャンプで2位、川端隆普実(北照-明大-拓銀)もジャンプ出場(2月)

◆ワールドカップジャンプ札幌大会初めて開く(1月)

○第35回全道選手権ノルディック開催(1月)

○第35回国体スキー、岐阜・流葉の返上で代替開催。

同時に第4回オールドパワー全国大会開催(2月)

○全国高校大会で北照が総合優勝

○柴田信一道スキー連盟顧問、淵上裕夫副会長に就任

#### 1981(昭和56)年

○第20回全道学生選手権大会開催

○全国高校大会で北照が総合優勝

○第18回全国中学校スキー大会、ジャンプで今堀弘一(潮見台中)優勝

○天狗山に小樽スキー資料館開設

#### 1982(昭和57)年

○第34回全道高校大会開催(1月)

○第21回全道学生スキー選手権大会開催

○木村杯クロスカントリー始まる

○北海道身体障害者スキー大会(アルペン、クロスカントリー)始まる

○宮様スキー大会で八木弘和119mの国内最長不倒記録(3月)

○医師団スキークラブ、凸凹スキークラブ、天狗山レーシングクラブが加盟。加盟24団体となる

#### 1983(昭和58)年

○中央バスカップGS大会始まる

○第38回全道選手権ノルディック開催(1月)



- 第22回全道学生スキー選手権大会開催
- ◆ワールドカップコンバインド札幌大会開く。  
国内初開催(1月)
- F I S公認太平洋カップスキーを天狗山で開催、参加6カ国(2月)
- 小樽スキー連盟前会長秋野武夫逝去(7月)
- 小樽スキー連盟70周年記念式典及び記念誌発刊(11月23日)
- 1984(昭和59)年**
  - ◆第14回サラエボ冬季オリンピック、八木弘和が2大会連続出場
  - 第36回道高校スキー大会(アルペン)
  - 第15回全国聾啞者冬季体育大会
  - 第23回北海道学生スキー選手権大会
  - 第1回沢本杯クロスカントリースキー大会
- 1985(昭和60)年**
  - 全国高校大会で北照が総合優勝
  - 第24回北海道学生スキー選手権大会
  - うめや杯GS大会始まる
  - 故高橋次郎・柴田信一両氏の顕彰レリーフを天狗山スキー資料館に建立(5月)
  - 定期総会で新規約での役員改選
- 1986(昭和61)年**
  - 第18回全道中学校スキー大会
  - 第25回北海道学生スキー選手権大会
  - アシックス杯GS大会(道A級)が第10回を数える
  - NHK杯全国少年ジャンプ大会が第10回を数える
  - ◆第1回アジア冬季競技大会が札幌で開催
- 1987(昭和62)年**
  - 第39回全道高校スキー大会
  - 第26回北海道学生スキー選手権大会
- 1988(昭和63)年**
  - ◆第15回カルガリー冬季オリンピック、複合宮崎秀基(北照-東洋実業G)、アルペン岡部哲也(北照-デサント)が出場
  - ◆アルペン・ワールドカップ(ノルウェー)岡部哲也回転2位
  - 第27回北海道学生スキー選手権大会
  - 全道スラローム大会(道B級)が第20回を数える
- 1989(昭和64・平成元年)年**
  - ◆昭和天皇崩御(1月7日)
  - 第28回北海道学生スキー選手権大会
- 1990(平成2)年**
  - 第22回道民スポーツ後志冬季大会スキー大会開催
  - 柴田信一名誉会長が勲五等瑞宝章受章
- 道連副会長に浅木文雄氏が就任し、瀧上裕夫氏は勇退
- 役員改選が行われ、新たに顧問・参与を委嘱
- 第9回北海道身体障害者冬季スポーツ大会
- 小樽小学生アルペンスキー大会が第40回を数える
- 1991(平成3)年**
  - 市内3スキー場のリフト等利用者数が506万人(平成2年度)でピーク
  - 第54回国体スキー競技会誘致決定
  - 小樽中央ライオンズ杯全国少年ジャンプ大会が第20回を数える
- 1992(平成4)年**
  - ◆第16回アルペールビル冬季オリンピック、アルペン岡部哲也が2大会連続出場。ジャンプ須田健仁(松ヶ枝中-余市高-東京美装)は初出場で団体4位、NH39位、LH17位。須田は以後リレハンメル、長野と3大会連続参加
  - 第44回全道高校スキー大会
  - 潮見台シャンツェ改築が終わり記念式・祝賀会開催
  - 全道クロスカントリースキー大会が第20回を数える
  - 北海道新聞社杯全道少年ジャンプ大会が第20回を数える
  - 中央バスカップGS大会(道A級)が第10回を数える
- 1993(平成5)年**
  - 第25回北海道中学校スキー大会
  - 第31回全国中学校スキー大会、ジャンプで大島岳久(向陽中)優勝
  - 第6回J Rスキー大会
  - 第54回国体スキー競技会の内示があり、準備始まる
  - 沢本杯クロスカントリースキー大会が第10回を数える
- 1994(平成6)年**
  - ◆第17回リレハンメル冬季オリンピック、岡部哲也が3大会連続出場
  - 藤沢伸光名誉会長が勲五等瑞宝章受章
  - 第31回全国中学校スキー大会、ジャンプで吉岡和也(末広中)優勝
  - 全日本スキー連盟公認スキー学校アニバーサリー全国大会開催(朝里川)
  - 役員改選で国体への対応で理事を増強。「国体対策委員会」を連盟内に設置し、選手強化・役員養成・施設設備の充実へむけ活動開始
- 1995(平成7)年**
  - 柴田信一名誉会長が逝去(1月)

## 1996(平成8)年

- 第10回全日本マスターズスキー大会(2月)
- 朝里川温泉シリーズ(SAJ・B級)始まる
- 第45回全国高校スキー北海道予選会

## 1997(平成9)年

- 全日本学生スキー連盟創立70周年記念で表彰を受ける
- クロスカントリー用圧雪車が貸与される

## 1998(平成10)年

- ◆第18回長野冬季オリンピック、ジャンプ船木和喜(北照-デサント)NH2位、LH1位、団体1位。吉岡和也(北照-デサント)、宮平秀治(工業-ミズノ)が初代表。テストジャンパーに葛西賀子(工業高出身)。アルペン皆川賢太郎(北照-日体大)が回転21位、大回転29位、柏木久美子(双葉-小樽スキー連盟)が回転24位、大回転27位、S大回転36位
- 全国高校大会で北照が総合優勝
- 国体予選北海道大会(アルペン)
- 望洋シャンツェ完成(総工費約9億円)
- 藤沢伸光名誉会長逝去(7月)

## 1999(平成11)年

- 第54回国体スキー競技会(みなと・おたる国体)開催(2月18~21日)
- 全国中学校スキー大会で服部七恵(住吉中)が回転、大回転の2種目優勝

## 2000(平成12)年

## 2001(平成13)年

- FIS公認朝里川温泉スラローム競技大会始まる

## 2002(平成14)年

- ◆第19回ソルトレイクシティ冬季オリンピック、船木和喜、宮平秀治がジャンプ団体5位。アルペン皆川賢太郎(エオス)、柏木久美子(苗場スキーアカデミー)が2大会連続出場、佐々木明(北照-日体大)が初代表。モーグル中元勝也(北照-ニセコB&J)が26位

## 2003(平成15)年

- FIS公認岡部哲也杯スラローム競技会が天狗山スキー場で始まる(3月)
- うしおライオンズ杯全国少年ジャンプ大会始まる(3月)

## 2004(平成16)年

## 2005(平成17)年

- 第60回北海道スキー選手権(ノルディック)大会開催(1月)
- 全日本マスターズスキー小樽大会が朝里川温

泉スキー場で開催される(3月)

## 2006(平成18)年

- ◆第20回トリノ冬季オリンピック、アルペン競技に北照OB3選手が会場。皆川賢太郎(アルビレックス新潟)回転4位、佐々木明(エムシ)回転・大回転途中棄権、吉岡大輔(北照-日体大-アルビレックス新潟)大回転24位
- NHK杯全国少年ジャンプ大会が第30回を数える

## 2007(平成19)年

- 第59回南・北北海道高等学校スキー競技選手権大会開催(1月)
- 野戸廣美名誉会長が逝去(1月)

## 2008(平成20)年

## 2009(平成21)年

- 小樽小学生アルペンスキー大会が開催中止に
- SAJ・B級公認北海道チルドレン選手権始まる(朝里会場)

## 2010(平成22)年

- ◆第21回バンクーバー冬季オリンピック、4大会連続出場となる皆川賢太郎(竹村総合設備)は回転途中棄権、3大会連続出場の佐々木明(エムシ)回転18位
- 小樽クロスカントリースキークラブが第1回歩くスキーと雪あそびの集いをからまつ公園で開催(3月)
- ◆小林多喜二が高商在学中に執筆した全集未収録小説「スキー」が発見される。主人公のモデルは高商に実在した体育教師。日露戦争で負傷した不自由な体で、生徒に笑われても懸命にスキーを学ぶ姿を描いている

## 2011(平成23)年

- テングヤマスノースクールが日本でのスキー発祥100周年を記念し無料体験講習会(1、2月)
- 小樽小学生アルペンスキー大会が第60回を数える(3月)

## 2012(平成24)年

- 小樽商科大学が創立百周年記念事業として「おたるスキー発祥100周年記念シンポジウム」開催(2月)
- FIS公認岡部哲也杯スラローム競技会が第10回を数える(第11回はキロロ開催)
- 春香町のスキー場・スノークルーズオーズが廃業を決定するも、運営会社が変わり営業継続

## 2013(平成25)年

- 小樽スキー連盟100周年記念式典開催(9月)



## 第2章 記念碑



記念碑除幕式 平成25年8月22日

### 100周年記念事業として 『天狗の鐘』 建立

場所：天狗山ロープウェイ 山麓駅前

テーマ『スキー場に鳴りわたる、スキー100年の思いを伝える鐘の音』  
屋根の下にある「スィングベル」から吊り下げたチェーンを手で振る  
ことで心地よい鐘の音が響き渡る。



## 第3章 創立100周年記念事業実行委員会

### 組織・役員

#### <設立当初 H24. 1. 24. 時点>

実行委員長	青山 勝	(小樽スキ一連盟 会長)
副実行委員長	小野 民男	( " 副会長)
"	八木 博	( " " )
"	伊藤 啓三	( " " )
"	坂田 行次朗	( " " )
総務部長	工藤 裕	( " 常任理事)
式典部長	松本 徹	( " " )
記念誌部長	石川 稔	( " " )
" 副部長	六条 祐二	( " " )
" "	戸塚 浩司	( " " )
監事	中根 庸光	( " 監事)
	小田原 正弘	( " " )
事務局	輪島 祥司	( " 理事長)
	小鷹 孝一	( " 副理事長)
	飯田 誠一	( " 常任理事)

#### <式典開催 H25. 9. 7. 時点>

実行委員長	青山 勝	(小樽スキ一連盟 会長)
副実行委員長	伊藤 啓三	( " 副会長)
"	坂田 行次朗	( " " )
"	六条 祐二	( " " )
"	輪島 祥司	( " " )
総務部長	工藤 裕	( " 常任理事)
" 副部長	玉川 映一	( " 理事)
" 委員	武田 昌巳	( " " )
" "	石田 要	( " " )
" "	斉藤 博	( " " )
" "	三国谷 淳司	( " " )
" "	渡辺 幹夫	( " " )
" "	玉川 祐介	( " " )
式典部長	松本 徹	( " 常任理事)
" 副部長	畑中 史雄	( " 理事)
" 委員	林 忠彦	( " " )
" "	荒木 誠	( " " )
" "	倉谷 秀之	( " " )
" "	山本 悌二	( " " )

式典委員	本間照康	(小樽スキー連盟理事)
” ”	竹内章	( ” ” )
記念誌部長	石川稔	( ” 常任理事)
” 副部長	金谷浩克	( ” ” )
” 副部長	戸塚浩司	( ” ” )
” 委員	今堀弘一	( ” 理事)
” ”	木村謙	( ” ” )
” ”	石村實	( ” ” )
” ”	大貫祐一	( ” ” )
” ”	岡田和典	( ” ” )
監事	小田原正弘	( ” 監事)
”	一原正明	( ” ” )
事務局局長	小鷹孝一	( ” 理事長)
” 次長	佐藤徳造	( ” 副理事長)
” 事務長	飯田誠一	( ” 常任理事)
” 事務員	松原稔	( ” 理事)

《協力者》	中川喜直	(小樽商科大学教授)
	角野由和	(株北日本広告社小樽営業所長)
	谷嶋真行	(北海道新聞小樽支社総務部次長)
	安原政志	(小樽スキー連盟教育部専門委員)
	杉本正樹	(小樽スキー連盟クロカン部専門委員)

### コラム17 第1回小樽スキー大会 (1913年)

小樽にスキーがもたらされたのは明治45(1912)年が「史実」。同年には早くも高商、翌年に樽中、庁商、水産にスキー部が誕生し、3月30日には小樽スキー倶楽部発会式を兼ねた「第1回小樽スキー大会」が金沢植物園(現富岡町)で開催されている。会員九十数人に加え小中学生数十人が参加した。

## 小樽スキー連盟 創立100周年 記念誌部会

部会長	石川	稔	(常任理事)	ジャンプ部
副部会長	金谷	浩克	(常任理事)	クロカン部
副部会長	戸塚	浩司	(常任理事)	安全対策部
委員	今堀	弘一	(理事)	ジャンプ部
委員	木村	謙	(理事)	ジャンプ部
委員	石村	實	(理事)	クロカン部
委員	大貫	祐一	(理事)	クロカン部
委員	岡田	和典	(理事)	安全対策部

### 《協力者》

中川喜直	小樽商科大学教授
角野由和	(株)北日本広告社小樽営業所長
谷嶋真行	北海道新聞小樽支社総務部次長
安原政志	小樽スキー連盟教育部専門委員
杉本正樹	小樽スキー連盟クロカン部専門委員

## 編集後記

この記念誌を作成するにあたり、快くご協力いただいた多くの皆さまに、心より感謝を申し上げたい。

記念誌部会が結成された後、部会内で一番初めに決めたことは、どこまで歴史をさかのぼり記述をするかであった。前回『雪跡』が発行された八十五周年以降から現在までの十五年か、または、小樽スキー倶楽部誕生からの百年なのかであった。ただ、部会の方々の気持ちはほぼ一致しており、小樽スキー倶楽部の誕生から現在までの出来事や記録を残すということだった。

百年の歴史を築き上げた先人たちのスキーへ対する情熱や輝かしい歴史を、少しでも詳しく残そうという思いで、書籍や報道記録、写真などを求め市立図書館や博物館、新聞社へ足を運び、大会記録などは連盟事務局に残された資料やインターネットなどを活用して調べた。しかし、掛け替えのない貴重なものは、実際に歴史を築き上げてきた方々から聞かせてもらった昔話である。それぞれの関わりや立場で、現代社会では考えられないような出来事や苦労話など、多くの話を聞いていく中、皆さんに共通して感じたことはスキーへ対する強い情熱だった。

私事だが、小中学生時代ジャンプを教えていただいた恩師から、約三十年前に自分達を指導してくれていた時の話を始めて聞きかせてもらうことができた。当時、毎日ジャンプ台に足を運び、汗まみれになってジャンプ台の整備をし、唾を飛ばしながら選手一人ひとりに、熱心な指導をしてきていた。そんな恩師と昔話をする中で感じたことは、父親のような気持ちで一人ひとりの子供と接し、人間として立派に成長してほしいという思いで、指導をしてきていたことだった。「この方がいなければ今の自分はない」ということはいつも思っていたが、改めて当時の気持ちを感じ、感謝の気持ちが込み上げてきた。恩師はその話をした一週間後に急逝してしまったが、最後に感じる事ができた恩師の気持ちを、自分が同じ立場にたった今、これからの選手育成に生かしていきたいと思っている。

今回、記念誌作成がきっかけで、多くの方々の情熱や歴史に触れさせていただき、かわってくれた多くの皆様に改めて感謝申し上げたい。

(記念誌 部会長 石川 稔)

## 小樽スキー連盟 **100**周年記念誌

---

雪  
シュプール  
跡

発 行：小樽スキー連盟  
発行日：2013年9月7日  
印 刷：株式会社 石井印刷

小樽スキー連盟

住 所：〒047-0024  
北海道小樽市花園4丁目1番16号  
TEL&FAX：(0134)23-9703  
<http://www.otaru-ski-association.com/>

---



この記念誌は、伊藤組100年記念基金の助成を受けて作製されたものです



小樽スキー連盟